

地域学研究会 第7回大会 報告

- | | |
|--------------|------------|
| 1. 開会挨拶・来賓挨拶 | 5. 分科会B |
| 2. 大会の趣旨 | 6. 総括セッション |
| 3. 基調講演 | 7. 閉会挨拶 |
| 4. 分科会A | 8. 資料 |

開会挨拶

藤井 正（地域学研究会会長・地域学部長）

本日は、第7回の地域学研究会大会を企画いたしましたところ、朝早くからたくさんの方においでいただきまして、誠にありがとうございます。地域学部は2004年にスタートいたしまして、もう12年が経っております。最初の頃は、地域学部？そんな学部があるの？という疑問も多々聞かれました。教員も学生もその都度説明をしていったわけですが、最近は全国の国立大学をはじめ、地域系の学部があちこちに生まれるようになってまいりました。社会的にも地域というものの重要性がずいぶん理解されるようになってきたのではないかと考えております。我々は、2004年、これからの社会では地域というものが基盤として重要なものになるであろうと、そういう考え方で地域学部をつくり、またその考え方に共感して集まってきた、そういう教員であります。

この地域学研究会というのは、この地域学部を設置するに当たって、従来の学部とは違った新たな計画を、事業を展開していかないとけないということで設け、学部の教育・研究をどうしていくのかという議論を重ね、このような大会も毎年秋に開催してきました。

さて、本日は平田オリザ先生においでいただきまして、「文化政策で人口減少を止める」というタイトルでの基調講演をいただきます。大変お忙しいなか、今日は一日おつき合いをしてくださると聞いております。平田先生の著書の言葉をお借りすれば、これまでのような経済成長は望めない、そういう寂しさも感じつつ、でも、明日いいことがあるような、そういった社会をつくっていく。地域学部もそのための教育・研究を展開していきたいと考えている次第です。

また、今日の午後は分科会を2つ企画しております。ここでは、まさに、明日少しいいことがあるような、そういうことに結びつくような地域での活動を、まさに今展開されている皆さんにおいでいただいております。地域の方と交わるディスカッションをしていきたい。これからの地域社会というものを考えていく、地域の方はもちろんですが、大学の研究者も、学生も一緒になってこれからの社会をつくっていく。どういう社会をつくっていくのか、どうしたらいいのかということを考える。そういった機会になればと考えております。

また、いつもご支援をいただいています鳥取県からは、地域振興部の岡崎隆司部長さんにおいて

いただいております。地域学部のことは大変よくご理解をいただき、ありがたく思っております。

それから、鳥取大学も大学全体の戦略として地域の拠点大学という方向をこれから進めようとしております。そういう中で地域学部もこれまで展開してきた実績を踏まえつつ、4月からは新しい地域学部のカリキュラム、教育組織を展開させたいと思っておりますので、色々ご意見ご支援をいただければと思います。後ほど詳しい説明はあるかと思っておりますけれども、今日はそのような企画、コンセプトで進めてまいりたいと思っております。どうぞ、よろしくおつき合いますようお願い申し上げます。

理事挨拶

法橋 誠（鳥取大学地域連携担当理事）

皆さん、おはようございます。早朝から非常にたくさんの方にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。平田さんにおかれましては、東京を早朝に出発されまして、今日は一日、我々におつき合いいただくということで、厚く感謝を申し上げたいと思います。岡崎部長におかれましては、県の方も震災で大変なところをお越しいただきましてありがとうございます。

さて、冒頭、先月に鳥取県の中部地域で大変大きな地震がございました。非常にたくさんの方の家屋が被害を受けたということで、今でも避難されている方もおありのようでございます。心からお見舞いを申し上げたいと思っております。鳥取大学でも、いち早く地域学部、医学部、工学部の先生方が被災地へ行って色々な活動をしておられます。それから倉吉や三朝のボランティアセンターでは、鳥取大学の学生さんたちがコーディネーターやボランティア活動に携わりました。身内ではありますが、心からお礼を申し上げたいと思っております。

今日は地域学研究会ということで、私も鳥取大学に来ましてから4年が経ちますけれども、毎回楽しみに来させていただいております。先ほど藤井学部長から、全国の中で地域学を冠する学部がどんどん増えてきたというお話がありました。地域というものが注目されるその背景には、やはり国立大学が今非常に厳しい状況に置かれているということが一つあって、色々な大学で改革というものに知恵を絞って苦しんでいるということがあるのだろうと思っております。その一方、世の中の方も、失われた20年とか言われますように、今、日本は非常に閉塞感が漂っているということもあり、地域というものを見つめ直そうという機運が出てきたのかなと思っております。ただ、鳥取大学はそういう国全体の潮流に先駆けて、もう既に10年前からこの地域学部というものを創設して、地域学というものを何とか体系づけようという取り組みをやってきたわけでございます。ただ、これはなかなか難しい作業でございます。地域というものは大切だということとはもとよりですが、それを一つの学問体系にするというのは非常に難しい話なのだろうと思っております。もちろん大学ですから、一人一人の先生はそれぞれの学問領域というものをそれぞれ持っておられます。そういったものを深めるということをこれまでやってこられたわけですが、それを隣の人と共同してやっていくというのは、なかなか大学の教員にとっては難しいことだと考えられます。これを10年間やったのですが、さて、そういったことができてきたのか、やっぱり色々反省してみる点もあるのかなと思っております。ただ、そうはいいまでも、これから人口減少が非常に急激に進んでいくこの日本の中であって、もう一度地域ということを見つめ直すことの価値というのは、これは当然のことではございます。そういった意味からも地域学部というものに対する期待というものは、これからますます大きくなるのだろうと思っております。

先生方は大変だと思います。これまではずっと自分の学問をひたすらやっていけばよかった。ところが、地域というものとのつながりをつくらなければいけないということは、ある意味、大学の教員はあまり得手でないことなのかもしれません。そういったことを乗り越えてやっていかなければならないわけですが、この地域学はある意味では学問の総合化ということが求められているのだろうと思っております。

そういった意味では、今日平田さんをお迎えしたということは非常に意義深いことです。平田さんは演劇の演出をされているわけですが、演劇というのもある意味では人間の行為、あるいは芸術活動、文化活動の総合という面では、地域学に共通する、通じる面があるのかなと思っております。ただ、演劇と地域学はどこが違うのか。現状からいいますと、演劇の演出家というのは絶大な力を持っていて、劇団の一人一人の役者あるいは演出を構成する美術とか音楽とか、そういったものを全て統括する力を持っております。大学でそういった立場に立つ人がなかなかないということがあって、それぞれの役者さん、これは研究者ですが、この方々もそういったふうに演出、振りつけられるということにあまり慣れていないということがあるのだろうと思っております。そういった意味では、地域学というものを体系づける、学問を総合化していくという上において、演劇活動をやっておられる平田さんの今日の講演というのは非常に示唆に富んでいるのではないかと、我々にとって非常に参考になるのではないかと考えているところでございます。

我々は今、地域の拠点になる大学を目指す、そういったカリキュラム改正とか、プログラム開発をやっております。学生の皆さんに卒業後も地域の中に残っていただく活動にまで拡大してやっているとところでございます。我々としては、地域というものを学びながら、地域を自分たちの力でどのように良くしていくかということ、学生と一緒に、学生の若い力でこれから地域の未来を切り開いていただければと考えている次第でございます。

今日の研究会の分科会も含めまして、色々な知見が得られると思います。そういった中で、皆さんと一緒に学んでいければと思いますので、よろしく願いいたします。

来賓挨拶

岡崎隆司（鳥取県地域振興部長）

本日は、地域学研究大会第7回大会がこのように多くの皆様方のご参加のもとに盛大に開催されますことを、まずもって心からお祝い申し上げます。すごいですね、座れない方もいらっしゃると思います。加えまして、藤井地域学部長様はじめ、教職員、そして関係者の皆様方の地域学にかける熱い思いの中で、鳥取大学が地域社会に貢献し得る多くの卒業生を輩出されていますこと、高い席からですが、心から感謝と敬意を表します。そして法橋副学長・理事からもお話がありましたが、10月21日に中部地区での大きな地震に際しまして鳥取大学の皆様方からは温かいお言葉とご声援をいただきました。中部地区そして鳥取県は力強く頑張っております。本当にありがとうございます。

さて、ざっと見回してみますと若い方の参加が多いですね。20年ぐらい前の本を思い出してお話をさせていただきます。私が県庁に入ってちょっとした頃にこんな言葉がありました。「グライダー人間」と「飛行機人間」という言葉です。私がちょうど研修所の担当をしていたり人事の担当をしていたりした頃と思いますが、これは『思考の整理学』という外山滋比古さんの書かれた本ですが、この中にこういう話があります。受動的な知識を得るのが得意、これがグライダー人間。そして、自らが事を考えそして発見する、これが飛行機人間。要するに、自分のエンジンはなくてもそ

の中で飛んでいこうという方々と、自分の力でちょっとした風にはへこたれずに目標に向かって、回り道をしながらでも頑張っていこうよという方々。これはきっとバランスの問題かもしれません。これをちょっと私は考えてみました。

地域学というのは、先ほどおっしゃいましたが、地域の中で課題を見つけて、実践を通して、フィールドワークを通して課題の発見と解決策、地域にある解決策を実践していこうという学問であり、その体系だろうと思います。今までは環境、文化、教育、そして政策の4分野をもって地域学の体系をつくっていった、それで実践していこうというものでありますが、来年度はまさしく、地域創造、人間形成、国際地域文化コースということですね。文化ももちろん入っています。

今日お越しの平田先生は、鳥取で今、開催していますが、鳥の演劇祭、そして、初めて日本の中の鳥取で「BeSeTo演劇祭」を開催しましたが、そのご指導・ご支援を強力に賜っている先生でもあります。日本を代表する劇作家そして演出家でもあります。BeSeToというのは、中国、韓国、日本が持ち回りで開催されている国際演劇祭として、BeはBeijing（ペイジン）の北京ですね。SeはSeoul（ソウル）、ToはTokyo（東京）なのですが、東京と鳥取の「To」は一緒なので、鳥取に持ってきたという、駄じゃれが好きなどこかの知事と一緒にですが（笑声）そういう形でやっています。

こういう中で、本日は、飛行機人間たる平田先生を初めとして、参加者の方々は、今日AとBの2分科会に分かれますが、その方々の発見と驚きに満ちたお話がお聞きできると思います。私も本当は期待しているのですが、実は今日は他用がありますので失礼させていただきます。本日この一日が、皆様方にとって有意義な時間になりますようお祈りしております。

最後になりましたが、本日、ご参集の皆様方のご発展とご健勝をお祈りしまして、簡単ではありますが来賓としての祝辞とさせていただきます。本日はおめでとうございました。

第7回地域学研究会大会の趣旨

家中 茂（地域学研究会副会長・地域学部地域政策学科教授）

福田恵子（地域学研究会副会長・地域学部地域教育学科教授）

○福田氏 それでは、今回の大会の趣旨の説明をさせていただきます。地域学部は2004年に全国に先駆けて誕生した学部です。「地域」というのは、私たちが生活しているその空間とそこでの社会関係、つまり自然環境とか人間活動がその要素となっているものですが、それだからこそ様々な個性が生まれてくるところでもあります。一方、「世界」というものも規模とか性質の異なる、様々な地域が重なり合って形成されています。

一般的に「世界」的な問題として、人口問題とかグローバル化とか、それゆえ色々な格差社会であるとか、貧困などが言われていますが、これを「日本」というもう少し小さな世界に目をやってみると、少子高齢化の問題等でどんどん人口が減っていき、都市と地方の格差が生まれてきて…ということになってきます。では、もう一つ小さく「鳥取」というところで考えてみると、都市部に人口が流出し過疎化はどんどん進行していく。しかも、地方財政も逼迫してきている。こんな現状のなかで、私たちの「身近な地域」に目をやってみると、集落の維持が実際に困難になって限界集落と言われるところも非常にたくさんあります。そして、家とか山とか畑とかといった財が放置されるような現状にあります。そして、子どもの貧困ということも言われておりますし、ひとり暮らしの高齢者とその貧困問題もあります。鳥取市内に目をやりますと、市街地の空洞化ということ

も言われております。ということで、実は、「地域」をベースとして実際考えていくことで、「世界」の問題もそこにつながっていくということです。

地域学部では、2004年の段階から「地域」をベースとして地域の課題を考えていこうとする様々な専門の分野を持った教員が集まっております。その教員たちが、自分の専門分野の方法論とか知見を組み合わせ、地域をベースとして探求を進めてきました。

○**家中氏** この地域の課題が、全体的なものであるということがとても大切だと思っています。中山間地域の課題って何だろうと考えると、人口減少、過疎化、高齢化と同時に仕事がないことです。最近は鳥取に移住したいという人たちがどんどん増えているのですが、でも仕事がない。地域の人も外に出るといことが起きている。しかも、お年寄りのお世話をみんなで見てあげなければいけない、支え合わなければいけないという課題を解決するには、仕事をつくることと、お互いに支え合うという福祉の課題を同時に解決しないといけない。仕事をつくる、でも福祉は専門の人に頼もうでは難しいかなという思いもあって、この課題を一緒に解決するという方法を考えなければいけないと思っています。例えば、空き家の問題、耕作放棄地の問題それから放置山林の問題など、既に鳥取大学の教員や県庁の方でそれぞれ進んでいたりするのですが、そうではないと思うのです。持ち主は中山間地に住んでいるお年寄り一人です。そういう不在地主の問題とかを一緒に考えていくのはどうだろうという研究と、県庁のいろんな部局と一緒にやっていくというアプローチがあったりすることが大切だと思うのです。

それから、もう一つ僕らが気をつけなければいけないことは、今の学問のベースは20世紀にできていますので、それぞれ一生懸命、課題に取り組もうと思うのですが、専門つまり自分の関心から切り取ってくるだけなのですね。そうすると、解決しようとアプローチするのですが、それがやっぱり地域をばらばらに扱ってしまう。課題を断片化してしまう。結局、それを再生産してしまう。ですから、課題も統合的にアプローチする必要があるし、また方法論もお互いにシェアしながら統合していかないと、今の問題は解決しないのではないかと考えています。

○**福田氏 (図)** 地域の方はそれぞれの地域の課題に懸命に取り組まれ、また新しい課題を見つけられ、どんどん次のステップに進まれていっているかと思うのですが、私どもの地域学部では、学部ができた当初から、大学の知、それぞれの専門知でもって地域の課題を探求し、再解釈をして、新たな知に結びつけていくということをしてきたように思います。そして、教員の研究だけではなくて、学生たちを地域の取り組みに参画させていただいて、学ばせていただいておりますね。

○**家中氏** はい。それで、これも僕の発想なのですが、大学は地域の課題解決に取り組む、あるいは大学でそういう学問、研究は非常に大切です。問題解決の方法を開発して、それを提供する関係がとても重要だと思います。しかし、それはともすると、大学の側だけで優れたものを解決して、住民や地域は受け身になってしまうことになりかねない。今までの20世紀型の学問って実験室でやっているのですね。いろんなことをシミュレーションしながらやっていく。ところが、地域、現実には複雑系であって、それにどう対応したらよいかというのが大きな課題であって、それを学問の中で



は「SCIENCE①」から「SCIENCE②」という言い方をしています。そのときに、地域の現実の中に入って行く。僕はクロスってとてもおもしろいなと思うのです。ちょっと例え話がよくないかもしれませんが、アートとか芸術はやっぱり完成度が高く、自分で表現したい。だから、でも、今、地域の中でかかわってアートというものがいろんなところで起きています。同じように地域とかかわりながら、でもやっぱり研究としての価値も高めていく。その両方が必要だと思っています。同時に、地域の方も地域で生きていく、自分たちで生きていく。それはやっぱり根っこが大切なので、大学に依存するということでもないと思うし、そういう意味ではお互いの道を進んでいくわけですが、でも、それだけでは今の課題とかあるいは学問とか、表現はバージョンアップしない。地域の課題も解決しない。ということで、このクロスがとても大切なのかなと思うわけです。地域学研究会のタイトルが、「地域課題と知のクロス」となっていますが、そういう意味合いだと思います。そのときに重要なのが、学生の教育、学生と一緒にこの地域学をつくっていくということです。というのは、学生は大学を出たら地域の中で活動しなければいけない。考える、暮らしていく、仕事をしていく。そのときに、あるべき姿をどう考えていくか。大学の教員は研究者になる教育しか受けていないのです。でも、学生は地域に入っていく。ということで、学生が地域と大学を媒介する、大学の知と地域の地をつないでいく、トランスレートする、そういう役割を担ってほしい。そういう教育が、プログラムができるかどうかということは、これからの地域学部をさらにバージョンアップしていく上では大切だろうと思っています。

○福田氏 補足をありがとうございます。では、先に行きましょう。先ほど、藤井学部長から「地域学研究会」を当初から設置していますとの話がありましたが、本大会も研究会で企画・運営しています。その他にも、地域学部の必修科目の企画・運営を行い、外部の講師の方が来られるときには、一般の方にも公開しています。また、学部紀要を編集していますし、地域学系の他大学・学部等とも連携を進めているところです。そして、地域連携研究員という方もおられ、一緒に研究を進めております。これらの研究は、本日、ポスター発表していただく予定にしております。

これまでこのように進めてきたわけですが、私たちはこのたび地域学部のあり方、地域学のあり方を問い直さなければならぬと考えております。まず一つ目ですけれども、「学際的な視点の充実を図る」ということです。発足当初からもありましたが、一つの学問領域から地域課題の解決を目指すことにはやはり限界があります。それを次にどうステップアップしていくか、先ほど法橋理事からもご指摘があり、「学問の総合化」ということで言われましたけれども、そのあたりを私どもの研究も、また教育もその視点を強くしていく必要があるだろうというのが一つ目の課題です。

それから、二つ目の課題につきましては、「現場往還型の教育、研究の充実を図る」ということです。私たちは「地域学」と当たり前のように言いますが、「地域学」は地域の方々に生活をよりよくするものとして受けとめられてきたのだろうかという問いも、私たちはもう一回考えていかなければなりません。地域と大学の知の融合と言えはいいのかわかりませんが、そのあたりをもう少し強固にしていくために、研究もそして教育も現場往還型の教育、研究の充実を図っていこうと考えています。これらをもっと充実させようというのが新地域学部での挑戦になってきます。今の地域学部は4学科体制ですが、次の4月から1学科体制ということで、さらに学際的に融合してアプローチしていきたいと思っています。

次に、学生たちの様子をご紹介します。今、「地域調査実習」という授業を2単位で組んでおりますが、今度は「地域調査プロジェクト」ということで4単位授業として新たにスタートします。今、見ていただいているのは、学生たちが地域で行っている調査実習の様子です。4単位

の現場往還型の学びで、実践的な力をどんどん身につけていこうというものです。これに加えて、海外でも調査実習をさせていただいております。現在は1科目なのですが、これを2科目にして、学際的に、国の枠を超えて、共に学び合えるような機会も充実させていく予定にしております。

また、学生たちは結構学外で主体的に活動しています。本日、「わいわい淀屋」や「えんがわ活動」の学生たちがポスター発表をしてくれる予定になっております。

本日は「基調講演」を午前中にさせていただいて、午後には「分科会」と「総括セッション」を行います。これらは全てがつながっていくようなものにしたと考えております。

「分科会」につきましては、「分科会A」では、智頭町のタルマーリー経営の渡邊さん、そして智頭農林高等学校の岸本先生、そして智頭ノ森ノ学舎代表の大谷さんということで、智頭を拠点として活躍しておられる方々にご登壇いただく予定になっております。「分科会B」では、地域からどうしてもこれは何とかしなければという地域ニーズが実際に立ち上がって、それに対して取り組んでおられる方々、こども・らぼさん、そして南部町の東西町の地域振興協議会の原さんで、地域包括ケアや地域防災についてお話をさせていただきます。そして、また、中心市街地でご活躍の成清さんにもご登壇していただく予定になっております。

○家中氏 「地域学」というのは大学の中でやるだけではなくて、「地域学」という言葉は使っていないけれど、地域では既に先ほどの智頭の中での林業あるいは食、子育て、そして教育というものが根づいた形で動いています。それから、分科会Bでも、子どもの貧困をはじめ、やむにやまれぬ思いで人々が動き始めている。そこが一番重要なところで、そこから学んでいきたい、そこからもう一度学問とか教育を立て直していきたいというのが、僕らの今回の強い思いです。

○福田氏 そうですね。ということで、最後、そういう総括にまとまっていけたらと思っています。先ほどの図でいきますと、黄色の点線で示したところを今回は課題として皆さんと一緒に話ができたところと思っています。それを踏まえて、「地域で「息づく」地域学へ向けて」ということで、本大会を進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

基調講演「文化政策で人口減少を止める」

平田オリザ氏（劇作家・演出家）

平田です。おはようございます。私は本職は劇作家、演出家で、ご紹介いただいたように作品をつくってみなさんにお届けするのがいちばんの仕事です。ここが県立文化会館・梨花ホールと呼ばれていた頃からたくさん作品を上演させていただきましたし、ワークショップもさせていただきました。もちろん鳥の劇場にもたくさん呼んでいただきました。

しかし、今日はもう一つの専門であります、大学の教員ももう16年やっており、大学では文化政策とか、アートマネジメントも教えておりますので、そちらの話をしていきたいと思っております。

今日はすごいタイトルですね。「文化政策で人口減少を止める」と、無理だと思いますが…（笑声）。まあ、そうも言っておられないので。ずっとこういった仕事をしてい



ので、全国から呼ばれて講演会とかをさせていただくことが多いのですが、この数年、とにかく人口減少について何かしゃべってくださいとか、地方創生の何かアイデアを下さいというご依頼がすごく多くなりました。そもそも劇作家に人口減少について聞くようになったらもうほんとうにこの国は終わりだと思っているのですが、そのぐらいせば詰まっているということと、もちろん今の安倍政権が行っている地方創生というのは、とにかく地方に人口減少対策についてのアイデアを出せと。いいアイデアが出たところからお金をつけるよというのが基本的な考え方ですから、とにかく藁にもすがるような思いで、私のような者にも、とにかくアイデアが何かありませんかと言われるのだと思います。一方で、私、劇作家なので、とりあえず目の前の人を楽しませるという強迫観念があって、それでいろいろ考えたわけです。

スキー人口の問題ですね。これは鳥取県も大変深刻だと思うのですが、スキー人口の減少、どのぐらい減ったのかということですね。驚くべきことに、この20年で3分の1以下になっているわけです。1993年からこれだけ減ってしまった。スノボは増えているのですが、でも、合計でも半分以下に減っているということなわけです。もちろん理由はいくつか言われます。いちばんはやっぱり趣味の多様化ですね。まだ、93年という、インターネットもない時代ですから、インターネット、スマホ、ゲームとか、様々なものが出てきた。それから、もちろん若者たちの貧困の問題があります。若年層の可処分所得が相当減っている。とくに、都心部の若者たちも車とか持っていないから、スキーに行けなくなってしまった。一説によると、若い奴らは根性がなくなって、寒いところに行かなくなった説もあるのですが、海水浴もテニスも減っていますから、それだけではないと。もちろん、いちばんの原因は若者人口そのものの減少です。では、どのぐらい減ったかという、5,000万人から4,000万人に1,000万人減ったのです、この20年で。大変な数です。ただ、割合で言えば2割なのです、減っているのは。スキー人口は半分以下になっている。これはどういうことなのだろうということ。どんな統計学者もどんな観光学者も、若者人口が減ったからスキー人口が減ったと言う。でも、劇作家はそうは見ないのだという話をします。劇作家というのはひねくれたものを見方をするのが商売なので、若者人口が減ったからスキー人口が減ったのではないと。スキー人口が減ったから、若者人口が減ったのだと。もう一回言いますよ、スキー人口が減ったから若者人口が減ったのです。スキーというのは、少なくとも私たちの世代まで、90年代初頭までに大学生活を送った人間たちにとっては、20代の男子が女性を1泊旅行に誘える最も合法的な手段です。これが減ったら当然少子化になるでしょう、それは。(笑声) 当たり前じゃないですか。そんなことにも気がつかないのかということなのです。もちろんスキーは象徴にすぎません。ただ、町の中にジャズ喫茶とかライブハウスとか画廊とか写真館とか、そういうものを全部なくして行って、それで行政がなれない婚活パーティーとかをしている。まったく本末転倒なことになっていますね。

人口減少問題の本質って何か。霞が関が考えているのはこっちです。大事ですね。たとえば、今いちばん問題になっているのは待機児童問題。たくさん、みなさんもワイドショーとかで見ていると思いますけれども、しかし、待機児童問題を抱えている自治体は、数から言えば200にすぎないのです。深刻な待機児童問題を抱えている自治体は100にすぎない。残りの1,500の自治体は子どもが欲しくて欲しくてたまらない自治体です。地方の問題はこっちなのです。非婚化、晩婚化です。実際に結婚した世帯の出産率は変わってないか、もう既に上がり始めているぐらいです。もちろん恋愛も結婚も出産もまったく個人の自由です。行政が介入できる部分は極めて少ない。しかし、人口減少対策、行政の側の視点で言えば、結婚してさえくれれば産んでくれるのです、現状は。でも、

結婚できない。あるいは、結婚が非常に遅れる。これが、地方が抱えているいちばんの問題です。そして、地方に暮らす若い女性たちは口をそろえて、出会いの場がないと言います。あるいは、人口の少ない町では、高校が2つ、3つしかないために、高校進学段階で階層化が起こって、社会が分断されている、あるいはコミュニケーション能力が不足している。だから、出会いの場がないだけではなくて、男女交際ができないというのが地方が抱えている最大の問題なのではないかということです。

もう一つは、私、大学の教員を始めてもう16年ですけども、少なくとも自分のゼミの学生で、地方は雇用がないから帰らないという学生には会ったことがないのです、現実には。たとえば、私、今は東京藝術大学の教員をしています。その前は大阪大学の教員をして、その前は東京の桜美林大学という、普通の中堅私立大学の教員をしていました。桜美林大学は演劇学科だったので、全国から学生が集まってきました。おもしろいと思ったのは、たとえば盛岡から来た学生とか、富山から来た学生が、演劇学科ですから劇団をつくるのですね、大学の中で。私たちの世代と違うのは、もちろん東京で公演を打つだけけれども、夏休みに地元に戻って、実家に劇団員を泊めて、地元でも公演を打ったりしていたのです、現実には。そんなことは、私たちが大学生の頃は考えもしなかった。演劇をやるということは、東京に出て行って貧乏に耐えて、一週間ぐらい風呂も入らずに、そういうことに耐えた奴だけが生き残って、成功したり失敗したり、失敗した奴はすすすすふるさどに帰っていく。別に、中島さんはすすすす帰ったわけではありませんが。しかし、中島さんもそうですよね、東大まで行きながら演劇にはまってしまって、人生を棒に振りかけたわけです。それが私たちの世代の典型です。しかし、今の学生さんたちはそうではなくて、盛岡とか富山とか、地域でも演劇活動が盛んで、活動が続けられるような場所の出身者たちは、将来地元に戻って演劇活動を続けるための知恵やノウハウや人脈を東京で得ようという、そういう新しい世代が出てきました。これ、随分変わってきたなと思いました、2000年代初頭です。

しかし、一方で、私のゼミの学生に姫路出身の学生がいて、4年になるときに、君、どうするのと聞いたわけですね、姫路に帰ると聞いたなら、いや、帰れませんと。姫路はつまらないからと。何にもないから。こんなに東京で楽しい生活をしちゃったら、もう帰れませんと言うのです。その学生は、お父さんが姫路の市議会議員なのです。僕はお目にかかったこともある非常に立派な方です。でも、市議会議員の息子が帰りたくないという町は滅びますよね。(笑声) 確実に滅びます。要するに、学生たちは、少なくとも東京や大阪に出てきた学生たちは口をそろえて、地元はつまらないと言います。つまらないから帰らないと言います。僕は政治家たちにはいつも、「つまらない町をつくれればいいじゃないですか」と、「おもしろい町をつくれればいいじゃないですか」と言います。でも、これは、政治家が口が裂けても言えないのですね。それを言った瞬間に、自分の支持者たちはつまらない人たちだということを公言してしまうことになるので。要するに、ここに残っている人はつまらない人だということになってしまうわけです。でも、これを止めないと、スパイラル状につまらない人だけが残るつまらない町になってしまうのです。なので、要するに、おもしろい町をつくる。もう一つは、出会いのある町をつくる。これ以外に、僕は人口減少対策の本質はないと思っています。

たとえば、私、7月でしたか、NHK山形が制作した人口減少対策の番組に出させていただいたのですが、これは東北地方でしか放送がなかったのですけれども。東北のNHK各局が大規模アンケート調査をしました。東京に住んでいる東北出身の若い女性たちに、Uターン、Jターンを拒むものは何かと。もちろん、いちばんは雇用だったのです。ただし、それも雇用がないという答えではないの

ですね。「自分に合った仕事があるかどうか不安」という答えがいちばん多かったのです。これは、いくつも突っ込みどころありますね。まず、その人、東京で自分に合った仕事をしているのかよということですね。(笑声) してないですよ。ブラック企業とか入っていて、していないのだけれども、東京は何となく自分に合った仕事が見つかる可能性が広がっているだけなのです。でも、結局はない。しかし、いつまでも、その可能性にずっとすがってしまう。

地方は雇用がないわけではないですよ、今。鳥取県も厳しかったと思いますけれども、鳥取県以上に雇用が厳しかった高知県が、昨年ついに有効求人倍率が1.0を超えました。そして、安倍総理は国会でこれを大変威張ったわけですが、これは雇用が増えたわけではないですよ。若者人口が極端に減ってしまったために、人手不足になっただけなのです。(笑声) 雇用はあるのです、選ばなければ。雇用がないとざっくり切り捨てるのは、少なくとも学問的な態度ではない。厳密に言えば、地方では自分に合った仕事だけでは生きていけないのです。そこが問題だと思うのです。でも、成功している自治体は、たとえばNHK東北の番組で取り上げられていたのは鶴岡市ですけれども、鶴岡市では「ナリワイプロジェクト」という事業体をつくって、これはIターンの女性たちが主に参加してますけれども、そこに様々な仕事が投げ入れられます。登録している女性たちが、それを分担して引き受けていきます。要するに、ウェブデザイナーだけだったら、地方だと月収10万円に満たないかもしれない。でも、それにたとえば月のうち5日間は農作業の手伝いをする、3日間は介護の手伝いをする、臨時で引っ越しのお手伝いにも行く、1日2時間だけベビーシッターをする。そうやって積み重ねていくと、月収、手取りで17~18万が十分に実現できる。どの地域でもそうです。要するに人口が少ないわけだから、当然職も少ないでしょう。しかし、その分、一人が複数のポジションをこなせば、十分社会は回っていくはずなのです。生き残ろうとしている地域はみんなそういうシステムをつくらうとしています。要するに雇用がないのではないのです。一つの雇用、いわゆる近代型の、近代社会がつくった一つの仕事で終身雇用というシステムが、もはや地方では適用されなくなっているだけのことなのです。そのシステムを変えてしまえば、そのシステムを放棄すれば、まったく問題なく地域の経済は回っていくということなのです。

さて、そのアンケート調査の一項目は雇用でした。自分に合った仕事があるかどうか不安。二番目が楽しみや居場所があるかどうか不安。もう既に、二番目が文化なのです。三番目が教育、子どもの教育。四番目が医療です。かつては大体、医療、教育、交通、それから文化ぐらいだったのですが、今もう二番目が文化だったのです、そのアンケート調査で。これまで各自治体はIターン者、Jターン者を呼ぶために、来る理由ばかり考えてきたのです。鳥取県にIターン、Jターンを望む方たち、来たい理由は何ですか。必ず自然が豊かと書きますよ、それは。(笑声) でも、自然が豊かな町や村は全国どこにでもあるでしょう。来ない理由を潰していかなくちゃいけないのです。来ない理由は文化と教育と医療なのです。もう医療はほとんど大丈夫ですよ。そうすると、あとは文化と教育ですよ、来ない理由は。そこが心配なのです、若い子育て中のお母さんたちは。ここを解決しない限り、人口減少対策は進まないと私は考えています。

今日その話をこれからしていきたいと思いますけれども、今日夕方までここにいさせていただいて、この後、夜、関西に出て、明日奈良で仕事。その後、四国の善通寺で仕事。その後、宝塚にまた戻ってという、そういう生活をずっとこの20年ぐらいしてきました。全国、国内外、様々なところで仕事をさせていただいているのですけれども、その中で非常に感じるのは、地方都市の風景がすごく画一化してきたなということを感じます。国道があって、バイパスがあって、バイパス沿いにショッピングセンターができて、中心市街地がどんどん寂れていくと。私、実は古い

タイプの教員なので、黒板に書きながらでないとしゃべれないのですが、こんな感じですね。ショッピングセンターができて、こっちがどんどんどんどん寂れていくと。これは、どの地方都市でも抱えている問題です。鳥取市でも非常に深刻な問題になっていると思う。空洞化の問題です。

私は、1979年に初めてアメリカに行ったのですが、70年代末のアメリカの風景に非常によく似てきたなという感じがします。70年代末のアメリカというのは、ベトナム戦争の影を引きずって、アメリカが精神的にも経済的にも最も落ち込んでいた時代でした。白人中産階級は車でショッピングセンターに行って帰ってくるだけ。中心市街地はスラム化して、昼間でも寄りつけない。完全に社会が分断された状況になっていたわけですね。日本はここまでひどくはなっていないのですけれども、現実には空き家、あるいは空き店舗なんかが、いわゆる不良少年たちのたまり場になったり、ホームレスの方たちが住みついてしまったり、あるいはごみ屋敷問題、そういうことが起こって、非常に危険な状態になっている。要するに、スラム化の一手前まで来ているというわけです。ただ、今日は若い学生さんたちもたくさんいらっしゃるのですけれども、ある一定年齢以上の方は思い出していただけたらと思うのですが、これは、この2、30年で急速に完成された風景ですね。かつては、地方都市には地元資本の銀行やデパートがあって、それが地方経済を支えていたわけです。これがこの2、30年で、消費社会と、それから金融経済が一举に全国に広がって、地方が画一化されたということです。かつて、たとえば都銀、三菱東京UFJとかみずほ銀行とかあんなものは、たとえば中国地方全体で広島にしか支店がなかったのです。今の若い人たちは信じられませんか、今、コンビニでどの銀行のお金だって引き出せるでしょう。様変わりしたわけです。私たちでも忘れていきますよね、そんな時代のことは。それからもちろん、東京資本のショッピングセンターなんてなかったのです、鳥取には。鳥取だけではない、どこにもです。これも一挙に広がったものなのです。もちろん、これは悪いことばかりではありません。どんな地方に住んでいる人でもいい製品を、いつでも安く大量に手に入れることができるようになりました。しかし、この利便性を追求するあまり、私たちは失ってしまったものがあるのではないかと思うのです。その失ってしまったものというのは、経済活動からすると無駄に見えるけれども、中心市街地が持っていた社会にとって必要な機能を失ってしまったのではないかと思うのです。それは、たとえば抽象的なところでいうと、『となりのトトロ』に出てくるみたい鎮守な森という空間とか、あるいは神話や伝統芸能の継承といった時間とか、そういった時間や空間を失ってしまったのではないかと。

もうちょっと具体的に言いますと、商店街が寂れていくといちばん最初になくなるのが床屋さんや銭湯だと言われています。『浮世床』、『浮世風呂』、名前ぐらい聞いたことあると思います。これは、江戸時代の滑稽本の題名です。要するに、銭湯や床屋さんというのは、江戸時代以来のコミュニティースペースだったのです。人と人が出会う場所だったわけです。私、東京生まれの東京育ちですけれども、駒場という非常に小さな商店街の中で育ったので、2軒隣が床屋さんなのです、うちの。二軒隣が床屋だとほんとうに大変なのです、絶対にそこでしか切れないから。(笑声) 床屋はばれちゃうでしょう。うちの向かいが電気屋なのですが、駒場って、いわゆる駒場東大前って、東大の教養学部、そこで中島さんは演劇をやっていたわけですけれども、うちの向かいが東大電気というすごい名前の電気屋さんなのですが。電気屋はさすがに、あまりに家電量販店と値段が違うので、僕でさえもテレビとか買うときはこっそり買って、夜搬入するのです。 (笑声) ばれないように。でも、髪はそうはいかないですね。毎朝会いますから、ばれるので、だから僕はどんなに忙しくても1カ月に一回予約して切るのです。予約するような床屋ではないのですが、そのかわり、たとえば朝9時半開店のところを9時にあけてくれたり、夕方いちばん最後に、店が閉まってから切

ってくれたりもするわけですね。面倒くさいのです、商店街のつき合いというのは。しかし、やっぱり行くと、得がたい情報も得られて、あそこの夫婦ちょっと危ないらしいですよとか、あそこはちょっと相続税が払えなくて引っ越すみたいですよとか。情報ステーションの役割も果たしている。まだ鳥取市にも、そういう床屋さんはあるかもしれません。ある一定年齢以上の方は思い出していただけたらと思うのですが、昔の床屋というのは、髪を切っている人の横で子どもがずっと漫画を読んでいる、その隣りで、この人たちはいつ仕事をしているのだろうという、おじさんたちが将棋を指したりしていましたね。(笑声) このおじさんたちは経済活動から見たら明らかに無駄な存在なのです。だって、店番をサボって将棋を指しに来ているわけですから。でも、このおじさんたちが子どもたちの監視係であり、教育係の役割を果たしていたわけです。たとえば、駄菓子屋さんで、子どもが10円玉を握り締めて買い物に行きますね。あるとき、1万円札で買い物に行ったとします。そうするとやっぱり駄菓子屋のおばさんは注意するわけですよ、子どもに直接言わなくても、お母さんに。おたくのお子さん、今日1万円札で来たわよと、景気いいわねみたいに、ちょっと嫌みまじりに報告したりする。今、どんな地域でも、たとえば犬の散歩を通学時間に合わせてくださいみたいな見守り運動をみんなやっています。でも、商店街ではそんなことは必要なかったのです、見る見られるという関係が普通にできていましたから。僕の世代でも、人の家に預けられるなんて当たり前のことだったのです。しかし、そういうものははやできない。こういうものを僕は無意識のセーフティーネットと呼んできましたが、この無意識のセーフティーネットが崩れてしまったということです。

まず、みなさんに覚えておいていただきたいのは、こういった市場原理、マーケットの原理というのは、地方ほど、辺境ほど、荒々しく働くということです。たとえば僕、20年ほど前に、沖縄県の与那国島というところで、1カ月ほど滞在して作品をつくったことがあります。アーティスト・イン・レジデンス、今でこそはやりですが、その走りみたいなことをしていたわけですね。与那国島は東京から2,000キロ、台湾まで120キロという日本の西の端の島です。与那国島には本屋さんがありません。雑貨屋さんに漫画が置いてあるのですが、それも『ジャンプ』とか『マガジン』とか絶対に売れる本しか置いてありません。『スピリッツ』さえ置いてない。もちろん、『週刊文春』なんて置いてない。(笑声) 政治家も与那国みたいなところばかりだと楽ですね、心配しないでいいから。本を買おうと思うと、40分飛行機に乗って石垣島まで行かなきゃいけない。しかし、石垣島にも僕の本は置いてない。(笑声) 今、置いてあるかもしれないですが、当時は絶対なかった。だから、僕の本を買おうと思うと、あと1時間飛行機に乗って那覇まで行かなきゃいけないです。当時、直行便がなかったのです。では、与那国の人、僕の本を読まないでもいいのか。まあいいと言われればそれまでなのですが、そうではないから、私たちは全国に三千数百の公共図書館というものをつくってきたわけです。本を読むという行為は、憲法で保障された健康で文化的な最低限度の生活に資するものなので、これは行政が保障しようということです。もしそれがなければ、辺境ほど、末端ほど、絶対に売れる本しか置かなくなってしまう。それは市場の原理から言えば当たり前のことなのです。遠い地域ほど在庫のコストと流通のコストがかかるので、絶対に売れる本しか置かなくなります。しかし、そのマーケットの論理で、書籍、文化というものが決定されているのかということです。

これは実際、今も、みなさんは経験なさっているのです。郊外型のショッピングセンターの大規模書店に行くと、並びももう全国一律ですね、POSシステムでつながっていますから。要するに、売れるものからレジの近くに置いてある。私たちは市場原理によって思想統制されているということ

です。鳥取には、先ほど、ご挨拶していただいた、すばらしい本屋さんがあって、まだ地域においてそういう本屋さんがある地域もあるのですが、なかなか今そういう本さんがもう地方都市では非常に経営が厳しくなって、とくに商店街の小さな本屋さん。商店街って基本的にはポテンシャルのある場所なので、家賃を払わなくていい商売ですから、昔の本屋さんは雑誌だけ売って、あとは好きな本を売ってればよかったのです。大体そういうところの店主というのは、全共闘崩れとか、天井桟敷に3年いましたみたいなのが戻ってきて、大体親の代を継いでやっていて、好きな本だけ売ってればよかったのですが。でも、今、みなさん、雑誌はコンビニで買うでしょう。大体、雑誌を買わないですよ、若い人たち。だから、「週刊ポスト」は60歳からのセックスみたいな、そんな特集ばかり。要するに、あの世代しか買わなくなっているということですよ。本はアマゾンでも手に入るですよ。だから、地方ほどそういう個性的な本屋さんが生き延びるのが相当難しくなってしまったということなのです。でも、地方都市にそういう本屋さんがなくていいのかということですね。僕は、そういう個性的な書店が地域の文学少年や文学青年を育ててきたと思うのです。立ち読みしていると、ふだん無口なおやじが寄ってきて、おまえもそろそろいい年なんだから、ツルゲーネフでも読めよとか、もうそろそろドフトエフスキーだろ、もう仕入れておいたからなみたいな、おせっかいなおやじがたくさんいたわけですよ、商店街には。それが地域の文化を育ててきたと思うのです。それは別に本屋さんだけではなくて、先ほど申し上げた画廊とかジャズ喫茶とかライブハウスとか。そこに悪いおやじや悪いお兄さんお姉さんたちがいて、地域の文化を育ててきたのだと思うのです。そういうものが地方都市ほど支えられなくなっている。要するに、地方ほど無駄を許容できなくなっているということなのです。

私たちには幻想がある。地方は、確かに経済は厳しいかもしれないけれども、精神的には豊かなのだと。のんびり暮らして、何かいろいろ豊かなものが育まれるのだ。確かにそうだったかもしれませんが。でも、そこにマーケットの原理が入ってくると、免疫のないところにインフルエンザが入ってくるようなもので、一気に地域の文化は根絶やしにされてしまうわけです。

私たちの業界では、「イオンは無邪気に出店し、無邪気に退店する」という言葉があります。十数年で退店してしまうケースがたくさんあるのです。最短、3年で退店したケースがあります。私の母のふるさは秋田県の大館というところですが、東北というのは中心市街地とJRの駅が離れているところが多いですね。大館もそうなのですが、駅がありますね、中心市街地からちょっと離れています。イオンがここに出店したのです。当然、中心市街地は寂れました。通行量が減りました。イオンは退店しました。もうペンペン草も生えない状態になってしまいます。でも、別にイオンに悪気はないのです。イオンは通行量調査で出店し、消費が減れば退店します。だから、あんなに安普請なのです。地方都市の郊外型のショッピングセンターの、別にイオンだけではなくて、紳士服店とか大規模書店とか、みんなものすごいプレハブみたいになっているでしょう。要するに、その地域で50年100年商売するつもりだったら、あんな建物は建てないはずなのです。でも、別にイオンに悪気はないのです。何でこんなにイオンをかばうかという、僕の小説が去年映画化されたのですが、そのスポンサーがイオンモールだったので……（笑声）あまり悪口言えないのですが。要するに、地方ほどこういった市場の原理が荒々しく働くのではないかと。だから、私たちは幻想を捨てて、そこに立ち向かわないとならないのではないかとということです。

ほかにもいくつか問題があります。たとえば、十数年前ですが、ある週刊誌が、なぜ地方都市に青少年の凶悪犯罪が拡散していくのかという特集を組みました。厳密に言いますと、青少年の凶悪犯罪は日本全体では減っているぐらいです。まだまだ日本は安全な国なのですけれども、問題は地

方都市に拡散しているということです。要するに、昔は東京や大阪でしか起こらなかったような犯罪が、普通に平和に暮らしている地方都市で急に起こると。で、非常に住民もショックを受けるといことがよく起こります。いくつか理由が書かれているのですが、一つは若者の居場所が固定化し閉塞化しているということです。ちょっと社会からドロップアウトしたような若者たちの居場所が、カラオケボックスとゲームセンターと、あとネットカフェぐらいしかない。カラオケボックスって非常に象徴的ですよ。防音、遮音がしっかりしていて、外からまったく見えない。かつての銭湯のような学年を越えた交流とかもない。そういうところが、いわゆる不良少年たちのたまり場になったり、いじめや青少年犯罪の温床になるのではないかとされています。

あるいは、成功の筋道が限られていて、そこから外れてしまうとなかなか戻れない。要するに、東京や大阪のほうがフリースクールとかが完備されていて、いったん不登校とかになっても、親が覚悟を決めれば、そんなに大騒ぎにならない。今、実際に不登校の子たちの大学進学率がものすごい勢いで上がっているのですね。要するに高校に行かなくてもいい、大丈夫な国になっているのです。ところが、これも地方都市ほど世間の目も厳しいし、「あそこのお子さん、高校に行っていないらしい」みたいに言われる。逆にどんどんどん引きこもってしまうということですね。この不登校、ひきこもりの問題も、大体人口20万人から50万人ぐらいの都市がいちばん深刻だと考えられています。ただ、これはひきこもりとか不登校の問題だけではなくて、エリート層も似たような問題を抱えています。今、東京の中高一貫校は東大に何人入ったとか、あまり競っていないのですね。どの学校も、大学に入ってから学びのモチベーションが持続するような授業をしますということをして、生徒募集を競っています。たとえば私は駒場という町に今も暮らしているので、地元の筑波大附属駒場って超エリート校ですね。200人のうち130人ぐらい東大に入る学校ですから、そこの先生と最先端の国語の授業をつくるというのを毎年やって、たとえばある年は永山則夫死刑囚の書いた小説を3冊、夏休みに中学3年生に読ませて、後期半年かけて永山則夫の評伝劇をつくと。そういう授業を毎年やっているのです。そういうおもしろい授業をたくさん受けてきて東大に入った子たちと、地方の進学校で中島さんみたいに、まあ中島さんがそうだったかどうかわかりませんが、勉強ばかりしてきて、やっと東大に入った子が机を並べて、文字どおりのカルチャーショックを受けて不登校になってしまうという学生が、東大にも京大にも阪大にも一定数いるのです、毎年。この話、毎年、大阪大学の大学院ですと、必ず授業後の質問表に、私もそうでしたと書いてくる。とくに女子の学生です。ある年の学生は、自分も地方出身で一生懸命頑張って阪大に入った。彼氏もできて、彼氏は大阪出身で、一生懸命デートで美術館とかコンサートとか連れていってくれるのですが、18歳までそういうところに一回も行ったことがなかったので、どう楽しんでいいのかわからなくて、3カ月で別れてしまいました。その後、彼女はたぶん頑張って、文化資本を蓄積して大学院に進んで、僕の授業を受けているわけだから、たぶんすごく頑張ったと思うのですけれども。要するに、文化格差が広がっているというわけです。

私自身のもう一つの専門は、コミュニケーション教育といって、日本中の学校でそういうお手伝いをしているのですけれども、とくに最近問題になっているのはこの大学入試改革です。ご承知のように、2020年になると今のセンター試験が廃止されて、1次試験は非常に基礎的な学力を問うような簡単な問題の試験になる。1点刻みしないと書いていますから、Aランク、Bランク、Cランクみたいになって、受けられる大学が決まるのでしょね。で、文科省は、大学側には2次試験は潜在的な学習能力を問うような試験をしろと書いています。要するに大学に入ってから伸び代をはかるような試験をしろと。まず、これがそもそも無茶振りだと思うのです。だって、そんな

ことがわかるのだったら、高校でやっておけよという話ですよ。しかし、文科省はそういうふう
に言う。そこで問われるのは、大体、思考力、判断力、表現力、これは昔から言われていました。
最近では、主体性、多様性、あるいは協働性を問うような試験をなささいというわけです。では、こ
れはどんな試験だろうか。

私は、香川県の善通寺にあります四国学院大学という非常に小さな、全学1,300人の私立大学の学
長特別補佐というのをされていて、この大学入試改革のお手伝いをしています。今、地方の私立大学
はほんとうに大変なので、生き残りをかけて、昨年度から指定校推薦に関しては全部この新制度入
試でいくと。今年は一般推薦もこれにしましたので、大体入学者の3分の1はこの新制度入試で入
学するという前倒し実施をしています。各校とも今、前倒し実施をしていますね。私の出身は国際
基督教大学、ICUですけれども、ICUはもう数年前から、大学の授業を受けて、それをノートにとっ
て、その後で設問が出る。要するに、自分で授業を聞いてまとめる力をはかる、まさに潜在的な学
習能力をはかるような試験を実施しています。各大学ともそういうユニークな試験を実施し始めて
いるのです。

四国学院大学は、どんな問題を出すか、もう公表しています。たとえば、レゴで巨大な艦船をつ
くる。これは、数年前にオックスフォードで実際に出た問題です。これは大変です。設計図をつく
って、役割分担をして、タイムキープをきちんとして、途中で変更したりもしていかなきゃいけな
い。実際に、評価されるのはこういう点ですけれども、実は大事なものは、タイプキープを意識した
かとか、地道な作業をいとわずにチーム全体に対して献身的な役割を果たしたかとか、こういうと
ころも見ると試験なのですね。このグループワークをやった後に、今度、インタビュー、面接をし
ます。今、大体A0入試ってどの大学も小論文を書いて面接なのですが、面接をやってもわからないの
ですよ。ものすごくちゃんと準備してくるので、高校で。それに揺さぶりかけようと思ってちょ
っと変な質問をすると、すぐ圧迫面接といって訴えられてしまうのです。(笑声) 今、一般の方はご
存知ないと思いますが、先生方はよくご存知だと思いますが、今、朝、何を食べてきたかを聞いて
はだめなのです。家庭環境がわかる質問はしてはいけないということになっているので。何も聞け
ないということですよ、要するに。ところが、これだと、その午前中にやったグループワークに
ついてのことが聞けるのです。どう考えたかとか、どの意見がいちばん参考になったかとか、あと
20分あったらどうしたかったかとか、いろんな質問がその場でできるわけです、発表の内容に応じ
て。おもしろくて、その間に普通の質問もするので、志望動機とかも。そうすると、今日どう
だったですか、グループワークはと聞くと、「ああ、こういうのは僕は苦手なのです、非常にメンバ
ーに恵まれて頑張ってどうにかできました」と、しどろもどろに言うのですが、その後には、では、
我が校への志望動機を聞かせてくださいと言うと、「御校は……」みたいになって……(笑声) おま
え、そこ練習してきたらうみたいになる。非常に、その子の特質がわかる試験です。

一つだけ実際に出した問題をお伝えすると、これは四国の大学なので、2030年に日本が債務不履
行、デフォルト状態になって、今のギリシャみたいな状態ですね、IMF、国際通貨基金の管理下に置
かれましたと。IMFからは、本四架橋が3本かかっていますが、あれは3本も要らないので、そのう
ちの2本を廃止しなさいと通告が来ました。さあ、どの2本を廃止しますか。兵庫県、岡山県、広
島県、徳島県、香川県、愛媛県の各県代表と司会1人の7人でディスカッションドラマをつくりな
さいと。これは、実際に出した問題です。その日に会った高校3年生7人が集められて、別の教室
に連れていかれると、そこにパソコンが2台置いてあります。検索可、おそらく全面検索可にした
初めて大学の入試だと思いますけれども、要するに、今どき鎌倉幕府が何年に開所されたかとか

えておく必要ないでしょう。あれ、全国の中学生が歴史の時間に内心突っ込みを入れていると思うのですよ、これを覚えておく必要があるのかなと、検索すりゃいいじゃん。この問題のポイントは、7人なのですが、パソコンが2台しか置いてないのです。だから、初めて会ったチームの中で誰が検索するかとか、どのタイミングで検索するかとか、得た情報をどう生かすかを見る試験なのです。検索の早い子が評価されるわけでもないのです。そうではなくて、「あっ、検索がうまいね、じゃあ、おれ、メモとるほうに回るわ」というふうに、ちゃんと自分の役割分担ができる子がいちばん成績がつきます。そういう試験です。

こういう試験をたくさんつくってきました。私は、大阪大学でも実はそういう研究をずっとして、大学院の奨学金選抜で試験的にそういうものをたくさんやってきたのです。たとえば、ある年は書類選考で残った最終40人を2泊3日ホテルに缶詰にして演劇をつくるという試験をやってきました。あるいは、映画をつくる試験とか、紙芝居をつくる試験とか、いろんな試験をやってきました。

世界中の大学の試験も調べてきました。おもしろいのは、世界中の出題者が口をそろえて言うのが、「受験対策のできない問題を毎年考えるのが難しい」と言います。受験対策のできない問題を毎年考えるほうが難しい。逆に言えば、高校側からすると受験準備ができなくなるのです。あるいは、進路指導ができなくなるのです。今までは、どこどこ大学に入るなら英単語3,000覚えておけよと、鳥大なら4,000だぞと。阪大なら5,000だぞみたいに言われて、で、素直に聞いて頑張って、模擬試験を受けて、A判定、B判定、C判定と出て、では、おまえはここ第1志望な、ここ滑りどめな、ここ記念受験なみたいに、みんな進路指導されてきたでしょ。そういう進路指導のうまい先生がいるわけですよ、各校に。でも、今見ていたらわかるように、レゴで巨大な戦車をつくるのに、A判定もB判定もないでしょ。(笑声) わからないのです、そんなの。要するに、1年2年の受験準備では太刀打ちのできない試験になるのです。要するに、最近の言葉でいう「地頭」を問うような試験になる。そうすると、これは子どものうちからこういうものを、ちょっとずつでもやっている子が有利な試験です。あるいは、初めて会った子ともこういうことができる子が有利な試験です。いわゆるコミュニケーション能力のある子が有利な試験になります。

もう東京の中高一貫校は雪崩を打って、最近の言葉で言うところのアクティブ・ラーニング、教科書なんか使わないディスカッション型、参加型の授業に切りかえています。今の中学2年生からこの試験になるわけですから。まったく地方の進学校はこれに追いついていません。理由は簡単です。高校の先生が変わりたくないのです。変わってしまうと、自分の権威がなくなってしまいますからね。それは、楽ですよ、ここからここまで試験に出るから覚えてこいよと言われて、で、頑張る短期間に大量に知識を詰め込んだ奴が勝つという試験制度のほうが、教員の権威が保てるのです。でも、これ、変わらざるを得ない。

もう一つの問題は、こういったものというのは、こういった能力というのは、社会学の世界では文化資本、とくに身体的文化資本といいます。センスとかマナーとか、それから意外と気がつかれていないのですが、人種的偏見とか男女差別の意識についてですね。これ、大人の方はわかると思うのですが、30代、40代になってからだと、そういう偏見のある人って変わらないですよ、頭ではわかっている。ああいうのも、要するに氏素性、育ちというやつですよ。なかなか変わらないのです。身体的文化資本は大体20歳までに形成されると言われています。いちばんわかりやすい例は味覚です。味覚は12歳までに形成されるという説があります。要するに、子どものうちからファストフードみたいな濃い味のものばかり食べていると、舌先の味蕾が潰れて微妙な味の見分けが

できなくなってしまうと。こういう身体的文化資本を蓄積するためには、本物、いいものに直接触れさせるしかないと考えられています。それは、そうですね。子どもに美味しいものとまずいもの、安全なものと危険なもの、両方食べさせて、ほら、これがおいしいでしょう、これが安全でしょうと教える親はいないのです。美味しいもの、安全なものを食べ続けさせることによって、危険なもの、まずいものをぺっと吐き出せる能力が生まれるわけです。あるいは、たとえば、骨とう品の目ききを育てるのには本物、いいものだけを見せ続けるそうです。そうすると、にせものを見抜く力が育つ。要するに、理屈ではなくてセンスだから、体にそれをしみ込ませていかなきゃいけない、できるだけ若いうちから。もしそうだとしたら、とくに私がかかかわっているような演劇とかダンスとか音楽みたいなパフォーマンスに関しては、東京の子どもたちが圧倒的に有利ではないですか。鳥取はまだ鳥の劇場があるからいいですよ。でも、どの県にも鳥の劇場があるわけではないですからね。たとえば東京都港区は、一昨年ぐらいから小学校4年生をサントリーホールに全員招待です。港区の子どもを招待する必要はないだろうと思いますよね、みんな親、富裕層ですからね。でも、別に港区に悪気はないのです。港区にサントリーホールがあって、サントリーホールは地域還元事業としてやっている。東京の杉並区も世田谷区もみんなそういう施策、みんなやっています。世田谷区は日本語特区というのをとっているんで、週に1回国語以外の言語活動というのがあります。世田谷区には世田谷パブリックシアターという日本最強の地方の公共ホールがありますから、そこに頼むとプロのアーティストを、落語家でも狂言師でも俳優でも派遣してくれます。世田谷区内の半分の小学校、3分の1の小中学校がプロのアーティストの派遣を受けています。でも、そんなことできないでしょう、地方都市で。鳥大のみなさん、鳥取出身だけではないと思いますので、地方出身の方が多いと聞きましたけれども、できないでしょう、みなさんの地元では。もっとわかりやすい例で言うと、今、高校で演劇やダンスが学べる高校は全国に50あります。3年前の数字で50。今、もうちょっと増えています。しかし、そのうちの6割は東京と神奈川に集中しています。東京、神奈川、大阪、兵庫で8割です。要するに、教える人がいなければ、コースを開設しようと思っても開設できないのです。

もう一つの問題は、経済格差です。もちろん経済格差が教育格差に直結するというのもう連日のように報道されているわけですが、文化格差はより深刻です。教育格差はまだ発見されるのです、学校に来るから。ああ、この子は頭がいいのに、家が貧乏で大学に行けなくてかわいそうだなとみんな思う。ほんとうに優秀だったら、奨学金とかいろんな助けがある。でも、文化格差は発見すらされないのです。親がコンサートや美術館に行く習慣がなかったら、子どもだけで自然状態で行くということはないわけです、公的支援がなければ、公的制度がなければ。だから、どんどんどんスパイラル状に文化格差は広がっていきつづいてしまいます。日本は150年かけて、教育の地域間格差のないすばらしい国をつくってきました。しかし、この文化の地域間格差と経済格差の両方に引っ張られて、個人の文化資本の格差がものすごく広がっていきつづいていくということです。しかも、その文化資本の格差が大学進学や就職に直結する時代になってきたということです。だから、個人の中で文化資本を蓄積できるような教育に切りかえていかないと、この東京一極集中、地域間格差はとまらないということなのです。

でも、これに気がつき始めた自治体もあります。たとえば岡山県の奈義町、ここは鳥取の方もよくご存知ですね、ここが智頭ですよ。奈義町は、人口6,000人の小さな町です。ここは、今年度から何と町役場の職員採用試験を演劇にしました。(笑声) 演劇をやれないと公務員になれないというすばらしい時代。

出した問題をちょっとご紹介いたします。みなさんは、奈義町に入所早々、町長から2020年の東京オリンピックでどこの国のどこの競技でもいいから合宿を誘致してこいと無茶振りされました。一人一人が推す国と競技を決めて、6人1組でディスカッションドラマをつくりなさいという問題です。これはディベートではないので、自分の推す国や競技が勝てばいいということではないのです。どうすれば全体のディスカッションが盛り上がるかを全員で考えなければいけないです。だから、ぼけ役とかも必要なのです。「セーリング、海ないだろう」みたいな、そういうのが必要。これはすごく大変な試験なのです、実は。試験なのに、自分の能力だけを見せても通らないのです。そうではなくて、さっき言ったように、あっ、検索うまいね、じゃ、おれメモとるわという奴の方が評価される試験なのです。

しかも、この試験は、今年から若い女性の職員を試験官に入れるようにしました。要するに能力をはかる試験ではなくて、働く仲間を選ぶ試験に変えましょうという提案をしました。実際に、僕はこれを監修したので、受験者にこういうふうに言いました。奈義町は6,000人の小さな町です。町役場は80人しかいないのです。ということは、町役場の職員になった瞬間に、80分の1のクルーになるのです、仲間になるのです。6,000分の1の町民になるのです。僕ね、びっくりしたのです。東京都は16万人公務員がいるのです。16万人もいれば、能力のある人から採って、適材適所に配置すればそれで済みますよね。でも、さっき言ったように、人口の少ないところはそうはいかないのですよ。1人で複数のポジションをこなしてもらわないと、どんなに能力があってもそれは有能な職員にはならないのです。だから、働く仲間をつくる、選ぶ試験に変えていかなきゃいけない。で、こんな試験を始めました。

奈義町、ご存知の方も多いと思いますが、ここ数年きめ細かい子育て支援と教育改革を行って、その結果として隣の津山市からたくさんの若い夫婦、津山市で働いている若い世代が移住するようになりました。その結果として特殊出生率2.81、日本一の町になりました。2.81って驚異の数字です。2点台後半というのはもう沖縄の離島ぐらいしかないのです、本土で2点台後半は非常に珍しい町です。でも、それだけではないですね。奈義町はずっと子ども歌舞伎を守ってきて、小学校3年生は全員が子ども歌舞伎に参加します。奈義町がおもしろいのは、スポーツ少年団とかで公務員の人が運転してどこか遠征とか行くでしょう。そうすると、子どもって車に乗っていて飽きると、普通はしりとりとか始めるじゃないですか、奈義町の子たちは1人が歌舞伎のせりふを言い始めると、みんなが言う。「知らざあ言って聞かせやしょう」みたいな、「白浪五人男」とかをみんなやる。とてつもなく文化資本の蓄積がある。さっき、鎌倉幕府が何年に開所したかなんか覚えておく必要はないと言いました。これからは歌舞伎のせりふを覚えているとか、百人一首を全部言えるとか、そういう無駄な教養を持っていた奴の方が強い時代になるのです、きっと。何、百人一首知らないの、みたいに。おそらくそういう時代になっていくということですね。これが子ども歌舞伎で非常に本格的なものです。それから、なぜか6,000人の町に、磯崎新建築の現代美術館があります。今、奈義町は自然とアートのまちづくりということで、非常に多くの若い世代、ほとんどがJターンですが、を呼び寄せています。こういうことが始まっているということです。

ちょっと話をもとに戻すと、青少年犯罪の話をしていただけなのですが、青少年犯罪というのはもちろん地方だけの問題ではないのです。私は先ほど申し上げたように駒場という町で生まれ育ったのですが、駒場は渋谷から歩いて15分ぐらいのところにあります。僕は子どものときから渋谷が遊び場だったのですが、渋谷は今でこそ、修学旅行生がみんな行くような若者のメッカと言われていますが、僕が小学校の頃までは汚い小さな町でした。まあ大体「渋い谷」と書くぐらいですから

ね。(笑声) 谷底の小さいな町だったわけです。それを東急と西武という二大資本の力で無理やり広げたのが、今の渋谷なわけですね。それはいいです、経済的に繁栄したのは。しかし、結果としてどうなったかという、その谷底のセンター街では、今もういないのですが、チーマーと呼ばれる不良少年たちが地べたに座って、もう非常に危険な町になってしまいました。一説によると、新宿の歌舞伎町より危険だと言われています。僕はそこが帰り道なので、よく通るのですが、でも、この子たちのせいじゃないだろうといつも思うのですね。なぜなら、渋谷という町は資本の論理だけ、マーケットの論理だけで町を広げてしまったために、ヨーロッパの町なら必ずあるような噴水のある広場とか公園が一つもないのです。公園は一つ、宮下公園という公園があるのですが、ここは十数年ホームレスの方たちのたまり場になっていて、若者たちが寄りつけない場所になってしまいました。要するに、資本の論理だけで町を広げてしまったために、社会的弱者の居場所のない町になってしまいました。しかし、社会的弱者は富に吸い寄せられるように集まってきます。そして、居場所のない社会的弱者が右往左往することによって、渋谷はどんどん危険度を高めていってしまいました。

その結果、結末を、みなさん、ワイドショーを通じて二つ見えています。一つは、あまり報道されなかったのですが、渋谷区はこの宮下公園をネーミングライツをナイキに売り払って、スポーツ公園化して一部有料化しました。社会的弱者の居場所のない町なのに、公園を一部有料化してしまったのです。しかも、そこに暮らしていたホームレスの方たち、その支援団体、これ、ちょっと過激派もいたわけですが、そこと折り合いがつかなくて、結局、最後、行政代執行、警察権力を導入してホームレスを全部排除しました。しかし、排除の論理から何にも生まれないのですね。結局、そこにいたホームレスが渋谷中に拡散することによって、渋谷はものすごく汚い町になってしまいました。ぜひ、東京に行く機会があったら、ちょっとマニアックな話ですが、半蔵門線という地下鉄がありますが、その渋谷駅から上がっていくコンコースがあります。これは二層構造になっています。この地下2階、夜8時ごろ行ってみてください。ものすごい数のホームレスの方がいます。その向こうが「109」、修学旅行生が行く場所ですね。半蔵門線の改札口から「109」まで行くところの地下2階、大学生覚えておいてくださいね。たぶん協定を結んでいるだろうと思うのですが、地下1階には1人もいません。たぶん、警察が地下2階はあまり人通りがないからここにいなさいということにしているのだと思う。その上、ワールドカップやハロウィンで大騒ぎになるあのスクランブル交差点です。みなさん、こっちしか見てないでしょう、ワイドショーで。あの2階下にホームレスの方たちがいるのです。これ、日本の縮図です。

もう一つの結末は、みなさんご存知のあの海老蔵事件ですね。渋谷のチーマーの子たちが成人して六本木に流れて、元暴走族のメンバーとつるんで、半グレと呼ばれる、やくざより怖いと言われる反社会的集団を生み出し、海老蔵事件を起こし、クラブで人違いで殺人事件まで起こしてしまいました。こうなってくると、繁栄しているのだからそういう奴らもいるのもしょうがないだろうみたいなレベルではないということですね。要するに、まちづくりの失敗が反社会的集団を生んでしまったということ。ただ、ホームレスの問題とか、ちょっと鳥取のみなさんには遠いイメージかもしれませんが、たとえばこういうこともありました。やはりこれも20年ぐらい前ですが、東村山という、東京の近郊で、中学生がホームレスを撲殺してしまうという事件が起きました。寒い時期だったのですね、2月ぐらい。やっぱり居場所がなかったのだと思います。中学生もホームレスも図書館に行くのですね。ただ、日本の図書館は残念ながらコミュニティースペースはないですね、コミュニティースペースにつくりかえている図書館も今増えてきていますけれども、基本的には学び

の場です。静かにしなきゃいけないのですね、日本の図書館では。そこで中学生が騒いで、ホームレスがそれをたしなめて、で、中学生が逆恨みして、塾の帰りにバットでホームレスを撲殺してしまいました。これは明らかに中学生が悪いです。悪いですが、その背後にはそういう社会的弱者の居場所をつくってこなかった日本の都市政策の無策があるのではないかということなのです。

あるいは、いじめの問題。いじめの問題をあまり短絡的に考えるのはよくないのですが、まちづくりの視点からいうとこういうことは言えると思うのです。昔からいじめというのはあったわけです。あったけれども、かつては子どもの居場所が学校だけではなかったので、『ドラえもん』に出てくる放課後の原っぱみたいなのがあって、原っぱでもいじめはあるのですね。ジャイアンみたいなのがいじめているのですが、ただ、こっちは学年を越えた交流ですから、ガキ大将は自分の子分がいじめられていると知ると、仕返しに行ったりしたのですよね。でももう、今、子どもたちの世界に、ガキ大将という言葉も、仕返しという言葉もないわけです。学校しか生きる場所がないから、学校でいじめられると、大人から見るとあっけないほどに、不登校になったり引きこもったり、あるいは極端な場合、自殺に走ってしまったりする。要するに、子どもにとっても大人にとっても重層性のない社会というのは、息苦しく生きづらい社会なのではないかということです。ただ、原っぱをつくれれば子どもたちが戻ってくるかといったら、そうはいかないと思うのです。日本の子どもたちは、世界でいちばん忙しいですから、塾だ、習い事だ、家庭教師だ、ゲームだ。そうすると、私たちがやらなければいけないのは、市場原理にどうにか折り合いのつく、現代社会に合った新しい広場をつくっていかねばいけないのではないか。その新しい広場の一つが、たとえば私が仕事をしているような劇場であったり、音楽ホールであったり、美術館であったり。あるいは、フットサルのコートかもしれないし、ミニバスケのコートかもしれないし、図書館かもしれないですね。

図書館というのは、これから非常に重要な役割を果たします。ひきこもりの方で一定数、図書館とコンビニなら行けるという層があるのですね。図書館に来てもらって、一部分、防音、遮音して、談話室みたいなをつくって、できればそこにカウンセラーとかボランティアの方を配置して、人としゃべれるようになったら、次、絵本を持ってきて、ちょっと子どもに読み聞かせでもやってみないというふうに社会参加を促すと。これが「居場所と出番」という考え方です。まず、居場所をつくって、それから社会参加、出番をつくっていく。要するに、この居場所と出番が、今までの行政の政策ではばらばらだったのです。これをつなげていくためには、公共文化施設の役割が非常にこれから大きくなっていくのではないかということです。その場合、大事なことは様々なメニューを用意するという事です。何にひっかかってくるかわからないので、様々なメニューを用意する。もちろん行政がこんなきめ細かいことはできないので、NPOにやっていただいて、それを行政が支援するようなシステム。要するに、極端に言えば、商店街の中で古本屋さんとかジャズ喫茶とかを、たぶん市場原理だけでは無理なので、NPOにやっていただいて、行政が支援する。おそらくそういうまちづくりが、こんなでかい、こんなとってはいけないですが、こういう立派な施設をおつくりになるよりもですよ。(笑声) その空き店舗を古本屋さんにした方がたぶん全然いいのですよね、これからは、ということなわけです。

日本という国は、島国、村社会で、とくに稲作文化というのは、全員で田植えをして、全員で草刈りをして、全員で稲刈りをしないと収量が上がらないというちょっと特殊なところがあって、この高緯度地方で米をつくるためには、だから、私たち非常に強固な共同体をつくってきました。でも、今どき、その地域に生まれたから青年会に入り、商工会議所に入り、消防団に入り、夏は盆踊

りだ、秋は祭りだ、冬は餅つきだ、春は福引だとか、もう全部の行事に参加させられるような、そんな強固な共同体はみんなうんざりなわけですよ。だから、みんな若者は都会の無名性に憧れて、大都市に出ていってしまうわけでしょう。でも、どんな統計を見ても、高度な芸術文化活動、環境保護運動、ボランティア活動、スポーツ、そういった自分が主体的に参加したいと思うアクティビティならば、大体人々は車で30分圏内ならば、ストレスなく移動すると言われています。みなさんでも演劇が好きだったら、鹿野までは普通に行くでしょう。あれがちょうど、あの距離です。要するに、今までは非常に中心に向かって強固な共同体をつくってきたのだけれども、そうではなくてちょっとふわっと緩やかにして、各自の関心によって集まれるような社会に編み変えていく必要があるのではないかと。誰もが誰もを知っている強固な共同体から、誰かが誰かを知っている緩やかなネットワーク社会に、日本社会全体を編み変えていく必要があるのではないかと。そうだとするならば、この編み目の接点に、演劇があったり、音楽があったり、美術があったり、あるいはフットサルがあったり、ミニバスケットがあったり、農作業体験があったり、ボランティア活動があったりするのではないかとということです。

私は演劇をやっている人間なので、こういうとき芸術の役割が大きいですよというわけですが、別に夢物語を言っているわけではなくて、80年代以降、ヨーロッパの多くの都市はこの文化による都市の再生というものに取り組みます。車をシャットアウトしたり、いろいろするわけですけれども、その中でたとえばアートセンターをつくって、社会的弱者が参加しやすいような場所にしていくわけです。劇場って、よく非日常の空間と言われます。でも別におけ屋敷みたいな非日常の空間ではなくて、経済活動からすると出会わないはずの人を会わせるのが非日常の空間なわけです。だから、演劇を通じてホームレスと中学生が会おうとか、音楽を通じて高校生と外国人労働者が会おうとか、美術を通じてホームレスとシングルマザーが会おうとか、そういう場所をつくっていくということですね。

これの象徴的な例が、ヨーロッパの多くの公共文化施設で行われているホームレスプロジェクトというものです。これは、ホームレスの方たちに月に一回ぐらいシャワーを浴びてもらって、バザーで集めた服に着がえてもらって、コンサートや美術展に招待すると。先進国のホームレスは生まれつきホームレスなわけではなくて、精神的な理由で社会からドロップアウトしたわけですね。もちろん経済的な理由もありますが、経済的な理由だけではホームレスにならないのです。それは生活保護を受ければいい。精神的な理由があってドロップアウトしてしまうわけですね。だから、100人のうち5人でも10人でも、芸術とかスポーツとかに触れることによって、労働意欲とか生きる気力を取り戻してもらえれば、ものすごく安上がりなホームレス対策なのです。ああ、子どもの頃母親と一緒に音楽に行ったなとか、うちのおやじは絵が好きだったみたいなことで気力を回復してくれれば、ものすごく安上がりなホームレス対策です。これも、鳥取の方には少し遠いイメージかもしれませんが、たとえばこういう話があります。

私は東京の駒場で、こまばアゴラ劇場という小さな劇場を経営しているのですが、8年ほど前から雇用保険受給者に対する大幅割引を実施しています。これは、ヨーロッパの公共文化施設はどこでも普通に行っているものです。一般料金があって、学割があって、高齢者割引があって、障害者割引、ここまでは日本でも普通ありますね、どの自治体の公共文化施設にも。そこに必ず失業者割引というのがあります、ヨーロッパでは。日本は逆の政策をしてきてしまったのですよね。要するに、失業した方が平日の昼間に、劇場、映画館なんかに来たら、求職活動を怠っているといって、雇用保険を切ってしまうような政策をしてきたわけでしょう。それも百歩譲れば理由があったのだと

思います。高度経済成長の時代だったら、景気変動の波はあっても、半年も頑張ればみんなが就職できた。

でも、今、問題なのは、先ほども出てきたように、自分に合った職がなかなかないということですよ。製造業の方が失職すると、たぶんここに来ているような方たちは、いや、製造業が厳しかったら、介護は仕事がたくさんあるから、介護に行けばいいじゃないかと思うかもしれないけれども、30年間まじめにネジを回してきて、それが日本の産業を支えてきたというプライドを持って仕事をしてきた方たちにとって、失業したから翌日からおじいちゃんのお尻を拭くというわけにはいかないのです。これはマインドの問題なのですね。多くのヨーロッパの国々は大体雇用保険の受給期間が2年ぐらいあります。実際に最初は、製造業の方が失職した場合、最初に演劇のワークショップとかダンスのワークショップとか、ボランティア活動をさせるのです。要するに、人を楽しませることが自分の喜びになるという経験をたくさんさせて、産業構造の転換に合わせた配置転換をしていくのです。要するに、日本はまだ高度経済成長、工業立国の時代のままの雇用政策なのですよ。だから、ミスマッチが起こりやすい。製造業の方が失職してなかなか自分に合った仕事がないと、自分が社会から必要とされていないと思ってしまうらしいのです。で、世間の目も厳しい。あそこのおじさん、会社に行っていないらしいよ、みたいに言われる。やっぱりどンドンどンドン引きこもってしまう。

今、日本社会が抱える大きな問題の一つは中高年の男性のひきこもり、そして孤独死、孤立死ですよ。孤独死、孤立死は社会全体にとっても大きなリスクとコストになります。実際、部屋の臭いはひどいわ、周りの人のショックも大きいわ。その部屋なんか誰も住まなくなりますし、周りの人も引っ越して行くわけです。そうすると、勝ち組であるはずの不動産所有者であっても、個人では抱え切れないようなリスクとコストを負うということになります。だから、私たちは考え方を変えていかなければいけないと思うのです。

要するに、失業した方が平日の昼間に映画館や劇場に来てくれたら、「ああ、失業していて大変なのに劇場に来てくれてありがとう」と「社会とつながっていてくれてありがとう」と。「そのほうが最終的に社会全体のリスクもコストも軽減されるからね。行政のコストも軽減されるからね。つながっていてくれてありがとう」と。「生活保護を受けているのに、生活大変なのに、劇場に来てくれてありがとう。もう、ただでいいですよ。つながっていてくれたほうが、最終的に社会が安定するからね」と。これが文化による社会包摂という考え方です。ソーシャル・インクルージョン、社会包摂あるいは社会的包摂と訳しますね。人間を孤立させないという政策です。

日本は長く、強い地縁・血縁型の社会でした。しかし、これは戦後崩れてきたわけですよ。それにかわって社会と個人を支えていたのは企業社会でした。社宅に住み、社員運動会に出て、社員旅行を楽しみ、企業年金に守られてきた。でも、90年代以降、企業がグローバル化する中で、企業は労働者を守る必要がまったくなくなりました。ふつと振り返ると、地縁・血縁型社会ももうないと。これが一時流行語になった無縁社会の正体です。しかも、日本は宗教もないので、先進国の中で最も人間が孤立しやすい社会なのです。ヨーロッパでは最後のセーフティーネットが宗教なのですが、それもないので、あっけなく人間が孤立してしまうということです。

長らく社会学の世界ではゲゼルシャフトとゲマインシャフト、要するに利益共同体と地縁・血縁型の共同体で人間は生きていとされてきました。しかし、この2つが2つとも相当不安定な状態になってしまった。だから、人間が孤立しやすくなってしまった。なので、この中間に位置するもうちょっとふんわりとした出入り自由な、私はこれを関心共同体と呼んできましたけれども、自分

の関心に応じて出たり入ったりできるような、そういう共同体をもう一つ地域社会の中につくっておかないと、社会があっけなく不安定になってしまうのではないかということです。もしそうであるとするならば、文化の役割というの是非常に大きいのではないかということです。しかも、ここは出会いの場所になっていくということです。で、それが人口減少対策にもつながるのではないかと考えています。

最後に、ちょっと飛ばしますね。1個、2個だけちょっと成功例を。これ八戸の「はっち」です。八戸も中心市街地がどんどんどんどん寂れて、通行量が20年で3分の1になってしまいました。その対策としてこういう施設をつくったのですね。この「はっち」の特徴は、「はっちひろば」という広場があるのですが、それ以外は大ホールとか中ホールさえないのです。いちばん大きいのが100人の小劇場、ここより狭い。それがいちばん大きな部屋です。あとは、もう30人規模のワークショップスペースが15個ぐらいあって、キッチン付きのワークショップスペースとか、いろんなスペースがあって、あと子育て支援施設とか、その集合体です。年間で400のワークショップが行われています。200が自主事業、200がNPOにやっていただいて、それを支援する事業。その結果ですね、人口23万人の町ですけども、ちょうど開館1年目で888,888人を達成した。これ、僕はその数字だと思っていますが……（笑声）いくら八戸で「はっち」だからといって、こんなに都合よくいかない。でも、実際、このぐらいの数字があって、表通りの通行量が倍増しました。中心市街地の通行量3割増、そして結果として、たった1年で23の事業所がうまったのです。3年間で50の空き店舗が埋まりました。これは最も成功した文化施設の例と言われています。「はっち」は、結構先端的なこともやっているのです。たとえば、ほんとうに繁華街の真ん中にあるのですね、飲み屋さんとかの真ん中に。年に1回、「酔っ払いに愛を」という企画があって、スナックで飲んだりしていると、白塗りのダンサーが入ってきて、10分ぐらい踊って、また去っていくのです。それだけなのですが、いつ来るかわからないからずっと飲んでなきやいけなくて、売り上げが上がる。（笑声）そういう楽しい企画をたくさんやっている。要するに、今まで私たちは、大規模ショッピングセンターに対抗するために、値引き競争とか福引とか経済の論理で対抗してきたわけですね。それでは勝てるわけがない。でも、もともと商店街はポテンシャルのあるところなのだから、来る理由が一つあれば来るのです、家族で。大体成功している例はこういう複合文化施設です。いろんなものを混ぜてごちゃごちゃにする。「はっち」なんかほんとう、僕は文化のドン・キホーテと呼んでいるのですが、いろんなものがある。そうすると、家族で来て、認知症のおばあちゃんはデイケアサービスに預けて、おじいちゃんは図書館の分室で新聞を読んで、子どもとお父さんがワークショップを受けている間に、お母さんは商店街で買い物をして、そこに現代性、市場原理ともマッチするように冷蔵機能付きのコインロッカーでもあれば、今度それを預けて、では、お父さん、ちょっと買い物に行ってくるわとなるわけですね。大体成功しているのは、そういう施設です。

最後に、私がやっている城崎、お隣ですね、豊岡市です。これは城崎国際アート、非常に大きい大会議場がありました。1,000人のコンベンションセンター、30年前にできたのですが1回も1,000人入ったことがなかった。最大が、「新婚さんいらっしゃい！」の公開録画630人で……（笑声）だまされてしまったのですね、これをつくれば労働組合の大会とかの誘致で、城崎温泉が潤いますよと。これをどうにかするということでリニューアルしました。6つのスタジオと25人までが宿泊できる国際的なレジデンス施設、これはカフェです、自炊もできます。年間20日間しか使われていなかった施設が、初年度から330日の稼働、世界中から、去年は15ヶ国45団体からの申し込みがありました。そして、その団体は作品をつくっているだけでいいのです、発表しなくてもいい。ただし、

リハーサルを公開したりとか、学校に行っちょっとワークショップをしてもらったりする。一つの団体を呼ぼうと思ったら500万、1,000万かかる団体が、みんな自分たちで来てくれます。豊岡市の持ち出しは維持費、光熱費だけです。そして、豊岡の子どもたちは、毎月のように、あるいは毎週のように世界最先端のアートに触れることができます。

私たちの標語は、「このまちで世界と出会う」。豊岡市は東京標準で考えない、世界標準で考えるということを標語にしています。私、ここの芸術監督をしているわけで、市長からの依頼は、東京の有名なアーティストを呼ぶ必要はまったくありませんと、世界水準のものを呼んでくださいと。要するに、東京標準で考えるから、みんな東京に憧れて出ていってしまうのだ。豊岡は短大が1個あるだけなので、18歳で外に出てしまうのはしょうがない。でも、そのときに憧れだけで東京には行かせない。理由があればニューヨークやパリに行くのもいいでしょう。でも、憧れだけで、可能性が広がっているという漠然とした憧れだけで東京に行く必要はない。その判断をつけるための文化資本を蓄積させるというのが豊岡市の方針です。豊岡市は、もう来年度から市内39の小中学校全部で演劇の授業を実施します。こういった自治体が出てきている。実際に、豊岡市も奈義町も、あるいは私がお手伝いに行っている、たとえば小豆島町、あるいは写真甲子園で有名になった北海道の東川町、東川町はもう既に人口減少が止まってV字回復しています。11,000人だったのが7,000人台まで落ち込みましたが、8,000人台に回復しています。これも隣の旭川から若い世帯がどんどん移住しているからです。

文化は、今までは何となくあった方がいいというものだったのが、この人口減少対策、要するに人口減少の時代に、地方再生のある種の切り札になりつつあるということです。これに気がついた自治体と気がついていない自治体で5年後、10年後、あるいは30年後に大きな差がつくだろうと。文化政策は東京の、要するに霞が関の指令で動く分野ではないので、中央省庁がないに等しいので、だから地域間格差がすごく広がりやすい政策のジャンルなのですよね。これをどうするかということが今後、地方自治体の大きな課題になっていくのではないかと思います。駆け足でしたが、大体こんなところで午後の議論につなげていただければなと思います。どうもありがとうございました。

分科会 A (個別報告・討論)

コーディネーター：家中 茂 (地域政策学科教授)，東根ちよ (同学科講師)
[第1報告]「タルマーリー」

渡邊麻里子氏 (タルマーリー経営)

私は智頭町でタルマーリーというお店を経営しています。昨年6月に智頭町ではオープンしたばかりです。ただ、この8年間で実は3回も移住をしてきました。私も主人も、夫婦ともに東京出身です。平田先生のお話を先ほど伺いまして、私は、駒場東大前から歩いて7分ぐらいの池尻というところで生まれ育ちました。なので、とても懐かしいお話で、そういうところで生まれ育ったのですが、まずは、2008年に千葉県のみすみ市というところでパン屋を開業



しました。小さなパン屋をこの古民家で始めまして、食べていけるぐらいのパン屋をやっていたのですが、2011年に東北で大震災が起き、福島第一原発が事故を起こしまして、子どもも小さかったですし、ちょっと不安な部分もありました。また、よりよいパンをつくるために、よりよい水が必要だということがわかってきたので、思い切って岡山県の真庭市勝山というところで、2012年に再スタートを切りました。勝山で経営していたときに、主人が『腐る経済』という本を講談社から出版したりして、何とかいい感じにパン屋をやっていたのですが、それでもやはり2015年、去年智頭町に移転して、再オープンをしました。

このように、私たちは東京から徐々に徐々に離れていきました。実感としては、東京から離れれば離れるほど、すごく暮らしやすくなっていきました。水と空気がきれい、昔ながらの風景や文化が残っている智頭町で、今、暮らし始めて2年目に入りますが、智頭町でないとできない事業や生活ができていないのではないかと思います。では、なぜ智頭町にたどり着いたのかということ、これからご説明したいと思います。

まず、タルマーリーというお店が何をやっているかをご説明すると、私たちは事業に3本の柱を立てています。まず、一つ目はパンです。開業当初からパン屋さんをスタートしていたのですが、ポリシーは国産小麦と自家製の天然酵母しか使わないことです。つぎに、智頭に移転した大きな理由に、地ビールをつくりたかったということがあります。こちらにも、天然酵母だけで発酵させるビールをつくっています。全てのビールを天然酵母だけで発酵させるということを日本でやっているのは、タルマーリーだけです。さらに、智頭に移転して、カフェを経営し始めました。現在、客席が40席ぐらいあるのですが、自家製のパンやビールを楽しむ場所として、地元の素材を使ったピザとかサンドイッチを提供しています。智頭町的那岐地区というところで、もともと保育園だった場所を活用させていただいています。この大屋さんは、那岐地区の振興協議会です。このように地域の人たちが大切にしてきた元保育園なので、私たちは地域に貢献する事業をしていきたいと思っています。

このように、旧那岐保育園は、2007年4月に廃園になってから、これは2年前の風景なのですが、ちょっと老朽化して寂しい感じになっていました。これを改装しまして、今はこのようなお店になっています。地元業者さんにももちろん入っていただきましたけれども、なるべく主人が自分でできるところは自分で、DIYで改装しました。今、日本は、大量消費、大量廃棄でごみがあふれている状況なので、私たちは、もう新しいものは余り使わないようにしようと思って、アンティークのドアを使ったり、廃材を使ったり、床を剥がした材でまた壁を張ったり、中古品を使ったりということで工夫してやっております。このように、長く使えるもの、長い時代をかけて通用してきたものが本物であって、持続可能な社会をつくっていくのではないかと考えてやっています。

では、どんなパンやビールをつくっているかというご説明ですが、私たちの一番のポリシーは天然の菌だけ、野生の菌だけで発酵させるということです。パンもビールもそうですが、これは別に珍しいことではなく、昔ながらの製法をとっているというだけのことです。伝統的には当たり前、昔の人は当たり前に行っていた技術なのですが、今、一般的にはみんな発酵食品というものは、イースト菌を買ってきて発酵させます。そうすれば間違いなく大量に均一の製品ができるからです。でも、私たちはあえて野生の菌だけを使って発酵させています。なぜそういうことをしているかというと、主人がパン職人なのですが、主人はそういった自然の菌だけを使ったほうが、職人としては毎日仕事がすごく楽しいと言っています。もちろん失敗もすごくするし、不安定なのですが、毎日表情が違うということが、すごくやりがいにつながっていると言います。さらに、私は食べる人

なのですが、食べる人としてもすごくおいしい、味わい深いと思います。ただ、本当に大変です。失敗ばかりやっけていて、今もパンが膨らまないということがよくあります。なぜこういった腐ったり、発酵したりということが起きてくるのかということはずっと今まで8年間観察してきたのですが、化学物質の少ない環境がいい、水と空気がきれいなところのほうがよく発酵するということがわかってきました。さらに、肥料や農薬をなるべく使わない栽培をされた素材だと、すごくよく発酵するということがわかってきました。特に、炊いたお米を瓶に入れて、ふたをして置いておくとわかりますが、肥料をたくさん入れてつくったお米は、すぐに腐ってしまうということがよくわかります。このようなことがわかってきたので、私たちは結局智頭町にたどり着きました。

そもそも私はそんなにパン屋さんになりたかったわけではないのですが、大学では農学部に行き、環境問題に関心があったので、そういった勉強をしました。地球規模の環境問題を解決する一つの方法として「地域内循環」という考え方を学んで、農業とか食にとっても興味があったので、食品加工という分野でそういう地域内循環を実践してみたいと思っていました。そうしたら、たまたま主人が何か思いつきでパン職人になったのですが、たまたまパン屋さんになってみて、そういった菌が教えてくれることがたくさんあって、そうしたら、環境保全のあり方がすごくリンクしてきたのです。なるべく地域で肥料、農薬を使わない栽培方法、自然栽培が広がっていったら、地下水も汚染されないし、生物の多様性も保たれるし、そうしたら、またよりよい水を使って、私たちはパンやビールを発酵させることができます。さらに智頭町は、後ほど発表される大谷さんが林業家ですが、9割以上が山林なのですが、その山をきちんと手入れしてくれる人がいるから、よい水が流れていく、地下水ができる、だから私たちはいいものづくりができる。なので、すごく微々たる活動ですが、なるべく林業家に恩返しをしたいという思いもあって、まきストーブを使ったり、木材燃料でピザを焼いたりという取り組みも始めました。さらに、そういった自然栽培、肥料、農薬を使わない栽培の作物が地元でできたらいいな、そういう素材を使いたいなというお話をしていたら、智頭町役場が自然栽培の普及活動を始めてくれました。私たちはまだ営業を始めて2年目ですが、地域の人も、早速お米とか、カフェで使うお野菜とか、あと大谷さんがホップの栽培も始めてくれたのですが、そうやって肥料、農薬を使わない栽培というものに取り組み始めてくれてます。もう本当に、今まで千葉、岡山、智頭と来たのですが、智頭の方々の行動力の早さとか積極的な姿勢に本当に驚くとともに、すごくうれしい、喜ばしいというか、励みになっています。

ということで、タルマーリーという事業を展開したいという思いが強くて智頭町に移転したのですが、これからは母親としての視点からお話をしたいと思います。本当は、主人のほうがもっとお話しするのは上手なのですが、今日はせっかく私を呼んでくださったので、女性としての視点のお話をしたいと思います。

智頭に移転した、私の大きな理由は「森のようちえん まるたんぼう」の存在でした。子どもたちを森の中だけで過ごさせるという森の幼稚園ですが、そもそも私は東京・世田谷区で生まれ育って、自分の子どもはもっと田舎で育てたいな、自然の中で育てないなという思いがすごく強くて、なので、あえて田舎でパン屋さんを始めました。ただ、自分も仕事で忙しいし、お店の経営も必死だったし、自分の子どもは保育園に預けて仕事をしてきました。普通の保育園に預けると、田舎に住んでいたとしても、なかなか自然体験というものはさせてあげられなくて、それがすごくジレンマでした。なので、もう子どもも大きくなってしまったし、もうここで最後だな、ここで決心しなきゃと思って、智頭に移転することにしました。実際、下の息子が去年一年間、森のようちえんに通ったのですが、普通の保育園に通っているときは、おもちゃとか遊具とかでしか遊べないよ

うな子だったのですが、一年通っただけで、すごく高い木に登れるようになったり、やっぱり食べ物屋の息子なので、食べる物にすごく興味を持って、山菜とりとかが大好きになって、森で山菜をとっててんぷらで揚げて食べてということが、すごく楽しかったみたいです。彼の人生は、多分去年一年間ですごく変わったなと思います。

もちろん、子どもたちが伸び伸び暮らせる環境に行けたのもよかったです。この幼稚園だけではなく、智頭の地域の人たちが、子どものことをすごくよく見てくれているし、私は働く母親として、すごく暮らしやすく、生きることが楽になったという部分があります。それはなぜなのかなとよく考えてみると、対極として、東京で働く女性との比較をしてみようと思うのですが、自分も、娘は東京で産んで、東京の保育園に預けて働いていた時期があります。そのときは、何かすごく自分の24時間がぶつぶつと切られて、分断されているような気がしたのです。朝起きて、子どもを保育園に預けて、通勤電車に乗って、会社に行き、終わったら保育園に迎えに行き、帰ったら家事をしてみたいな感じが、どうにかこれが24時間自分の時間としてつながらずずっと感じていました。東京の友達はお医者さんになったり、金融系で働いたり、またアナウンサーとして活躍していたりします。彼女たちは今までの成功例としてはすごくすてきな人生だと思いますし、すばらしいキャリアを持っていると思うけれども、やっぱりまだ結婚していなかったり、子どもを産むのが遅くなってしまったりというのは、どうしても現実としてあります。私はちょっと変わっている部類で、あえて田舎を舞台に頑張るぞというふうにならずずっとやってきたのですが、やっぱり実感として、女性として子どもや家族を大切にしながら仕事ができるのは、田舎ならではの感覚を感じています。子育てには広いスペースがすごく必要だなと思いますし、今、子どもたちは学校から、ただいまと言ってカフェに帰ってきて、カフェでランドセルを置いて宿題をしたりしているのですが、やっぱり田舎でないとそういう緩衝地帯みたいなものが余りなくて、都会だったら、会社に子どもを連れていくなにか、公私混同するというのがすごく嫌われてしまうような雰囲気があると思います。さらに、智頭の地域の人たちが、そういった場に子どもがいて当たり前だし、お母さんが頑張ってるのは当たり前だねという感覚を持ってくれているような気がします。さらに、もう一つ、象徴的な出来事、経験がありました。おむつなし育児という伝統的な技術があるということ、東京に住んでいるときに、『赤ちゃんにおむつはいらない』という本を読んで知りました。昔は紙おむつはないし、布おむつにしても洗濯機もないし、昔の人はどうやって育児をしていたのかなと、ずっと疑問だったのですが、この本を読んだら、昔の人は赤ちゃんにおむつに排せつさせるというのが当たり前だったわけではなく、おむつは補助的なもので、お母さんが赤ちゃんの排せつのサインをキャッチして、おまるとかトイレに連れていくのが普通だったというふうに書いてありました。すごくおもしろくて、では自分もやってみようと思って、息子が赤ちゃんのときにやってみたら、本当におもしろくて、初めて育児がすごくおもしろいなと思ったし、赤ちゃんとのコミュニケーションもすごくとれたし、紙おむつに頼るよりも便利だなと、技術のスイッチが一つ入っただけで、すごく便利だなと思ったのです。さらに、千葉に住んでいたときに、保育園の園長先生に、こういうことがあるのですねと話したら、その園長先生は、ああ、そうそう、おばあちゃんから聞いたことがあるわと言ってくれたのです。それが私にとってはすごく衝撃で。ああ、何だ、知っているんだと思って。本から得る知識しかなかったものが、田舎ではまだ残っている、文化として残っている可能性があるということに衝撃を受けました。東京はそういう伝統的なものとか技術というのを全て捨て去って、全部新しいものに変えて、その新しい状態が一番最先端だというふうにも思っていたのですが、本当にそうなのかなと感じた瞬間でした。

今、いろんな情報がテレビやメディアから入ってきたり、インターネットを見ても、いろんな情報が入ってきますが、そういった情報をちょっとお休みして、本当に基本的な人間として幸せな仕事とか生活とは何かとシンプルに考えたときに、私はやっぱり古きよき自然と文化の残る地域でこそ、私たちがやっているような昔ながらの伝統的な方法でパンやビールをつくったり、創造的なものづくりができたり、家族を大切にしたい幸せな生活ができるのではないかなと思っています。今までの価値観でいえば、私の友達が東京でしている生活のほうが成功と言われてきたと思うのですが、自分が実際、東京から移り住んでみて、今、智頭において一番便利というか、何かいいかなと思っています。インターネットもあるし、いつでも情報は取り出せますし、宅急便もあるし、何でもお買い物はできるし、余り格差というものは感じません。たまに東京に帰ったほうが、自分が子どものときよりもずっと余白がなくなっていて、どんどんマンションが建ったり、人口過密が激激に過度になっているような、息苦しい感じがします。ということで、朝の平田先生のお話はすごくおもしろかったし、本当に文化レベルが高い生活というのは大切だなと思います。でも、田舎であっても、その可能性はすごくあると思うのです。芸術と云ったら、演劇とか絵画とか音楽ということをおもひ浮かべますが、私たちはパンやビールを毎日つくっている中でも、芸術品をつくっているような気概でやっているつもりです。これからお話しされる大谷さんの林業でも、岸本先生がお話しされる板井原の暮らしぶりも、すごく高いレベルの文化だなと私は思います。なので、私は田舎を舞台にして、女性として豊かに生きる一つのモデルになっていきたいなと思って、これからも智頭町で頑張っていきたいと思っています。

【第2報告】「持続的な山創りで未来につなげる智頭の林業」

大谷訓大氏（皐月屋）

自分は智頭町で生まれ育ちまして、ただ今34歳です。子どもが3人と嫁さんがいます。実は、麻里子さんたちが経営しているタルマーリーの場所が自分の卒園した保育園でありますし、これからお話しされる岸本先生がおられる智頭農林高校を卒業しました。18歳までは智頭町で暮らして、その後一回町外に出て、めぐりめぐって帰ってきたというところなんです。今、林業をしています。

智頭町は、杉の町でして、93%が山林、そのうちの大体8割ぐらいが人工林です。人工林というのは植林、先人が植林してるもので、一回植林したからには、人間がずっと手を入れてやらないと、森は育たないと。智頭町では、400年を超える慶長杉という人工林も存在します。

そこで、五月田集落という場所が僕の村なのですが、「皐月屋」の由来はこの五月田の「五月」からとっているのですが、お寺さんを含んだ13軒の村です。父親たちが当時から村づくりに力を入れていまして、日本ゼロ分の1運動というところで、かんがえ地蔵さんというお地蔵さんがあるのですが、このお地蔵さんを祭ろうという祭りをしてしています。毎年800人ぐらいの人が来られるのですが、20年前に始めた祭りで、当時の消防法では、山間部の谷間で花火が打ち上げられたということで、今は消防法が変わったらしく、この祭りをやめてしまったら、もう花火は打ち上げることができないのですが、谷間に反響してすごく迫力のある花火で、大阪のPLの花火も見たことがあるのですが、近さとインパクトはこのほうが全然すごいなと思います。

文化というところで考えたら、僕はヒップホップという文化に中学校の頃はまりまして、そこが自分のルーツかなと思います。ヒップホップというのを軽く説明しますと、ニューヨークでカウンターカルチャーというところで、ストリートから、いわゆる低所得者の黒人たちが始めていった文化です。ラップやDJやブレイクダンス、グラフィティなど、多岐にわたるのですが、ヒップホップ

ブの芯の部分というのは、地元をすごくリスペクトしたような発信をしていくといいますか。ニューヨークにはニューヨークのヒップホップの文化があって、それが飛び火して、ロサンゼルスにはロサンゼルス、東京には東京のヒップホップの文化があって、そういうものが大阪にも、鳥取にも小さいながらあつたりします。なので、このヒップホップの中で地域に密着するというのが非常に今でも残っているところです。

それで、23の頃人生ちょっと迷いまして、ヒップホップが生まれた国アメリカに行ってみようということで、サンフランシスコに行きました。1年未満でしたが、そこで気づいたことは、一期一会の大切さ。いろんな人と出会って、一瞬で別れた人もいれば、半年間ほどお世話になったホストマザーがいたり、いろんな日本人と出会ったり。それと多様性がある社会、特に沿岸部でしたので、いろんな人種の方がおられて、それが本当に共存し合っているということがすごく魅力的でした。

帰国して、何をしようかなと思いました。自分の人生の中のパンチラインといいますか、パンチラインというのはヒップホップ用語なのですが、自分の中に心に残るラインがあって、それが中国のことわざで「鶏口となるも牛後となることなかれ」。要するにサラリーマンはできないということです。あと「ない物ねだりよりもあるもの探し」。では、サラリーマンをせずに自営をしようと思つて、何をしようかなと思ひまして、あるものを探そうということに至ります。

冒頭でも言いましたように、智頭町は400年の歴史がある林業地として、実は、自宅には40ヘクタールの所有林がありました。多分小学校とか幼少の頃から、おやじに引き連れられて行っていたのですが、帰国して初めてそれが目に入ってきたといいますか、父親もサラリーマンなので、手入れがおくれておつたと。手入れがされなくなった人工林というのは、下草が生えない、環境面でも、品質の高い材が育たないとか、環境によくないとか、生物多様性が失われたりするという、真っ暗な森で、人工林というのはやはり人間がちゃんと手入れをしてやらないとだめだと。要するに、生命力の低い森であるということです。

では、まず何をするのか。ちなみに、日本の今の林業は林野庁が主導しているのですが、平成22年から始まった森林経営計画というものに基づいていまして、要するに、でかくまとめて、大きな機械を入れて、スピーディーに量を出せという政策をやっています。僕たちがチャレンジしているのは、それとは真逆になるのですが、それは30年、40年前は、普通に行われていた林業です。その普通に行われていた林業が、智頭町にある400年というような木を育てていると思っています。まずは、山に調和した壊れない道づくり、作業道が大事であると。なので、大規模、高性能林業機械が入るような事業体に比べますと、道幅は半分以下です。力わざでつくるのではなくて、あくまで山の地形を見ながら、山に沿わせてつくっていきます。

この動画は、伐採の風景で、これは一応切り旬、新月期にこだわりました。大工さんから注文をもらって、それも手刻みをする町屋大工の友達ですが、倒したまま半年、山で葉がらしをして、そこから製材して、自然乾燥して、その大工さんが最近建てた家の大黒柱に使われています。葉がらしという文化もなくなってきているのですが、本物の材木をつくろうと思ったら、ちゃんと自然の葉がらしをして、自然乾燥をする。その対極にあるのが人工乾燥で、木の水分、油分を一気にぎゅっと抜いてしまうような、そういうものが今の現状です。搬出したものを智頭にある石谷市場に持って行くのですが、例えば左上の運搬車、60年製ぐらいの並材ですが、1杯でざっと1万円ぐらいの価格です。ただ、その下にある、ちょっと太いヒノキは100年を超えて、長さが6メートルほどあるのですが、1本20万円で売れました。こちらの杉も1本7万円とか、それなりにやはり山を育てて、高品質の木をつくれれば、ちゃんと価値があります。

間伐すると、林内に光が差し込み、下草が生え、生物多様性、残した木は銘木となる。僕たちが大事にしているのが、この生物多様性が担保された山林で林業を行うこと、それと、永続的に管理された山から持続的に収入を上げること。生物多様性のある山というのは、智頭でいいますと、モモンガがいたり、獣害ですが、鹿がいたり、間伐をした空間にシイタケを植えたり、ナメコを植えたり、大体裏山とか付近の山でこういう光景が見られます。

では、林業は結構お金がかかるのではないかと話ですが、自分の場合は、これもあるもの探したと思うのですが、40ヘクタールの所有林と父親が中古で60万円ほどで買っていたバックホー、祖父が使っていた30年前の林内作業車、チェーンソーも自宅にあり、3トンユニックだけを中古で200万で買って始めました。なので、全部購入しようと思っても300万とか、ちょっといい車を1台買うぐらいで事業が始めていけると。

僕たちが大事にしているもう一つのポイントが、デザインをするということです。ただやみくもに切るのではなくて、残した木は銘木に育てながら、山のバランスを見て、その山の景色を楽しむような林業を心がけています。庭道の方に聞いたのですが、庭道も用と美のバランスを大事にするということがあるらしくて、林業もそれに通ずるものがあるのではないかなと思います。

持続性のある山は生命力の高い水を持続的に生み出す工場である。豊かな水と空気で、その後につなげて食をつくっていくと。うちは米づくりもやっていますし、先ほど麻里子さんが申されたホップも最近チャレンジしてまして、麻里子さん達のタルマーリーは家から本当に歩いて10分、スケボーで5分ぐらいの距離にあるのですけれども。大体下り道なので、ずっとスケボーに乗っていたら着くのですが、ビールを飲んでも帰りは飲酒運転にならないといえますか。(笑声) そういう場所で、ビールをたしなむことが最近ふえたので、その原料となるホップもチャレンジしてみようかなという動機です。これが最終的に生命力の高い海をつくと。夏になったら、海でよく遊ぶのですが、山と海はつながっています。

持続性のある山づくりは最近ないがしろにされていますが、一回携わった山から離れない、山守的経営だと思います。智頭には山の番頭制度、いわゆる山守制度がありまして、こういう山には旦那さんと番頭の関係があると。その番頭は、要するに目の前にある山には、何千本という木が生えていて、例えば将来性のある木を切ったら、その日は収入が上がるかもしれませんが、山主からすると、それは嫌がるわけです。ただ、それは山奥のできごとなので山主は多分わからない話です。ただ、目の前のことを一生懸命、真面目に欲を出さずに取り組むという日々の行いが、人間力といえますか、徳を積んでいけるのだなあというのを、先輩の林業家の人を見ていたら、思う人がおられます。なので、山づくりを通して人をつくっていくということも大事にしていきたいなと。

ちょっと世界に飛ぶのですが、世界の林業はどうなのかということです。時間の関係上、さくっといきますか。オーストリアに行ってみたのですけれども、オーストリアも大規模に展開していました。ただ、法律で景観を大事にしろという法律がありました。安全につながる、ちゃんとした林業教育があって、結構カラフルな山で目立つように、多分今日のパンフレットは、僕の写真は全身迷彩ですけれども、7年前はああいふ全身迷彩で山に入っていました。今考えるとちょっとぞっとするのですけれども。(笑声) こういうことも教育をちゃんと受ければ、全身を目立つようにして事故防止につながると。これは生産量と労働災害のグラフですけれども、オーストラリアは1990年から反比例していると、日本はこれが比例しています。生産量が上がれば死亡事故も起きています。それは、林道の整備もそうなのですが、やはり徹底した教育がなされていたと感じました、教育の大事さというところを。オーストリアに行っても感じたことは、先ほども言いました、永続性

のある森で持続性に収入を上げていくというところでした。とりあえず、どっちかに偏ってしまっても持続性はなくなると、それプラス、教育がしっかりある。

林業とは温故知新であると日々思います。古きを学ぶ。例えば、戦争で油が入ってこなくなって、エンジンが動かなくなってしまう状況になっても、60年、50年前の人は木を出せていたわけです。木のレールを敷いて、知恵を使いながら、山から木を引っ張り出すと。このレールにも油を塗ったりして滑らせながら、ワイヤーでブレーキをかけて出していたと。

新しきを学ぶ団体として、誰でも自由にゆっくりと、ちゃんとした講師から林業を学ぶことができる「智頭ノ森ノ学ビ舎」という団体をつくりました。町から町有林60ヘクタールを委託してもらって、今日もそこで林業塾をやっているのですが、やはり最初の指導者がすごく重要です。僕は独学で始めているので、学び直している状況ですが、今、1ターンで来た人とか、地元で林業始めたいという若者が学んでいるのですが、彼らの技術の向上はすごく目まぐるしいです。それはなぜかといったら、やはりすごくちゃんとしたといいますか、いい講師にめぐり会えた。講師は奈良の吉野から派遣してもらったり、全国ですごく頑張っておられる林業家を呼んでいます。今はチェーンソーで切り、くさびはプラスチックのものを使うのですけれども、カシの木のかさびと、なた、刃物で木を倒すと、それに、先ほどの木馬という運び出す方法を知れば、別に油が入ってこなくても、道具さえあれば木が山から出せます。今年で2年目になりまして、去年から受講しているメンバーは、大分スキルも上がってきて、すごく上達したなと思います。これは吉野で撮った写真で、250年以上の杉と言われる木です。吉野はやはり智頭が目標にする地域だけに、こういうものがまだまだたくさんある風景を見て、僕たちが目指さなければならないのは、ここだなと思いました。というところで、終わります。ありがとうございました。

[第3報告]

「智頭町板井原集落での高校生との活動で見えてきたもの、そしてその課題」

岸本智志氏（智頭農林高等学校教頭）

板井原集落というところでの取り組みについて、報告をさせていただきます。本日は、とにかく「実践の知」を話してほしいという依頼ですので、語りは一人称でのものにしようと思っておりますが、場面によっては三人称の場合も出てくるかなと思います。少し学際的なことを言うこともあるかもしれませんが、ご了承ください。

まず、板井原集落ですが、鳥取道の智頭インターをおりて坂道を車で15分ぐらいかかる、山の中の集落です。記録上の戸数は23戸で、昔ながらの建物が残っています。この集落のすごいところは、昔から住んでいる住民は1人だけです。移住者が4人とあと10人ぐらいの旧住民が、ふもとの智頭の町から通いで成り立っている集落です。だから、形態としても、かろうじて、通勤者によって昔ながらの家屋や畑が維持されているというそういう集落です。

私は、隣町の用瀬で生まれて、大学で地理学を勉強しました。神奈川で教員をしまして、Uターンをして、鳥取に帰ってきたということになります。教師をしながら途中大学院で学習科学を勉強しまして、学習とは何ぞやというところに非常に興味を持ちました。現在、60歳ですので「定年マジカ」ということになります。(笑声)

大学生のときに、板井原集落より下流に下板井原というところがあり、ここの調査をしました。この集落が集団移転したのが昭和50年でしたが、私が訪れたのがその3年後でした。ところが、集団移転したはずの集落に、お年寄りの姿があり3、4名の方が通ってきておられたのですね。やは

したものを展示し、昭和30年代当時の集落のジオラマ模型も地域おこし協力隊と、一緒に作成しました。

板井原集落とは、どんな集落か、お話ししておきます。居住形態が独特であるということ、それから、町内有数の観光地であるということです。智頭町の入り口には智頭宿と板井原集落と芦津溪谷の看板が出ています。ですから、智頭町はここへ人を呼び込みたいということで、一生懸命バックアップをしています。県の伝統的建造物群保存地区に指定されています。住民たちがこれまでの家屋を残したまま、智頭の中心部に移住してしまったということが、昭和30年代の集落が残されていた理由です。この地に住んでいたら、建て替えなどによってアルミサッシのある家になってしまいます。それから、現代では隔絶された僻地にあるようなイメージがありますが、その山の中に関わらず非常に豊かな文化を持っています。例えば、江戸時代、麓の広い地域全体の中で庄屋が、板井原に置かれたり、宇倍神社の蔵の鍵を板井原集落が保管していて、この人たちが行かないと祭りが始まらないということです。宇倍神社というのは因幡一宮ですから、その関係性はとても興味深いものです。

それから、この地の神社の神紋は16枚の菊の紋を持っているのですが、拝殿に巻く幔幕には安政3年と書いてあり、菊の紋章が一般に普及していない江戸時代からこれを持っているとは、これもすごいことです。

それから、歴史的文化財以外で、現在にも伝わっている大きな文化遺産が2つあります。一つは炭焼き、そして、もう一つは板井原大根というものです。

炭焼きの炭は、通常我々が使っているものとちょっと違います。よく見る黒墨の炭焼きは、窯の中が冷えた形で取り出すのですが、板井原では真っ赤に燃えた状態で取り出して冷ましていきます。白炭という炭の製法でして、鳥取県の東部地区はこの白炭が非常に多いです。白炭は火力が強く、有毒ガスが出ないため屋内でも使えます。県の西部地区はたたら製鉄に使う関係で黒炭になりますが、この技術もこの地域でしっかり受け継がれているということです。

板井原の大根は焼き畑を起源としています。畑を焼きその灰を栄養として育てた非常に小さな大根ですが、私たちは生徒と一緒にこの大根の栽培に従事されている住民の方に、種まきから収穫まで全部参加し、それを記録しパネルにして展示室に展示をしました。この大根を栽培しているのは、この集落でも1軒の方だけで、もう80過ぎの高齢の方です。この大根、全国でも5種類ぐらいしか残っていない幻の大根で、花までさかせた大根から種を取り、ずっと自家受粉させて守り続けられています。後継者がおられず、この方がなくなってしまうと、本当に消え去ってしまう文化です。

住民とのかかわりの中で強く意識させられたことは、住民の方々が持っている歴史文化に対する誇りと自信です。それに継承されてきた確かな技術です。そういった物事に対するこだわりを記録し、残していくことは、高齢者中心の集落では、絶対に残しておかなければならない文化遺産だなと思っております。

これまで活動に参加してきた生徒たちの感想ですが、祭りの中で、村の人たちが一生懸命お祈りしている姿を見て、祭りをとても大切にしていることを実感したと書いていました。遠くから何気なく見ていたものと、その祭りに一員として参加して、住民がお祈りをしている姿を見るというのは、これは全然違う、見え方が違って来たということです。それから、今回の様々な体験活動を通して、今まで自信のなかった自分が強い自分を持つことができるようになったということを書いてきた生徒もいました。活動に参加することで、自分自身がどういうものであるかということを見つめなおすことができるようになったと書いていた生徒もいました。地域学は反省の学問であるとい

う言い方を、9月に亡くなられました仲野先生が本に書いておられましたけれども、まさに地域学のあり方だと思っています。地域に入りながら、人々の姿を対象とすることで、自分のことに目が向くということなのでしょう。

私自身の問題もちょっと最後、話させていたきたいのですが、とても大きな課題として考えているのは、地域連携のゴールって何なのかということです。先ほど定年間近と言いましたが、農林高校としての活動は終了せざるを得ないということです。最初は限界集落をも超えた集落をどう維持していくのが、大人でさえも答えのわからない課題を、生徒と住民とがかかわりながら、何とか答えがみえてくるのではないかと期待しました。今思うと最初はたいそうなことを思っていたのですが、正直言うと、この集落の活性化というところは本当に厳しい現実があります。でも、我々教師の立場としては、生徒が確実に成長していく姿を見ることができた、これは事実です。それから、住民の人たちからも、とても喜んでもらえたという実感もあります。では、我々がこの集落へのかかわりをやめてしまうと、花籠祭りはまた、担ぎ手がいなくなってしまう。その次はどうするのか、鳥大の学生さんたちもおられ、いろんな地域支援にかかわっていきますが、一旦入って、その終わり方をどのように考えるかということは、やはり入る前から考えて、その終わり方、ゴールの仕方、それも考えていかなければいけないかなと思っています。離れていくのか、誰のための活動なのか、持続可能な活動って何なのか、今、当事者として悩んでいます。

実は、ここが一人称での語りです。自分を見ているもう一人の自分をそこに書きましたが、客観的に見ると、本当に地域の活動への参加ということは、確実に自分事になっている、自分を対象化できる、課題をいろんな人と共有できているということなのです。最後はやっぱり、自分は何なのかということが見えてきます。大谷さんや渡邊さんの先ほどの語りの中にあっただと思うのですが、やっぱり地域とかかわって、自分がどうなるかということ、最後は客観的に見える自分、メタ認知的な、自分自身をもう一度振り返ることができるかなと思います。

これは、柳原先生が『地域学入門』で書いておられる地域学の視点と方法ということです。4つ挙げられました。問題解決に向けた能動的・分析的な視点、生活の知に着目する視点、私からの視点、移動の視点ということ。これが一番大きな課題であるかと思うのですが、非常にこの答えは難しくとても出ませんでした。生活の知に着目する視点、これはできました。ここの知がいかにかにすぎいか。私からの視点、これは活動に参加すれば必ず見えてきます。移動の視点、自分は退職しますが、今度ひょっとしたら別のかかわりの中でこの地域を見ることになるかもしれない。そうなると、やっぱり変わってくるかなと思います。自分自身というのはやはり、周りのものとのかかわりの中で変化していくのかなと思っています。

人がいなくなるばかりであった板井原集落もちょっと変化がありました。去年の4月に県外からこの集落に2名の方が移住されてきました。喫茶店の経営者も結婚されご夫婦で経営されています。これまでとは違った動きがこの地に確実に起きているようです。人の移動が行われると、地域というものも変わってくるかなと期待感もてます。

今、先ほど紹介した「板井原こうこ」を皆さんに食べていただいています。本当に幻の味になってしまうかもしれません。去年の11月のTBSの「時事放談」に、片山前知事が、忘れられない味としてこの板井原こうこを紹介されていました。食べていくと病みつきになって、これがあれば御飯を何杯でも食べられるなという逸品です。でも、この文化が本当にある意味、風前のともしびと言ったらちょっと失礼ですけども、なかなか受け継がれない現実があります。そういった中で、自分はどのような立ち位置にいればいいのか。生徒の成長のみに満足していればいいのか。退職後も

その地域の実践活動にどのようにかかわって、どうあればいいのかなど、諸々のことを、考えざるを得ない今の自分がいます。以上で発表を終わります。ありがとうございました。

【分科会 A : 討論】

○**家中氏** それでは、分科会の後半に参りたいと思います。後半は、それぞれの方が互いに、同じ智頭ですから、結構顔見知りだったりするかもしれませんが、そのお話を聞いてどうだったか、あるいは午前中の平田さんのお話なども交えて語り合っていていただいてもいいかなと思います。その呼び水として、東根さんが、まず、その3人のお話を聞いてどう思ったか、共通点とか、あるいはそこに流れている一つの感覚とか、そんなものをちょっと3人の方に投げかける形で、それにまた答えていただくという形がいいかなと。お願いします。

○**東根氏** 午前中の平田先生のお話のときに、3人の方がすごくうなずかれていたのが印象的でした。もし、ふだん活動されている中で、平田先生のお話を聞かれて感じたことがあれば、お伺いしたいと思いました。

もう一つ、私、いつもすごくすてきだなと思うのが、例えば麻里子さんはパン屋さんやカフェを運営されていて、大谷さんは林業を運営されていて、普通だったら余り接点がないけれども、智頭というところだと麻里子さんのビールのホップを大谷さんが栽培されていたり、ふだんからすごくつながりがあるようなイメージがあるのですが、私も詳しくそこまで知っているわけではないので、ふだんの智頭での、岸本先生も踏まえて、つながりはどういう感じなのかなというのが気になっているところではあります。

○**家中氏** では、順番に語ってもらえますか。

○**岸本氏** 高校生を、1年生の生徒を連れて、大谷さんの集落、五月田に連れて行って見学させてもらっていますし、それから、この前もタルマーリーのほうにも生徒を参加させてもらっています。高校生もやはり地域のことについて学ぶということで、地理基礎というのを設けて、全員がやはり地域のことを学ぶ。やはり、その特徴的な場所という、どうしても大谷さんの住んでいる地域、それからタルマーリー、あるいは板井原にも連れていくのですけれども、そういったところを学ばせる場所としては本当に最適かなと思っています。ただ、あくまでもまだそれは見学の段階です。

○**大谷氏** 平田先生の話聞いて、自分のそのコンセプトというか、特に最近、山を通して、調和というところをすごく大事にしていきたいなと思っております。その反対にあるのが分断だと思っていまして、分裂とか、それは麻里子さんの旦那さんの格さんもよく言われることで、今の社会は分断、分断されていていっていると。それをいかに調和させていくかというところがこれからのポイント

なのではないかなというところはすごく共感しました。それで、関係ですけども、特にタルマーリーは近いので、よくお酒をごちそうになり、それで、シイタケがとれたらシイタケを持って行ったり、お金でのつながりではなくて、物々交換ではないけれども、そういう緩いつながりをつくっていったらなと思っています。あと、奥さんも働かせてもらっている、そういう面で家族ともど



もお世話になっております。

○渡邊氏 こちらこそお世話になっておりまして、こんな近くに訓ちゃんみたいな存在がいてくださるというのは本当にありがたいことで、奥様もすごい、仕事がすごくできる人で、うちでバイトをしてもらったりしているのですけれども。平田先生のお話、本当におもしろかったのですが、自分も東京で生まれ育っているのに、文化格差という意味では、実際に智頭町で生まれ育ったらどうなのだろうというのは、正直自分が経験していないので、ちょっとわからないところがあるのですが、確かに自分もいつでもコンサートに行けたり、いつでも映画館に行けたりという環境だったので、すごく豊かな文化に触れて東京で育っていたなというのは否めないと思います。でも、ちょっと時代が変わってきて、例えば私みたいなパン屋とか、多分一昔前だったら誰も田舎のパン屋なんて見向きもしなかったと思うのですが、ただ、どういった分野であっても、ちょっとおもしろいこととかいうか、私たちも地域資源を生かして、持続可能な形でものづくりをしていきたいと思うのですけれども、それはすごく大谷さんとも共通点があって、それは林業であってもパンであっても、そこを突き詰めようとする姿勢にみんな今着目してくれて、どんな田舎であっても、車もあるし、情報も発信していれば、いろんなおもしろい人が来てくれるという状況にあって、私は智頭の山にいても、すごく刺激的な毎日を送れているので、そういった意味で、自分が仕事を頑張れば頑張るほど、子どもたちにもいろんな人に会わせてあげられたり、いろんな文化に触れさせてあげたりすることができる社会になってきているのではないかなとは自分で今思っています。

○岸本氏 平田先生の話にちょっと触れられませんでした。文化は、芸術的なものは田舎にはなかなかないので、先ほど申し上げましたように、非常に田舎ならではの文化がそこにはあると。やはりその文化が本物であると。平田先生もその本物に触れさせることが大事であるということをおっしゃいましたが、やっぱり本当にそのずっと長く伝え続けられてきたものというのは、本当の文化として残っている。田舎にも本当の文化は絶対にあると、生徒たちにはそれにやはり触れさせたいという思いは物すごくあります。

○東根氏 確かに、麻里子さんも報告していただいたときに、子育てのおむつの話のときに、田舎でまだ生きている文化があるかもしれないということをおっしゃっていて、さっき別の部屋での打ち合わせとか、その中でも平田先生の話の中で、もしかしたら智頭は文化的に豊かかもしれないよねとちらっと言われていたと思うので、そのお話を少しお聞かせいただいてもいいですか。

○渡邊氏 そうですね、自分も東京を離れるときは、正直すごく怖かったですね。東京で暮らすということ以外は知らなかったですし、まさに日本で東京が一番、何というか、やっぱり進んでいるみたいな価値観がつくられていると思います。でも、実際に自分は智頭に来て、すごくみんな文化レベルが高いなと思いました。常に体を動かしながら仕事をしている人たちが多くて、あと、林業ってすごく長いスパンで物事を考えている。おじいちゃんが植えた木を今どうしようとか、自分が植えた木を孫はどうしていくのかとかいうことを多分ずっと考えながらやっているのかな。そういう思考の仕方というのが、やはり東京だと自分の人生、自分だけの人生をいかに幸せに暮らすかということしか私は考えていなかったのですが、そういう考え方の違いとかがあって、何か田舎の人って、本当にすごいなと思います。仕事はできるし、文化レベルは高いなと智頭に来て特に感じています。

○東根氏 大谷さん、今、かなり長いスパンで物事を考えられているというコメントもありましたけれども、大谷さんが、今のそんな長いスパンで物事を考えられるというのを、若い世代になかなかないと思います。大谷さんはヒップホップが一つ原点だったとは言われていましたが、ほかに何かそ

ういう問題意識というか、考え方のもとなるようなものがあつたりしますか。

○大谷氏 そうですね、林業の明日は5年後とか、林業のあさつては10年後という世界でやってみて、本当に400年以上前の人が植えた木があつたり、あと枝打ちという施業をする時期もあるので、ビール瓶ぐらいのときですか、木が。それを玉切りをしたら、材を半分にしたら、枝打ちの跡が出たりもするのです。なので、その年輪を逆算していったら、20年前に誰かが枝打ちをしているとか、それをずっと逆算していったら、50何年前に誰かが植えているとか、60年たつて初めて自分が切ったとかという、一本の木にその木の情報が全部あるといいますか、その当時、傷をつけていた木はやっぱり切ったら腐れが入っていたという、哲学的な話になるかもしれませんが、誰かがこの木の場所で汗をかいて仕事をして、その汗を吸って大きくなっている部分もあるとか、何かしらその土地が記憶しているようなものがあつたりというのは日々感じるものがあつたりして、そういうところを踏まえながら、あとは、田舎で確かに情報は今でこそ入ってきているけれどもという部分は、田舎を拠点にして、やはり世界に視野を向けて、今だったら関空まで智頭からでも2時間少しで行って、すぐ飛行機に乗って、ぱつと行ってぱつと帰ってきて、また田舎でお金をためたりして、また冬になったらぱつと行ってみたい、それでいいかな、別に東京でなくてもというところは自分の中にあります。

○東根氏 また麻里子さんに戻ってしまうのですが、麻里子さんは余り東京を経由せずに、最近世界とつながっている、色々世界から取材が来られたりしていると思うのですが、今、大谷さんが言われたようなことに対してどういうふうに使われますか。

○渡邊氏 そうですよ、それも平田先生がおっしゃっていたとおりだなと思うのですが、東京が一番ではないというか、もう世界に直にリンクしていけるような社会になっていると思うのです。この間も「NHK ワールド」の取材が入って、その番組が放送されると、フェイスブックでタイからもメッセージが来たり、番組を見たから雑誌に載せさせてとか、本を翻訳したいとか、全世界とのアクセスは常にできるので、それは本当に時代は違うし、東京は本当に最先端かといったら、全然そうではなくなっていると思います。本当に中国も台頭してきていますし、インドもこれからすごいと思いますし。だから、別に山奥とか関係ない、全く関係ないとは思っているし、むしろ昔ながらの資源が残っている、それを生かしていかに自然と調和しながらものづくりをしていくかということを生かすならば、もうそれが世界共通の文化になっていくのではないかなと思っています。

○家中氏 はい、ありがとうございます。

それで、僕は、僕は大谷君とか若い世代がもう一回、山でやろうとか、自営で農業、林業をやっているような人に会ったりする機会が多いのですが、それと今の麻里子さんの話とも関係するのですが、その物をつくるということ、あるいは生産ということ、僕らはもう一回考え直してもいいのかなと。というか、大谷君なんかはもう自然な感じでさうだと思つてのですが、大谷君たちの親の世代って僕らに近いのですが、そのときの20世紀の生産というのは、ただ物をつくらう、物量で稼ごうという生産ですよ。だから、その生産を見直して、今度は消費の世界だと。ところが、どうも最近見ていると、ちゃんと物をつくっているのですよね。だから多分、大谷君のお父さん世代、これ智頭のむらづくりって全国的に有名なところですが、そこはまた違う、兄弟というか、小学校の人数が少なくなっているかもしれないけれども、何か考えて、しかも智頭の学ビ舎のような形で山を育てていこうとか守っていく。そういう土地柄だろうから、恐らく渡邊さんもそこで、もう一回ものづくりをしっかりとやってみたい。そこには多分、生産というものについて、どうも前の時代とは違う、でも、大切なものはきつと行われていて、そこがやっぱり社会の一番基盤のところ、物とか

食べるものだけではなくて、僕は第3部でコーディネーターをする小泉さんとも話すのですが、どうもアートとかそういうところも、つくるところは大変重要になってくると。ただただ大量に情報を享受する、消費する、アートを消費するというのではないということを考えたり思ったりするのですが、ちょっと話が大きくなりましたが、改めて、生産とか物をつくるとか、あるいは前の時代と違う感覚というのをそれぞれに教えていただけたらなと。

また、岸本先生も若い世代の人たち、10代の人たちとおつき合いしながら、そこら辺のことをどう感じていらっしゃるかなというのをちょっと教えていただけたらなと思います。では、大谷君から順番に。

○大谷氏 そういう意味ではやはり日本人なので、ものづくりをしっかりとしていかなければいけないという思いはあって、ただ、自分がやっているジャンルは林業というところで、自分につくれるものは何かと思ったときに、やはり高品質の材であったり山だと思って、その山をつくる、それは作業道にも連結するのですが、やはり全てにおいて言えるのが、本物志向でいきたいというのはあります。本物志向って多分すごく手間暇かかるし、何か余り評価されないような時代だと思うのですが、多分それは自分の自己満足の世界でいいと思っていて、それで飯が食べられれば、別にどれだけ稼げとかではなくて、本当に自分の哲学と美学を持って仕事をしたいほうがいいとよく渡邊格さんに言われるのですが、そういうことだと思います。

○家中氏 では、麻里子さん、お願いします。

○渡邊氏 そうですね、私の父親とかその上の世代の方からしたら、戦後食べられない、おなかですいている状態で、このようなのんびりした伝統的な豊かなものづくりというわけではなくて、もう大量に、みんながおなかいっぱいになるような生産の仕方の方というのには当たり前だったと思います。ただ、今、もう日本は人口のピークで、これからどんどん人口が減っていく時代に入っていくと思いますし、子どもがこれだけ減っている中で、今までのやり方で本当にいいのかと思ったら、やっぱり弊害のほうが大きくなってきています。こんなにいっぱい新しい物をつくって、100円ショップでみんな買って、1週間後にごみになってみたい状況に行ったら、もうどんどん自然環境も悪くなっていく、自分たちの生きる領域がなくなっていくと思うのです。

さらに、労働の問題で考えれば、都市部では分業、分業、一つのことをやればいいと、平田先生はまさにおっしゃっていましたが、逆に、私は子どもの頃からそれがすごく不安で、お父さんが会社で何をしているかもわからないし、自分が仕事をして何か社会貢献している実感というのが、会社に入って働いていてもどうも余り実感できなくて、それを逆戻り、時代に逆行しているかもしれないのですが、今は本当に、大変ですけども、でも、自然とともに毎日違う仕事をして、今日はずまくいったとか、今日はだめだった、自分の技術が上がったとか、観察力が上がった、自分の技能が上がってさらに仕事がよくなるというのが、遊びと仕事の垣根がなくなる。多分、昔の人はそういう部分が多分あったと思うし、そこから生まれる感動というのがあれば、そんなにお金を使って遊びに行かなくても済むし、でも、刺激というのは本当にインターネットがあるから、いろんな国の人たちから受けることができるのですね。だから、若い人たちはそういう生き方を多分どんどん志向しているのではないかなと思います。

○家中氏 そうですね。林業も実は非常に繊細によく観察するし、恐らく発酵の世界なんか、特にそうだろうなと思います。岸本さん、どうでしょうか。

○岸本氏 農業高校は、様々な農林業技術を生徒に伝えていくということが大きな使命でありますけれども、ここが本当に他の普通科高校とはとても大きな違いかなと思っています。生徒にとって

やっぱり必要なのは、先ほどお二人が言われているのですけれども、本当に本物志向ということで、学習科学の言葉でいうと、オーセンティシティーという言葉を使っています。正当性、真実性ということで、本当に伝えていくべきものが本当に価値あるものなのかどうかということをやっぱり我々がちゃんと見きわめて、それを学びへの世界にいざなっていくというのが我々の仕事かなとは思っています。ですから、我々自身が、これは本当に価値があるの、でも、教科書に書いてあるから何となく教えなきゃいけないとか、それから、入試に出るからねというのは最悪のパターンでありまして、そのことに本当に価値があるのだよということ、そういう知識でないと、実はその得た知識をほかの場で生かせない。転移という言葉を使うのですが、転移は起きないということのはっきりしてしまっていて、本物の知識であれば、いろんなところで応用がきく、それは方法論も含めてですけれども、そういうことをやっぱり教えていかなければいけない。その本物の場が、この地域にはあるなと思っております。

○家中氏 ありがとうございます。恐らく、古いからいいとかではなくて、自分たちが何かしよう、つくろうとしたときに、いろんな手がかりが詰まっている、あるいは、先ほど先人の、枝を打ったときの人の思いとか、鉦の切れぐあいが見えるという、その手がかりがあるようなことがとても大切なのかなという気もいたしました。

それでは、一緒に討論と言いながら、時間がどんどん押してきて、むずむずしていらっしゃる方もいると思いますので、どうぞ遠慮なく、言いつ放しで結構ですので、第2部が終わってこれで話が終わってしまうというのではなくて、第3部につなげていきますので、どうぞ感じたこと、提案しておきたいことを手を挙げて御発言ください。特に3人の方の出てきた発言に関係することで重ねてもらえたらうれしいです。

○会場発言 今日たまたまというか、意図的に3人とも智頭の方がお話ししてくださって、多分ふだんから大谷さんと渡邊さんはすごくわかったのですが、3人ともそれなりに多分つながりを持っておられるのかなと思って、何かそれがすごく自然だなと感じたのですが。

私は神戸市出身で今、鳥取の湯梨浜町に住んでいるのですが、生活している上で全然違う、酒屋さんと呉服屋さんとか、いろんな全然違う仕事をしている人も、常に仕事の業種は違っても生活の上ではすごくつながっていて、それが、私の両親は自分のしている仕事の同業者の人としかほとんどつながりがなかったの、今の生活に移ってからすごく衝撃を受けました。すごく感覚的なのですが、それってすごく心強いし、自然なことだなと思っていることを今、話を聞きながら思い出したので、それは一つ、つぶやきみたいな感じなのですが。

○家中氏 ありがとうございます。ちゃんとメモして、次の第3部で話題にするみたいな。

○会場発言 それと、もう一つ、結構消費、100円ショップでいろんな物をそろえて、でも、すぐにだめになるというお話もあったのですが、例えばさっき年取が幾らとかという話をよく世間ではするけれども、自分のことで言えば、今の生活、湯梨浜町に引っ越しをしてから、野菜は常に家にあふれているし、例えばちょっと水道とか電気に不備があったときに、神戸にいたときは、大体ネットで調べた相場の10万円とかで業者に頼むというのが普通だと思っていたのですが、今はとりあえず近所の詳しいなおじちゃんに聞いて、まず自分でできそうだったらやって、無理そうだったら詳しいおじちゃんに聞いて、どうしても無理だったらちょっとインターネットを調べてという。お金の感覚がすごく変わってきていて、地元でいたときのまとまった大きなお金を何の違和感もなく自分の知らない人に払って、自分の身の回りのことをやってもらうという感覚にすごく気持ち悪さみたいなものを感じたりしているの。例えば1,000万稼いで、出ていくお金もすごく多いというの

と、それより半分のお金を稼いで、でも出ていくコストもすごく少ないというのは、どっちが豊かなのかなとか、そういうことを聞きながらすごく考えさせていただきました。

○**家中氏** ありがとうございます。何人か、もうまとめて先に発言していただいたほうがいいかな。それで、そのどれかに感じたことを一言、後で言っていいただければいいと思います。

○**会場発言** ちょっと聞きたいことがある。渡邊さんに。「腐る経済」というのを読みまして。

○**渡邊氏** ありがとうございます。

○**会場発言** 「腐る経済」、非常によく書けていて、目からうろこが落ちるようなことが書いてあるのですが、千葉から落合、そして智頭においでになった、この移動しながらでも立派な経営が成り立つという資本、資本は銀行なのか自己資本なのかということ。それから、大谷さんは、自分の資本があつてやっておられる。だから、ゼロからということは市場経済では難しいわけで、ある程度資本がなければ。その資本の調達、それから知恵も要りますね。その資本の部分をお聞きしたい。

○**家中氏** では、また後でですね。どうぞ、ほかの方。まだ発言されていない方、どうぞ。

○**会場発言** 貴重なお話ありがとうございます。私、岩手から参りました。それも今回いらしている渡邊さんのところで研修をさせていただくために、本物のものづくりにほれて、電車で10時間以上かけて来ました。そういった中で、本当に本物のものづくりということを大谷さんもお話しされたと思いますが、すごくそこに興味があるのですけれども、まだまだ大量消費というか、そういうことが主流な中で、価格的に当然高くなることもあると思うのですが、その取り組みは本当に素晴らしいと思いますが、それをいかに伝えて、しかもそれを理解してもらって、その分のコストを出してもらおうということはすごく考えてみて理想的ですが、すごく難しいことだなあと思っています。私は岩手の東北なので余計に東京中心の経済ということではあるのですが、地方でそういったものを伝えて理解してもらって、地域の中で循環できる、その取り組みの発信の仕方というのですか、コツを教えていただければなと思います。

○**家中氏** ありがとうございます。もう1人ぐらいどうですか。

○**会場発言** 私も7月に大阪から智頭町に移住してきた者ですが、今、岸本教頭先生の斜め前ぐらの席に座って仕事をしています。今、教育の分野で働かせてもらっているのですが、もともと大阪にいたときは営業の仕事をしていまして、要は幾らもうけるかという話、競争社会の中にいたのですけれども、投資家さんたちと仕事柄そういう話をする中で、お金さえあればいいという考えの方、お金が全てという方が、仕事上はやっぱりつき合っていないといけないので、そういう話をよくしていたのですけれども、そこにちょっと疑問を抱くこともありまして、お金って本当に大事なのかなという。紙切れという存在を、言う一つの価値を生んだ形にして、幾らでも発行できるような銀行があり、日本銀行があり、そのために追い求めている人生って何なのだろうという疑問を感じた中で、タルマーリーさんの本を読ませてもらったり、そういう中で色々感じる部分もあったのですが、子どもたちという視点で考えて、これからの教育というところで、やっぱり受験があったり、いかにいい仕事につくかということもあるのですが、これからの新しい、大学生とか、高校生、中学校、小学校といろんな教育があると思うのですが、地域学も含めての中で、いろんな仕事をされている中で教育という部分でどういったことが必要なのかという、今までのジャンルにとらわれず、どういった部分の教育、教育という縛りも要らないとは思いますが、どういったことが子どもたちにとって必要なかなというところは非常に悩むところがあつて、もしお考えがあるのであれば教えていただければと思っています。

○**家中氏** ありがとうございます。何かやっとな皆さん、みんなと話せるような感じがして、これ

から一人一人が語り合えたらとてもいいだろうと思うのですが、時間の都合もあって、同時に、第3部がありますので、そちらでもぜひこの議論の続きはしていきたいとは思っています。

では、もうこの第2部は締めなくてははいけませんので、一言ずつで結構ですので、全員の方にお答えするという形ではなくて、御発言があったことを受けとめながら一言言っておきたいことがあれば、お話しください。では、渡邊さんから大谷さん、岸本さんという形でよろしくお願いします。

○渡邊氏 はい、資本は基本、自己資本です。なるべくお金をかけずに、主人が引っ越しバイトをしていたもので、引っ越しが得意です。だから余りコストがかかっていないということがあります。

あと、発信は、そうですね、私が販売担当なので発信担当ですが、何も包み隠さずに、生き方から、家族のあり方から、ものづくりのあり方から、何でも発信するようにしています。やっぱり生き方全てを見せて、こういう人たちがこういうものをつくっているのだな、この地域の人たちがこういう栽培をしているのだなとか、そういったものに引かれてわざわざ智頭まで足を運んでくれると思うのです。さらに、そのつくっている空気の中でつくったものを食べるということが私は最終目標というか、そこに足を運んでくれるというふうにしたいので、なるべくそういう発信をするようにしています。

教育の問題はすごく難しいなと思います。この間、フィンランドの例を見たのですが、フィンランドは宿題が一個もなく、授業数も少なく、私もそれはすごく思うのですが、うちの子も余り習い事はさせてなくて、いっぱい家族みんなでしゃべる、コミュニケーション能力だけはうちはすごくあると思うのですが。それに、うちは店もやっていますし、家族みんなで仕事しているあり方を見せるみたいなのがうちの子の強みかなと思っているのですが、答えになっていないですね。

でも、やっぱり田舎って訓ちゃんも林業をやっている、森の中で仕事している姿を子どもも見ていると思うし、やっぱり自分が育ってきたのとは全然違いますよね。みんなが包み隠さず、お父さんの顔をみんなに見せているし、仕事の顔もみんなに見せているしというのが、私は今すごく暮らしやすいなと思っています。

○家中氏 はい、ありがとうございます。では、大谷君も、全体を受けとめた中で自分の言いたいことを言えば結構です。

○大谷氏 僕も幸い、山を40ヘクタール、家が所有していたり、智頭が林業地であったり、母方の祖父も林業をやっていたとか、恵まれていたと思います。ただ、自分は智頭だからこそ林業を始めたと思っていますし、違う土地であれば多分林業はしていなかったかもしれないという、そこにそういうものがあって、それを自分がやろうと思ったからです。なので、ついていたな、だからやり始めたというか、それで、今、人を育てるところにも力を置いていて、そういう人の中にはIターン者であるとか、山林を所有していない人ももちろんいます。では、そういう人たちが技術を覚えてどこで飯を食べていくのかとなったときに、智頭町はさすがだなと思っているのですが、僕たちに60ヘクタールの山を委託してくれて、なおかつ山林バンクというものを今始めてくれて、いわゆる不在者地主の山を智頭が買い取ったり、仲介してくれてやる気のある若者に再分配しようという仕組みも今始まりつつあります。なので、今、智頭で林業を学べますし、それを職業としてやっていけるような環境は整備しつつあるので、そういう面では自分がそこで始めたところがちょっとでも広がっていければなと思っています。

お金の使い方、本物を選んでくれるというところであれば、僕たちのお客様は一つは山主であるので、山主の中には、僕たちは施業し終わった後に所有者にお金を幾らか還元するので、幾らお金が返せるのだと言う人ももちろんいますし、お金のことは心配なくていいので、幾ら返すかは関

係ないので、いいものつくってくれという2パターンがいて、僕たちはやはりいいものをつくってくれというお客さんに対して、逆に言うと、お金は返せないですけどもと言って離れていく人にはそれ以上深追いをしません。そういうところだと思います。

子どもの教育、僕も3人いるので、上の子が来年小学校ですけれども、色々経験させてやりたいなと思います。勉強しろ、勉強しろではなくて、いろんなものを見せてやりたい、いろんな人に出会わせてやりたいなと思っています。これから、麻里子さんなどに聞きながら、いろんな人の教育を見ながら、自分の子どもにも生かさせていけたらなと思っています。

○家中氏 では、岸本さん、お願いします。

○岸本氏 地域学部で学生さんたちが学ばれています。これはすごく大事だなと思うのですが、実は高校の先生たちはなかなかこの地域学、地域に出てやろうというところの理解は少ないのです。大学での教育がどうであったかというのは余り言えないのですけれども、やはり地域に出ることを学んだ人たち、それを本当に意味があることだと学んだ方々にぜひ教員になってほしいと思っています。やはりそういったことを再生産できるシステムが、地域学の方にはぜひこれはお願いしたいなと思っています。地域政策に教員の免許が取りにくいというところはちょっと難があるかなと個人的には思っているのですけれども。

地域学のやはり大事なことは、先ほど申しあげましたように、学習観の転換をしていただいているだろうなど。学習はやっぱり単に頭の中に詰め込むだけと、そういったものではないということをもっと理解していただいている学生さんたちなのだろうな。そういう方がやはり教師になって、学校現場で地域に出ることの意味、本当のものを学ぶことの意味を知っていただいて、それを広げていく、その発信基地になっていただけたらなと思っています。以上です。

○家中氏 どうもありがとうございました。総括セッションがございましたので、そこでまたこの議論の続きはしていきたいと思います。ご報告いただいた、智頭からいらした3人の方、大変ありがとうございました。

分科会 B (個別報告・討論)

コーディネーター：小林勝年 (地域教育学科教授)

[第1報告]

「地域発! 「学習支援」、「こども食堂」、「世帯まるごと支援」の取り組み」

川口 寿弘 (鳥取市中央人権福祉センター副所長)

岡 武司 (こども・らぼ代表)

松本 真理愛 (こども・らぼ副代表)

○川口氏 「地域発! 「学習支援」、「こども食堂」、「世帯まるごと支援」の取り組み」として、鳥取市の人権福祉センターとこども・らぼで共同して実施している取り組みを報告します。

鳥取県で初めてのこども食堂ということで紹介頂きましたが、県内を探せばどこかで同じような取り組みはやっていらっしゃるのだろうと思います。日本海新聞に取り上げて頂いたこともあってそんな書き方をして頂いていたので、それでいいかなぐらいの形で紹介します。私が前半の人権福祉センターとの関係について最初に話をし、学習支援、こども食堂の具体的な取り組み、成果、課題等については、岡さんと松本さんから具体的に話をするという流れにします。

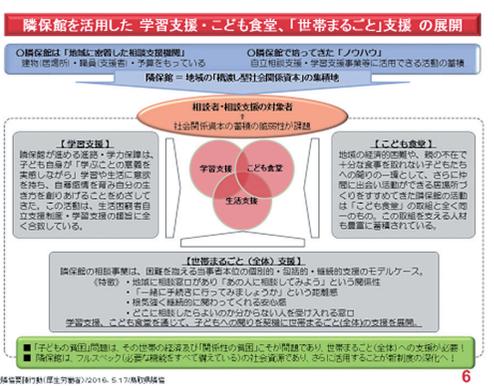
まず、鳥取市の人権福祉センターですが厚生労働省がいうところの隣保館、隣保事業を実施している施設になり鳥取市は条例上、人権福祉センターという名称になっています。市内には中央人権福祉センター含めて10センターあり、人権福祉センターは総務の所属になります。昨年度から生活困窮者自立支援法が施行され、その制度が日本全国各自治体でも具体的な取り組みが始まっているという状況があります。一言で言うと、生活保護に至るまでの様々な困難を抱えている方のサポートをしていこうという制度となり、多くの鳥取県内の様子を見ると自治体直営では、生活保護を担当している担当課に新たな制度の窓口を置く、あるいは社会福祉協議会に委託をするという2パターンあります。

鳥取市の場合はパーソナルサポートセンターとして生活困窮者にかかわる自立相談支援の窓口を人権福祉センターの中に置くという他の市町にはないスタイルをとっています。予算上は生活福祉課についており、執行委任を行って総務で実際の執行をする、あるいは、生活保護とその生活困窮者自立支援制度の一体的運用ということが言われているため職員に兼務辞令を発令して両方に権限を持つような形で実施しています。いずれにしても、人権福祉センターの中に生活困窮者にかかわる相談支援員を置いて窓口を開いているというのが鳥取市の特徴です。

中央人権福祉センターは元々相談事業を実施している施設で、それに今回の新たな自立相談支援事業が加わり一体的に運用しています。住居確保給付金の支援事業や、それに類するものは人権福祉センターで実施し生活保護を担当する生活福祉課で家計相談支援事業等を実施しています。また本日のテーマ「学習支援」や「こども食堂」は生活保護世帯を対象にする学習支援事業と、生活困窮世帯、様々な困難、困り感を抱える子どもを対象にした学習支援、こども食堂は人権福祉センターで実施するというすみ分けをして実施している状況にあります。

こども・らぼや鳥取市との協議で、学習支援やこども食堂の取り組みは何を目指すものか4点に分けまとめています。子どもの進路を切り開くということはもちろんだが行政として困難を抱える子どもや世帯に対してアウトリーチ機能も駆使しながら早期に発見し早期にかかわることによって、将来的な行政コストの抑制につながるという観点もあります。こども・らぼが鳥取県内では先駆けてこうした取り組みを実施しており、地域の重要な社会資源として育てて欲しいのも大事な視点です。また本日のテーマにつながるところだが学習支援、こども食堂の取り組みが、単に困っている子どもを支援するという取り組みだけではなく、そこに色んな社会資源を導入し色んな地域の人たちがかわることで、地域づくり、まちづくりにつながっていく視点も大事にすることを目標に事業を実施しています。

とりくみの目標



スライドは隣保館、人権福祉センターを活用した学習支援、子ども食堂、世帯まるごと支援の展開の内容だが大事なポイントは、学習支援、子ども食堂というのは一つのツールと考えています。要は、子どもが貧困なのではなく子どもがいる世帯が貧困、あるいは何かしらの課題を抱えておりこの世帯を支援につなげることがないと根本的な解決にならないため、学習支援、子ども食堂というのをツールとして、一つのきっかけとして子どもを通じて世帯にかかわる、複合的に抱えているであろう課題を一つ一つ整理するというを人権福祉センターで担っていこうと仕事の割り振りを、子ども・らぼと分けて実施しています。現在は学習支援は5会場で実施しており、子ども食堂は中央人権福祉センターのみで実施しています。

○岡氏 子ども・らぼ代表の岡です。よろしくお願ひします。現在5カ所で学習支援事業を子ども・らぼとして行っています。そのうち1カ所、火曜日に中央人権福祉センターで子ども食堂を行っています。どの館も学校が終わった時間帯に行っており全体で58人、今少し増えているが60人少しの子どもたちが活動に参加してくれています。

子ども食堂は、子ども・らぼとしては個人の負担は無料、お金は取らない方針です。対象者は生活困窮や社会的弱者世帯の小学校高学年から中学生で、なかなか線引きがとても難しいところがあるため弾力的に、何らかの基準を持ってということではなく、相談に来られたから話を聞く、一人親家庭など基準は要るが、その基準によってなるべく弾かれないに心がけています。

学習支援事業は、生活困窮や社会的弱者世帯の児童生徒など弾力的に運用しています。学習支援とは言っていますが塾のように学習をしているものではありません。勉強したくない子も来ますし、学校に行きたくない子も来ます。学校に行きたくない子の前に学校っぽく立つということは、第3の居場所である意味がないと考えており、勉強しなくていいし、分からないことを聞いてくる場合には教えることはしますが、基本的には学校であった出来事を聞く、家の出来事を聞くなどしています。

子どもの貧困は、一番の問題として、我々の目に届きにくいと考えています。それは子どもであるゆえに、自分が困っていることを表明する場所が少ないということが問題です。その貧困家庭の大人も社会的に色んなところから排除されているという傾向があるため、貧困家庭そのものが声を上げにくい、人に頼れないという特徴があります。子どもは特にそれが激しいため、何とかこの子が何に困っているのかということ、またその世帯がどういうことで困っているのか、どういう支援が必要なのかということ聞き取れる場所、「ツール」であって「目的」でない、手段として学習支援ということを捉えています。

子ども食堂は今年の12月ごろスタートしました。去年、一昨年と学習支援のみしていましたがお米が大きいのが3袋使って欲しいと届きどうすればいいのだろうとなりました。そこでそこに来ていた子どもたちと話をしたときに、お母さんが帰るのが遅い、自分ご飯を作っている、この学習支援が終わった後にお母さんが帰ってきて10時ごろに食べるという話を聞きました。

そこで1週間に1日でもそういう苦労がなくなる日ができればいいという単純なところから始まりました。目の前にいる大きな子どもではなく、この子がこういうことで困っている、ではそれに対して何かできることがないかとスタートしたのが僕たちのやっている子ども食堂です。最初はお

「学習支援・子ども食堂」の取り組み



人権福祉センター名	中央人権福祉センター	西人権福祉センター	江山人権福祉センター	南人権福祉センター	高草人権福祉センター
学習支援	○	○	○	○	○
子ども食堂	○				
実施日時	毎週火曜日 子ども食堂 17:00~18:30 学習支援 18:30~20:30	毎週月曜日 19:00~20:30	毎週水曜日 19:00~20:30	毎週木曜日 19:00~20:30	毎週金曜日 19:00~20:30
対象者	生活困窮や社会的弱者世帯の小学校高学年から中学生				
個人負担	無料				

小学生		中学生		高校生		計
低学年	高学年	1~2年生	3年生	1~2年	3年生	
1	7	26	17	6	1	58

にぎりとおみそ汁ぐらいのことはしていましたが、おにぎりをどう握っていいかわからない、ご飯の炊き方がわからないという子どもがたくさんいたため、卒業し大人になってひとり暮らしをした時に、米が炊ければ何とかできるのではないかなども考えて、一緒にできるときは一緒にします。

今年からは毎週1回火曜日、早く来る子どもと一緒に手伝ってくれますし、新聞に載って以降、日本海新聞の威力は大きいと思ったのですが、寄附がたくさん届くようになりその日に届いた、頂いた食材を使いメニューを考えて、みんなで作って食べています。緊急的に食べるものがないという状況は今のところそんなにないため、ツールとして食べながらつくりながらその子のことを探っていく、話をしていく、そんな手段として捉えています。

次に具体的に子どもたちの様子などについてです。

○松本氏 基本的にはみんなでわいわいしゃべりながらまず食事をして、その後に宿題、または家での話を聞くなどの時間に使っています。ここの会場に来ていた子で、初めはこども・らぼのスタッフとなかなかコミュニケーションがとれない子が多くいました。学校に行けていない子もいますし、特別支援学級に通ってはいますが、他の子としゃべることができていない子もいます。母親がトリプルワークでなかなか家に帰って来られなくて、家でも居場所がないという子もいます。そんな中で事業を行ってやっと半年程経った時の様子です。(写真省略) 座布団を敷いて遊んでいるのは兄弟です。この兄弟は、この座布団を敷き始めたときに、自分たちの部屋をつくると言って始めました。様子を見てみると、楽しそうに自分の居場所をつくっていきました。彼らは家に自分の居場所がないから、ここで僕たちの居場所をつくると言って遊びながら座布団を敷いていました。

(写真省略) 逆立ちをして当遊んでいる写真ですが、右側は中学生、左側は小学生です。やはり学校以外の場で関係がもてない子どもが多くいますが上下間、縦の関係で上手に教え合ったり、支え合ったり、子どもたちの間でそういう関係が生まれていると思える様子です。(写真省略) 勉強している様子ですが、学校で勉強するような形は全くとっていません。勉強できる時に好きなことをして分かなければ教えるスタイルで行っています。

最後に、ホワイトボードに書かれた文字が印象的だったので、これを紹介したいと思います。これも先ほどの会場で、半年ほどたった頃に突然書かれていた言葉です。後で聞くと中学校2年生の女の子が書いたそうです。読んでみたいと思います。

「こども・らぼ。こども・らぼを始めるよ。7時から8時まで。変な先生やって来た。勉強わからん。どうしよう。そんなときは教えてもらおう。」

私たちはこども・らぼとして、これを嬉しく思いました。先生ではない自分たちの地域に住んでいる変な大人がやってきて勉強を教えてくれる。何か素敵なたながりが生まれている、これを大事にしないといけないと感じた1枚です。

○岡氏 こども・らぼのプロフィールですが2013年度に「子どもの貧困・ラボ実行委員会」というものを立ち上げました。学習支援をする前にいきなり実施するのではなく、どうい子どもが来るだろうかということを想定しながら3回講座をもちました。

一つは在日の子どもに長く関わっておられる高校の先生をお呼びし今までのかかわりのお話を聞きました。そしてこども学園の職員の方を招きそ



の子たちのかかわりの話を聞き、もう一つは鳥取の行政の方に鳥取市として、子どもの実態や状況に関する話を聞きました。モデルもない状態で全く初めての試みだったため自分たちが何か始めるという時に学習を深め、自分たちは何ができるのかまず考えてみようという講座を実施しました。

2014年度に社会福祉協議会の生活困窮者自立支援モデル事業に手を挙げ、学習支援事業を2カ所でスタートしました。昨年度は市内の5会場に増やしました岩美町で1会場、12月からこども食堂を開始しています。

今年は10月16日にシンポジウムを開催しました。支援を必要としている家庭に、いかにこういう支援があるということをお届けのことが一番大きな課題のため、シンポジウムを開催しました。

こどもらぼのチラシがその家庭に届くということが難しかったり、知っていてもダブルワーク、トリプルワークをしていて、なかなか相談に来られなかったりと、ということがあると思います。

まずこの場所が増え、こども食堂をやってみようかという人が増えること、もしくは、そういう人を知っている人がこういうのがあるらしいと言って手助けをしてくれること。ピンポイントにその人へ支援というだけでなく、その周辺に情報が伝わるようにすることが、僕たちのできることでないかと考えています。

スタッフの写真です(写真省略)。鳥大の学生も、お手伝いをしてくれていますが、全員で10人位います。若いメンバーでやるというのも、若いというのはどこからどこまで微妙なところですが、それも売りだと思います。やはり子どもは、僕らもずっと接していて感じますが、ひとり親家庭、いわゆる母子家庭の子どもで、大人の男性の時点でもうアウトだという子どももいますし、どういふ人であろうと関係なく、男性である時点でもう話ができなかつたりする子どももいます。そういう子どもたちになるべく年が近いとか、あと仕事を持って働いている人もいますので、自分の将来の話、将来像の一つとして見てもらえる、そういうことを狙いにしています。

〇川口氏 ではこれまでの成果、課題等々を簡単に箇条書きしたものです。成果としては、居場所づくりを目指してきたということで、第3の居場所という意味では、ある程度成功してきているかと思えます。

ここに来て看護師になるという夢がもてるようになったなど、具体的な言葉も聞かれていますので、成果が上がっているかと考えています。

あと、こども・らぼの若いスタッフが子どものつぶやきを本当に丁寧に拾い上げてくれて、それをうまく私たち専門機関に伝えてもらいスムーズに支援に繋がるような流れが今できつつあるので、これはとても良いモデルかと思えます。これもやはり若い、子どもたちと近い世代だからこそできる技かと思えます。

先ほどお米が届いたという話もありましたが、子ども食堂をやっているということがどんどん広がって色々な食材が届くようになり、お米は切れないですし、野菜なども切れません。ただ、毎週のように芋、芋・・と届くと、メニューがだんだん困ってくることはありますがそれは有難い話で、本当に食材が切れることなく、尚且つ現金のご寄附もたくさん頂き、寄附では届かない調味料や生ものを買うこともできており、ほぼこの子ども食堂については公的費用を入れていない、市民の寄

これまでの成果

- 居場所づくり(学習支援・こども食堂)⇒将来の夢・可能性・選択肢・機会の拡大へ
- 家庭の状況や将来の夢をあきらめる子どものつぶやき⇒必要な支援へ
- 市行政、市民の課題として展開していく取り組み⇒支援の広がり、フードバンクの構築へ

今後の課題

- シェルター機能(避難所)
家庭や学校に代わって自衛的な対応に直面している子どもの居場所支援
⇒基本的にはすべての中学校区にあることが望ましい
- スプリングボード(跳躍台)
ひとり親家庭等の高校生の中途退学の現状⇒高校生対象の学習支援拠点が必要
- こども食堂の取り組み
学力の支援および効果度が高い現状
⇒こども食堂の地域展開と、食材の安定供給を図る社会的仕組みが必要
- アウトリーチ活動の強化
学習支援やこども食堂が、本来必要な子どもにも届いていない現状がある
⇒入権福祉センターのアウトリーチ活動、「訪問型」学習支援の実施

【地域づくりへ】

学習支援・こども食堂を展開するための地域ネットワークの構築
「支える、支えられる」という一方向関係ではなく、「相互に支え合う」地域の構築

附で賄われているというのが取り組みの特徴です。

そういったこともあって課題とも関連をしますが、食材の届き方、管理の仕方、あるいは子ども食堂がこれから増えた場合の分配の仕方等々の仕組みを、フードバンク事業のようなものも参考にしながら新年度は作っていきたいです。

今後の課題は真ん中の枠のとおり、学習支援や子ども食堂の場がシェルター機能だと考えた場合には、最低限、鳥取市でいうと、子どもが通う中学校区に一つ位あるというのが望ましい姿ではないかと思えます。市行政サイドもそうですが、こども・らぼでもそうしたことを何とか目指そうと今取り組みを進めています。

それからスプリングボードと示していますが、実際に高校までは何とか入学できて高校を中退する、あるいは高校から次の専門学校、大学に向かうというのは大変困難な状況があります。

鳥取県のデータでも、ひとり親家庭とか生活保護世帯の高校中退率は全国平均より高いデータがあるため高校生を対象にした、もう少し「学習」ということを意識した支援の場、拠点が必要なのではないかと考えます。

子ども食堂については、まさに食べることなので切実度が高い現状ですが、最近、学校の給食が一日唯一の食事という子が来るようになり、ニュースで都会の話聞いていたのですが鳥取でもやはり同じなのだと分かり、そんな子も来ますので大変切実度の高い取り組みで、子ども食堂のほうももっともつとふやしていく必要があるかなと考えております。

それから究極の目標に近いようなところもありますが、この学習支援や子ども食堂の場に来られる子はまだ（支援に繋がって）良いほうです。少し表現は悪いですが実際にさらにしんどい状況にあって情報が届いていない、来られない子どもやお母さんたちがいらっしゃるわけです。その課題をどうするかという点で、もう少しアウトリーチを行うような仕組みを皆で知恵を出し合い、例えば学習支援も訪問型の学習支援があっても良いと考えています。例えばセンターの職員とこども・らぼのスタッフ2人である家庭に訪問して、そこで学習支援をやるなどです。一見、家庭教師のようですが目的は全く違います。そうしたことを目指しても良いのではないかという議論もしています。

こうして色んな成果と課題はありますが、今、様々な福祉の分野や教育の分野でも叫ばれていますが、学習支援や子ども食堂を展開するなかで地域のネットワークが構築される、困っている誰かを支える、あるいは支えられるという一方通行の関係ではなくて、相互に色んな活動に関与して支え合う地域づくりの一つのスタイルとして学習支援や子ども食堂も繋がればと考えます。

○岡氏 最後に、3年間の活動を振り返ってですが、こうしたことがあれば良かった、もっとこうだったらということが色々あるとは思いますが、今振り返ると、全部揃っていたのではないかなと思います。

まず場所は、鳥取市内の人権福祉センターという場所が10カ所もあって、その地域に根差しており、地域の子もたちがいつでも来られるようなところがありました。それはたまたまかもしれませんが、非常に学習支援をするのに適した場所というものもともとあったということです。人、先ほど、変な先生とホワイトボードに書いてありましたが、僕たちはたまたま集まったと述べましたが、もともと一人一人が身内や近所の子も、この子どうしよう、このままいくとまずいという子どもを抱えていて、今のスタッフたちが個別に対応していました。しかし個別に支援してはいるけれどもこれではらが明かなくなり、どうしようかということで立ち上がったのが一番大きなところかと思えます。ですからあまり正攻法なやり方ではない変な人たちなのですが、自分たちが

もっているその子どもの状況をどうしようかという人たちで集まったわけです。大きな子ども集団ではなくて、目の前のこの子ということを大事にしているということです。

もう一つお金ですが、最初はなければいけないことをしようという気持ちでやっていました。今は少し大きくなってきたため、どうしてもお金がないと運営できない部分がありますが、当初はそういう意気込みでやってきました。そのように考えると、事前にモデルがなかった部分も、あったらあったで良かったのですけれども、なくて形にとらわれなかったところが良かったのかも知れないと、今思います。先ほども言いましたが、気になる子ども、理念やこんな風にみたいなものがあった訳ではなく、とりあえず、目の前の子に高校に行ってもらわないと困るなど、そうした状況がありました。あとしんどい子どもの居場所が必要なのではないかと、その子たちと話をしていくうちに、一つ食事を提供することが必要なのではないかとという風に、私たち自身のほうが変わっていったことが今の活動に繋がっています。

必然性の一つ一つをどうしていこうかとクリアしていきながら、今の形になっていったということです。少し場当たりの感じはしますがこれが僕たちの現状です。

○松本氏 先ほど岡からありましたが、これから将来こども・らぼはどのような活動をしていこうかという議論はしていますが、常に目の前にいる子を大事にしようという思いでやっています。それが将来的に色んな活動なり、色んなモデルになっていけばいいかと考えます。またこども・らぼとして鳥取市、行政と繋がっていることは大変大きなことです。自分たちではできないことが行政の力でさらに現実的に支援が入っていく、良いほうに進んでいく、やはり民間団体だけではどうしてもできないところをサポートしてもらっていますので、とても感謝をしています。

【分科会B：討論①】

○小林氏 非常に子ども食堂という、食堂といえば我々にとっても大変馴染みやすいし、食堂に通った人はないと思いますが、誰かどこかで食堂というのを利用した経験がありますし、当然、食というのは1日3食、それこそ生きている限りは食ということから離れてはいけない訳です。そうした地道な課題について、子どもと対話をしながら必要な支援を見つけていく地味な活動ではありますが、内容としては非常に先進的な、とても勢いのある活動と聞かせていただきました。

○会場発言 NHKが先般、子どもの貧困についてドキュメントを放映していましたが、ある高校生がテレビに出されて家庭の内部も入れられて、ネット上で大きな批判になったというケースがありました。いわゆる貧困の度合い、絶対的貧困と相対的貧困をしっかりと定義しておかないと、皆さん大きな間違いが出てくる。もう少しNHKが丁寧にやっていたらこういうことはなかったのかも知れません。実はそこをしっかりとやっておかないと、絶対的貧困しか貧困ではないと思っている日本人がおられるので、こども・らぼはどう考えておられるのかなと思っています。

○岡氏 先ほど言いましたが、貧困、見えにくい問題、現れにくい問題です。しかもどうやって現れるのかは、一つ一つの家庭によって全部違います。

今、実際に来ている子どもの中では、1日給食だけしか食べていない子がいます。これも子どもと話をする中で分かってきました。ただそれで良いと、自分からは余り言いません。それをこちらも聞いているから、もっと食べなさいと言うのですが、良い、おなかすかないからと言います。そういう自分の壁がもうできてしまっていて、なかなかそれを崩していくのは難しいです。でもそれは一つ一つ本当に聞き取らないと分からないです。

まず私たちが、貧困というのは人間にとってどんな風に現れてくるのかということ、子どもの

姿から学ばせてもらわなければいけないと思います。

個人的には、貧困は収入が少ない家庭が圧倒的に増えているというのが問題であり、どう支出するかは貧困問題とはまた僕は別の問題かと思えます。大事なこともかもしれませんが、それは貧困とは少し違う問題かと思えます。うまく言えませんが、ただ見えにくい問題であることを意識していないと一方的な見方、富めるというか、貧困ではないという立場の見方からの一方的な貧困の定義づけが、余計に苦しめてしまうのではないかと思っています。

○小林氏 実は先週、金沢で心理学の研究会があって、貧困と貧困意識、つまり、必ずしも貧困家庭が子どもたちの貧困をもたらすわけではない。つまり私が子どもの時には、みんな貧しかったけれどもでも頑張って、楽しいよねみたいな雰囲気です。多分そのあたりを厳密に定義するのではなくて、子どもの貧困層というか、子どもの生活の貧しさとか制限のことにに関して、子ども・らぼは子どもから学びながらそうして支援を考えていくと言っておられました。どうもありがとうございました。

〔第2報告〕

「課題から目をそむけない町づくり：地域で作り上げた地域防災・地域包括ケア」 原 和正氏（南部町東西町地域振興協議会会長）

○原氏 ご紹介をいただきました東西町振興協議会の原です。地域づくりそして地域包括ケアという地域のお話をさせていただきたいと思っております。まず冒頭に、私は「地域課題から目をそむけない」こういうことが非常に大事だと思っております。課題と対峙する。なぜこういうことができたのか、それには地域振興協議会があり、先ほども出ましたヒト・モノ・カネがあったからです。地域振興協議会という地域自主組織が全国にたくさんできておりますが、南部町の場合は10年前にできまして、これがうまく機能したということです。東西町地域は米子からバスで15分くらいのところにあり、人口は1,200人程度で南部町の大体1割ぐらい、高齢化率は33.7%です。我々の町には高齢者の見守り活動という地域課題がありました。その活動を原点にして防災、防犯活動、子育て支援として「放課後児童クラブ」の開級、地域包括ケアの一つの手段といわれている「地域コミュニティホーム」を開設しています。これらを含めて防災という観点からは消防庁長官表彰を受けることができたというのがまちづくりの成果です。



「地域振興協議会」とは何かということですが、南部町は7つの振興地域に分けられております。その役割というのは、住民自身で安全なまちづくりをなささい、地域課題を解決しなさい、町民の意見を集約・調整をしなさい、あとは地域づくりを自分たちでやりなさいということです。今、全国で小規模多機能自主組織と言われているのですが、ここに法的な根拠を与えようということがなされています。我々は条例に基づいた任意組織ですが、これに法的な意味を持たせようというのが、今内閣府で取り組んでおられることです。では、なぜこういう組織が必要か。要は、地方交付税の減額、合併後人員削減しないといけないという、国と地方の関係の変化と言われている。南部町は合併当初180人の行政職員でしたが、我々の様な組織を運営することで、現在120人つまり60人ぐらい人員を削減しても行政が運営できているということです。今、少子高齢化や新たな課題が出てまいりましたが、大事なことは、身近な地域課題を住民が力を合わせて解決するという事です。住民自らが地域づくりのマニフェストを作ること、こういうことが大事なのです。

従来は、今でも多くの自治体、鳥取でもそうでしょうが、「区長会」というのをやっています。ここでは、区長が1年毎といった短期間で代わるとかで、課題があっても先送りになってしまう。それに対して社会教育的な「地区公民館」では、運動会とか文化祭、あるいは貸し館業務等をやっています。ただし、地域の課題には未対応です。最近、米子市でも公民館が例えば高齢者のサロンを始めていますが、当時は社会教育の場でしたから、“高齢者の一人暮らしが多くなった”と言っても、“それは公民館のやることではないよ”という話でした。「区長会」にしても「地区公民館」にしてもこのような現状ですから、これらをひっくるめて全部やろうということなのです。ご近所福祉というのは専ら、社会福祉協議会にお任せしていたというのが現状ではなかったかと思います。

「地域振興協議会」とはこういう組織で、町からも支援を受けます。実はお金の面から言いますと、新しいこのような組織のための町の支出増は、わずか1,000万円ぐらいなのです。会長、副会長の給与だけが新たな財政措置として必要で、職員2人分の給与でこういう組織ができ、3億の金が浮いたということです。地元で言うとはひんしゅくを買うことですが、効果はそれだけではないのですが、それは後でお話いたします。

では、「地域振興協議会」の発足がうまくできたのはなぜか。一つは、やっぱり町役場の職員が頑張ったのです。実は、会議、会議の連続で大変でした。我々も仕事が終わった後、月2回の会議がありました。そして、やっぱり反対もあるのですよね。そういう団体からのチラシで会議が紛糾してしまう。しかし、多くの方がこの時期を逃さないようにしよう、要するに、今のままでは地域が運営できないという共通認識があったのです。

もう一つは、コミュニティがあったから。我々のところは自治会組織が、団地ができてすぐに組織され、継続してしっかり活動していました。そしてもう一つ、公民館には若い女性主事が配置されて活動が活発に行われていたこと。そして、地域の課題が認識されていたのです。“高齢独居者が増えたよね”とか、“子どもが減少してきている、何かしないと地域はだめになるぞ”という、そういう意識があったからできたと思います。

では、活動がうまくいかないのはなぜか。こういう話を地元ですると怒られますが、「会長のリーダーシップ不足」があります。これはどこでもそう、トップが悪い、名誉職の人がおるのではないかと。また、「集落エゴのぶつかり合い」があります。南部町というのはご存じでしょうか、大國主命が八神姫のことで実は八十神に殺されたのですが復活した、それが赤猪岩神社です。そういう古い歴史があるところです。有力者が俺の目の黒いうちは勝手なことをさせないという、よくありますけれどもね。そして「地域としての目標が不明確」なことです。課題が把握されていない。意見が届かない。集落の自主性を尊重する、自主性に任せましようといい、ほったらかしにしている。そして「イベントをやり過ぎる」のです。イベントありきで目的を忘れている。何のためにこのイベントするのか、我々は絶えずその意識を持っています。そして、最近ではPDCAサイクルというのを行政が使いますよね。私はその前に「Look」を加えたLPDCAサイクル、要するに現場をしっかりと見ないとだめだ、そしてPlanしてDoしてCheckしてActionで回しなさい。こういうことをしないとうまくいかないというのが私の観点です。

次に、「地域コミュニティホーム」に至った経緯についてお話します。まず我々が大事にしたのは見守り活動です。見守り活動をしましょうという、今はすぐに機械に頼る。我々がそれをやめたのは、家の中で、高齢独居者の方が洋式トイレにはまって動けなくなったという事例があったのです。実は、その方は町の非常通報装置の貸与者で、“何かあったらこのボタン押しなさいよ”といわれていたのですが、トイレに行くとき邪魔だから置いておいた。そうなるともう役に立たない。人

と人でやらなければいけないというのが、一つのターニングポイントになりました。

もう一つは、やっぱり「支え愛マップづくり」です。どういう人たちが町内で行き来しているか。今、町行政が災害時の援護者リストを作りなさいと言います。そうすると、すぐ隣、あなたは近所だから見守りなさい、区長だからやりなさい、そういうことはやってはいけないよという。しかし、我々は必ず“あなたは見守りが必要です。誰にお願いしたいですか？”というネットワーク、つまり“私はあの人にお願ひしよう”というそういうことが大事だということ、木原先生から教えていただきました。

あとは、やっぱり災害ですよ。東日本大震災です。今回の鳥取中部地震、非常に心が痛みますけれども、東日本大震災が5年半前にありました。3月11日午後2時46分。実は我々も鳥取西部地震を16年前に経験しておりまして、自主防災組織があったのです。ところが、そういう役員に区長とか、何とか部長を当ててしまうのです。そういう方は昼間地区

にいないのではないかとということで、我々は昼間にいる人で作ろうというのが、「災害時安否確認協力委員制度」です。要するに、定年退職者か家にいる人でやりなさいということです。救助隊ではないから、安否の確認と避難の補助でいい。当然、訓練を行って確認をしないとイケない。組織を作って、図上訓練とかよくやられますが、実際に動いてみないとわかりません。動いてみた感じで、例えば安否確認協力員はこういうユニホーム、ヘルメットでわかるようにしておくというのが分かるのです。実は、あの年は大変でした。防災訓練をやった後、2日後に台風が来て全町避難勧告です。ところが、我々は2日前に訓練していましたから、地区の崖崩れを発見してすぐその地区は避難しました。町長が全町に避難勧告を出したが“おまえのところが崖は大丈夫か？”と言った時には、“いや、もう1時間前に避難していますよ”といった具合です。そういうことが県知事表彰や消防庁長官表彰になったわけです。

最近必要なのは、認知症に対する取り組みです。災害の時もそうですが、対応は「見える化」が大事です。必ず1ページぐらいに抑えて、すぐ何をしなさいということが見えるような「対応表」にしています。分厚いマニュアルは町にあります。こういうのはいざというときは直ぐには役に立たない。特に災害のときは慌てますからなかなか大変です。SOSネットワーク訓練もやりました。実は、今年の8月に認知症の方の行方不明の事件がありました。これも「認知症SOS対応表」をもとに行動し、2時間後に警察を呼んできて、結局発見されました。やっぱり見えるようにしておくことが必要ではないかと思っております。

あと、地域包括ケアです。竹川先生にも色々指導いただいています。我々はこれにも精力的に取り組んでいます。鳥取県は、年金受給額も収入も低い。収入は36番目ですか。いわゆる貧乏県と言ったら失礼なのですが、9割の人はずっと住み続けたいと希望しています。それは慣れ親しんだ土地だからとか、やっぱり住まいが気に入っていると、自然環境がいいとか、そういうことです。

地域コミュニティホームの概要(1)

- ① 日中の安心スペースを提供します…サポート員が常駐します。
サービスのない日や、ご家族が勤務などで独居一人となり不安になる時など、必要に応じて安心して過ごしていただけます。個室が4室ありますので、仲良しグループなどのご利用も可能です。基や得様の遺品もあります。
- 登録料:3,000円/年
 利用料:300円/日(お茶菓子代を含む)
 開所日:月、水、金(祭日、5月連休、お盆、年末年始は閉所です)
 時 間:10:00~16:00
 送 迎:(利用日の前日17時までには協議会まで申し込み下さい。)
 送 費:送迎の際サポート員を付けて作る事ができます
(材料費の実費として1回300円が必要です)
- ② 短期間の宿泊…サポート員が宿直します。
夜間一人で過ごすときに不安を感じる時などに利用していただけます。
 利用料:1泊2,000円
 時 間:18:00~翌9:00
 送 迎:有
 食 費:食費は自己負担
- ③ 長期間の住まい…サポート員が常駐します。
安価な家賃で安心して生活していただけます。詳細は別途ご相談ください。

地域コミュニティホームの概要(2)

○ボランティアスタッフ

- ・CH事業統括 ……1名(協議会福祉部長)
- ・施設長 ……1名(介護福祉士、民生委員)
- ・サポート員 ……13名(介護福祉士1名)、初任者研修資格者(5名)
ケアマネジャー資格者(2名)、管理栄養士(1名)
 看護師(2名)、歯科衛生士(1名)
- ※80歳の方がサポート員としてお世話にあっている
- ・巡回ボランティア ……14名
※病氣と戦っている方も役に立ちたいと参加

○行政との関り合い

- ・南部町健康福祉課職員や南部真蚊屋広域連合 地域包括支援センター職員が利用希望者情報の提供そして施設運営委員として関与
- ・開設前に 県の支え愛体づくりの補助金を受け 初任者研修資格を6名が受かった

しかし、病気や要介護状態の不安、災害に対する不安、認知症に対する不安、孤独死に対する大きな不安も持っています。やっぱり住まいの問題だということですね。これも鳥取県長寿社会課の資料ですが、要介護状態になったときの独居高齢者にとって、どこに住むかは非常に大きな問題で、大きく分けて3点あります。「離れて住む家族との同居」。これは家族に迷惑をかける。実際、90歳になったおばあちゃんが我孫子の娘のところへ全部処分して行かれましたが、1年後に帰って来たのです。やっぱり慣れないところはだめだとのことでした。あと「特別養護老人ホーム、認知症グループホーム」。今、特別養護老人ホームでも要介護3にならないとなかなか入れない。もちろんお金がすごくかかりますよね。「有料老人ホーム」。これは当然大変なのはお金です。10万以上ほとんど20万かかるのではないかと思います。それができるかということで、鳥取県が進めた「コミュニティホームのモデル事業」というのは、自宅で暮らしにくくなった高齢者をこれまでと同じ生活環境の中で暮らしていけるようにと言うもので、全国初の仕組みだと言われております。

鳥取県は、鳥取県東部、中部、西部の3カ所にコミュニティホームの予算をつくりました。もう4年前になりますが、できたのは我々の地域振興協議会だけです。事業概要には、民家を改修しなさいという条件があります。これは半年間大変でした。その他に、地域住民が必要に応じて見回り、食事のサービスなどしなさい、そして、医療、介護というのは訪問診療、訪問介護でやりなさいということもあります。あと安くしなさいということも。我々は、1日300円の利用料をいただいております。利用者にはこのホームで食事も作っていただいております。ある方は、要介護や認知症が入っていますが、要介護2の方も食事のときになると元気になって作られます。こういう手立ても必要ではないかと考えています。

日中の居場所や短期間の宿泊、長期の住まいといったことが鳥取県の要件ですが、現在は昼間の居場所だけになっています。それはどうしてかということ、地域で運営していますと、地域の方は全部持ち家ですから、2,000円払って泊まることはないということで、昼間ここに来て、夜は近所の方がサポートする。こういうことでやっております。

立派なのは、ボランティアスタッフです。サポート員は13名です。介護士、初任者研修、ケアマネ、管理栄養士、看護師、栄養士。これは全て地域におられる方です。地域には必ずこういう方がいらっしゃる。中にはどちらかというともう利用者に近い80歳の方もおられますが、元気なうちはサポート員としてお世話をしたいと言っておられます。また、送迎が要るということもあって、14名の男性が請け負っています。中には、病気で闘っているけれども、何かモチベーションを上げなければいけないと思って役に立ちたいと送迎を受け持っている方もいらっしゃいます。

行政との関わりはこのようですが、コミュニティホーム開設前に県の支え愛体制づくりの補助金を受けて初任者研修資格の取得に手を挙げてくれた方がおられました。やっぱりこういう制度が必要であったということです。今、利用者は大体8人ぐらいでしょうか。

地域コミュニティホーム事業の効果と課題について、お話をしたいと思います。先に効果についてです。利用者のバイタルチェックという医療行為ではありませんが、来られたら血圧・体温を測ります。体温が高いなという人は、施設長が病院に連れていったりします。例えば、家におれば、まずこういうことは倒れるまでないですね。それと、利用者の数値判断や認識力、会話力が上がってきました。家におりますと、テレビだけ見ている。始めたときはトランプをしても、ご存じのようにトランプにはハートとかスペードなど文字でない記号がありますね、どの順番かわからないけれども、それを思い出して少し回復してきているということです。

メリットについては、安心して働きに出られるという家族の感謝の声です。あとは、わずかです

が、サポート員も一週間に一回出ますと、年間わずかですが4万円ぐらいもらえ、ちょっと旅行でも行くかとなります。そして利用者に感謝されることで喜び、定期的に出かけることで生活にリズムが出てきたというのがあります。サポート員はまかり間違えると家にずっとおるだけですが、こういう仕組みができたことでハリができたということです。

課題は、どこでも出てまいります、運営資金と次の世代のボランティア確保です。県の補助金は2年でなくなりましたので、1年間の運営資金は135万ぐらいで、内83万円は町から補助をいただいております。

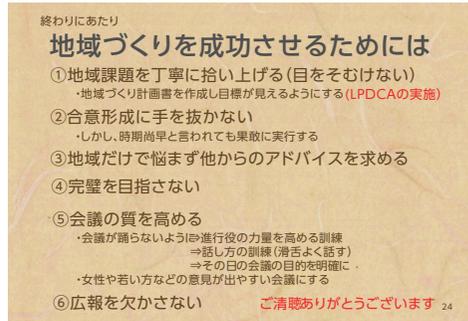
最後に、地域づくりについてお話ししたいと思います。成功させるにはどうしたらいいか。これは私の勝手な理解ですが、地域課題を丁寧に拾い上げる、目を背けない。地域づくり計画書を作成し、目標が見えるようにする。そして見えるようにしておくことが大事です。実際、中学生とか小学生に意見を聞きますとゲームセンターが欲しいとかそういうことだけだったのですが、中には楽市楽座なんて言うこともありました。地域には店が無くなっていました。そういうことで野菜市とか始めました。目標を作っていると、10年経ちますと、結構、意外とできるものなのですよ。そして合意形成に手を抜かない。時期尚早と言われても果敢に実行する。地域だけで悩まず、他のアドバイスを求めるということです。完璧を目指さない。我々が大事にしているのは、会議の質を高めるということです。会議が踊らないように、司会役、進行役の力量を高める訓練、話し方の訓練、その日の会議の目的を明確にする。これは何の会議でも大事です。会社でもそうだと思います。そして、女性や若い方の意見が出やすい会議にする。我々は、これを絶えず気をつけております。そして、広報を欠かさないということです。ご清聴ありがとうございます。

【分科会B：討論②】

○小林氏 どうもありがとうございます。それでは、簡単な質問等、あるいはご感想でも結構ですが、どなたかおありでしたらどうぞ。

○会場発言 2点ほど伺いたいのですが、協議会が発足できた理由が4点あげられています。そもそも地区の課題認識が十分できていたということですが、これはなぜか。協議会発足前にこういう話し合いの場があったとか、住民の中でそういう仕組みができていたのかというのが気になりました。このあたりを教えていただきたいのと、もう1点は、見守り活動の経緯というところで、便器にはまってしまった高齢者の方を見つけたということがございましたが、そこからの改善が非常に早いという印象を持ちました。翌年の2月には支え合いのマップづくりに着手されたという、この回転というのでしょうか、PDCAサイクルの話もあつたのですが、それがなかなかできないという声も聞きます。こういう風に非常にスムーズにサイクルを回せた理由は何があつたのでしょうか。

○原氏 1点目の地域課題が認識されていたのかかわらず、なぜできなかったかというのは、やっぱり組織と人がいなかったのです。例えば、自治会はわかっているけれども、そんなもの1年やすぐにはできないと先送り。公民館は熱心に活動していました。でも、公民館は社会教育活動ということでそういうことはなかなか取り上げられない。我々はちょっと違うよな、でも困っているなということで、こういう組織ができました。組織ができますと、事務所には、当初は役場の職員も



いましたけれども、今も事務局員が2人おられます。このお金の出どころは総務省からですが、活動資金を合わせて給料を含みまして750万ぐらい我々に出るわけです。そして事務所という場所があるわけですね。要するに、昔でいうと、自治会なんていうと自治会長の家が事務所でなかなかうまくできなかった。認識はしていたけれどもできなかった。しかし、この組織だったら何とかできるのではないかということで、色々反対もありましたが、それを乗り切れたということです。

もう一つは、トイレにはまっていたということがあって、すぐこういうものができたというのは、やっぱり意識が高かったのですよね。社会福祉協議会からの指導もありましたが、やっぱりその意識を強く持っていたから、できるだけ早くやろうということだと思います。

○小林氏 ありがとうございます。ほかには。

○会場発言 自治組織反対の団体からのチラシで紛糾したとのことでしたが、どういった趣旨の反対になっているのかということをお聞きしたいと思います。

○原氏 これは会議への反対ではなく、こういう組織をつくるのに反対ということです。実は、その団体といいますか、その政党は今でもやはり反対で、公民館に戻してこういう組織でやりなさいと10年経っても言っています。例えば、こういう組織はだめですとか、事務所を設けるとか、会長にこれだけ給料を出すのがそんなものは税金の無駄遣いではないかとか、そういうことでした。それで色々紛糾もしました。こんなチラシが出ているけれどもこんなものは無視せよとか、いや、それは公的な政党が出したチラシだからとか、まあ、色々やりとりはあったということです。

○小林氏 多少地元から離れてお話をさせていただいたのではないかと思います、どうもありがとうございました。

【第3報告】

「地域側で地域と大学をつなぐ」

成清仁士氏（鳥取市中心市街地活性化協議会 タウンマネージャー）

○成清氏 鳥取市中心市街地活性化協議会でタウンマネージャーをしております成清と申します。私は、地域側で地域と大学をつなぐというテーマでお話をさせていただきたいと思います。

私は鳥取でなく岡山県の生まれです。広島大学で建築史・意匠学、建築の歴史を学び、その後、安田女子大学で助手をしました。同時に、2010年からこれから説明するNPO法人倉敷町家トラストとの共同活動を始め、その後、理事に迎えられました。大学の教員として地域にかかわっているとやりにくさを非常に感じておりました。自分自身もなかなかかわりにくいし、学生を送り出すのもなかなか難しい。そういった事例として出会ったのが柏の葉アーバンデザインセンターという組織です。そこで調査研究スタッフをした後、短期間ですがオランダのロッテルダムにあるエラスムス

大学で都市遺産研修に参加し、その翌年に鳥取に来ました。

どんな勉強をした者が今こんなことをしているのかということも知っていただきたいと思い、スライドを用意しています(スライド省略)。私は、「近世ネーデルラントの都市デザイン手法に関する研究」という題目で博士論文の研究をしていました。オランダの都市デザイン手法に関する研究です。倉敷での取り組みは、ここで勉強してきた内容を目に見える地域の課題に活かすという取り組みだったので、頭の隅にとどめておいていただければと思います。

大学院の博士課程時代に結婚をしまして、3年間、倉敷と広島を行



き来しながら研究を進めていました。平日は広島大学でオランダの研究をし、金曜の夜に帰ってきて土日に家で暮らす。お金もなかったものですから、妻の祖母の実家で、祖母と一緒にいた3年間でした。

「くらしきマッププロジェクト」というのを始めたのですが、私が見つけた課題というのは、倉敷の美観地区という観光地の外れにある古い建物がどんどん壊されていくのが非常につらくて、それを知ってもらうにはどうすればいいかと思って始めた取り組みです。2010年から始めたのですが、福武教育文化振興財団の文化活動助成を3年間継続採択していただいて進めました。そこから3年目にトヨタ財団の地域社会プログラムに運よく通って2年間活動を展開しました。大学でやっていたような古い地図を集めて街の変遷を復元図でつくっていく、街の歴史的な特性を地図でデジタル化するというのをやっておりました。私は倉敷の出身ではないので、倉敷の出身の妻の祖母に聞きたいことが色々ありました。認知症も始まりかけていたのでなかなか思うように聞けなくて、古い地図を持ってきては「この辺どうだったのですか?」とか、古い写真を持ってきては「この頃を覚えていますか?」とか、そういうことをやっておりました。後から思えば、地域の課題と自分が持っている能力と合わせて街に展開していったのだと思います。こういった地図をイラストレーターの方とコラボレーションしてわかりやすく絵やイラストマップにして、それをアプリにして手元に持って街歩きをしたり、展覧会をしたりしました。

自分が倉敷で大分勉強させてもらいましたので、学生にも地域に出てもらいたいと思いました。当時はゼミを持っていなくて、「地域のアイデアコンテストに参加する人はいませんか?」という声をかけて集まった学生と安佐南区、ちょうど2、3年前に崖崩れがあった近くでしたが、そういったところの課題に取り組んでいました。それから、直島ホール設計に際して大学の専門家として、本村地区の歴史的調査を担当するようなこともしました。

この辺までが大学の教員としての取り組みです。そこから大学と地域の連携、公と民と学がうまく連携するにはということで、大学の職を辞してUDCKという組織に加わって岡山県高梁市の調査をしました。高梁市は私の地元でもあるのでやらせていただいた調査です。それが済んだ後に、オランダの歴史遺産庁というところから声がかかりました。オランダの植民都市があるような国の人たち、インドネシアとかインドとか、それぞれの地域課題の解決、特に歴史遺産の利活用の分野での活動をしている人に集まってもらって一緒に考えようというプログラムでしたので、倉敷での取り組みを持って行って、文化庁に行って発表しました。

最後に倉敷でやった仕事が、それまで蓄積をしていた古い地図とか写真を持った街歩きです。また、そういったノウハウの展示会を商店街の空きスペースで展開しました。この写真(省略)は、商店街のレストランのシェフがこのおじさんに「僕、これに映っている」みたいなことをしゃべっているのですが、そういった交流の場をつくったり。なかなか子どもが来るようなエリアではないのですが、子どもが来るようなプログラムを図書館の司書さんをお願いをして、読み聞かせ講座とかしてもらい、しかも、商店街をイメージさせるような選書のもとでやってもらったりしました。こういったことは、鳥取に来てからかなり生きているのかなと思っています。

ここからメインの今の仕事です。鳥取市中心市街地活性化の推進が私の仕事です。駅から県庁までのあたりが中心市街地エリアと位置づけられていて、そこが仕事の範囲ということになります。まちなかの活性化が私の仕事ですけれども、私は岡山県から来たので鳥取市のことを知らない。隣の県から来てなかなか鳥取のまちというと知られてなくて、まちのイメージがなかなかないのです。歩いてみると、おもしろい歴史的なものだったり商店街だったりがあります。まちのイメージ

づくりの中でそういったところを知ってもらうことが大事なのかな、地域の資産として活かすことが大事なのかなと思ってまち歩きを始めました。この漫画は、図書館のレファレンス機能を活用して、中心市街地の活性化の取り組みをやっているということで賞をいただいて、それに合わせて作っていただいたものです。非常にわかりやすいのでありがたく使わせていただいています。

取り組んだことは、「まちのたんけん」というまち歩きのイベントです。古い写真や古い地図を使って街を歩く。最初にテーマとしたのが「まちの変遷とリノベーションまちづくり」です。先日、第3回のリノベーションスクールがあったのですが、そういった新しい動きというのもまちの魅力だろうと思います。ただし、それは一部の人の動き、あるいは一部の店舗に限られる部分も確かにあります。それをまちに波及するようなこと、私と同世代の人たちががんばっている取り組みを支援するような活動ができないかということで始めたテーマで、リノベーションでできたお店をつなぐようなまち歩きにしました。特に、鳥取市中心市街地の変遷を知ることが大事にして。鳥取に来てから図書館で勉強して初めて知ったことですが、鳥取大火があってそこから大きくまちが変わって今に至る。まずはこの時代に焦点を当てようと思いました。そういった古い写真と今の様子を見比べて歩く。それから、そういった写真を見せると、地元の人には当然知っているの、いっぱい教えてくれます。それは倉敷の頃からやっていることですが、そういったことから、若い人を商店街の方々につなげていくようなことができないかなと思って始めたことです。

この「たんけん」というのは、毎回テーマを設定しまして、特定の視点からまちの個性を浮き彫りにしたいと思っています。まちなかの魅力を再発見することと世代を超えた交流をするという2つ軸があります。地域資源を地図で情報整理、発信、活用することを通して、地域の人材の発掘とか連携促進を図っています。鳥取でのこの取り組みは、最終的に小学校の社会科学習プログラムにしていくことで子どもがまちを歩く機会をつくっていけないかと思っています。そうすることで、私も小学校の娘がいますけれども、「学校でこういうところに行ったよ」とおうちで話してもらって、それまで興味を持つことがなかったお店のことを知ることになり、「娘が言うから行ってみようか」ということで行ってみたら案外おもしろかった、そういうことも出てくるのかなと思っています。

私はほとんど縁がない状態で鳥取に来ましたから、まず、色々な方々と仲よくなっていくことが非常に大事だと思っています。でない、そういった方と協力をさせていただいた上さらに難しい課題への取り組みはできないと思いますので、毎回テーマを変えたとともに、お声かけしてもらって「連携先」も変えさせてもらいながらやっています。商店街の方とか、第3回で初めて鳥取大学地域学部というのでも出てきます。博物館とか文化財団さんです。今年度については、昨年度のつながりを活かして、テーマを継承しながら、「地図と写真でたどる鳥取城下町」とか「高校生と歩く商店街」ということで発展させています。

最近の話ですが、これも、「こちずぶらり」という古地図アプリを徳島大学の塚本先生が開発された



のですけれども、9月は「地図と写真でたどる鳥取城下町」ということで地域学部の岸本先生と博物館、塚本先生とで連携をしてやりました。鳥取は城下町ですが、あんまり建物が残っていないので、そのあたりのまち歩きルートは開発する必要があるなと思っています。特に、若桜街道、智頭街道、鹿野街道の三街道ですね。それから寺町あたりということで歩きました。このときは、2日間のプログラムにしました。まず、徳島大学の塚本先生にレクチャーをしていただきました。それから岸本先生に地域調査実習の中での成果を中間報告していただいたり、今の研究の取り組みを紹介してもらったり。それから、まちの探検の趣旨説明ということで私が続けました。まずは学生と一緒にまちを歩き、グループワークをして、翌日の一般公開のイベントの準備をしました。当日は、学生が案内役を担当して、「歴史3択クイズ」というちょっと緩めの企画も織りませながら、県立博物館でアプリの機能を使った気づいたことの発表まで持っていきました。

そして最近取り組んだことが、高校生と歩くということです。城北高の地歴部の生徒さんが、調べ学習として地図をつくっておられます。これを活かして歩く。それから、歴史的な道とか地域資産を再確認すること、ルートプログラム化とか、そういったことをねらってやっています。でも、何より大事なことはまち歩きを楽しむということだと思っていて、そうしたことに若い生徒さんに気づいていただきたい、さらにそれを友達に紹介してもらえたらいいなと思っています。

こんな感じで歩きました(写真略)。気づいたことをメモしたり、小学校とかの授業というのを意識して、高校の先生とか地域学部の高橋先生ともお話をしながら組み立てをしています。自然な形で大学生と高校生が交流をしたり、大学の教員が高校生に指導するような形になったり、いい交流の機会になったのではないかと考えています。アンケートをとりましたが、結構前向きなコメントもいただきました。「おもしろかった」「おばあちゃんにいいお土産になった」というお話もありました。ただ、よく見てみると、「暗い印象で、人が少ない」とか、当日少し時間が延びてしまったのですが「時間にルーズな点はどうかと思う」とか、非常に辛辣なコメントもいただきました。ただ、こういった声を拾えたというのは大事だと思っていて、今ここにも来てくれている高橋ゼミの山崎君が卒論研究で整理してくれるようなので、非常に楽しみにしています。

まとめていきます。課題としましては、まち歩きのプログラム化というのが中心市街地の活性化の取り組みとして大事だと思っています。さらには、もっと楽しく歩けるような環境整備、先日、市長が発表されましたけれども、S Qのあるまち鳥取市、すごいクオリティー、スーパークオリティーを目指していくということなので、そういったことは大事だと思っています。それから、学校のプログラムに展開することを目指したいと思います。地域資源の価値を明らかにする研究、私自身はそのあたりを専門にして大学にいたのですが、今はそういう立場ではなくて、まちづくりの仕事を現場でやっていますので、こういった地域資源の価値を明らかにするということは学術研究でぜひやっていただきたいところです。城下町の古い資料からその魅力を見える化するようなことを岸本先生がしてくださっていますけれど、それをまちづくりに活かすというのが我々のやることなのかなと思っています。

それから、大学の先生との接点とマッチングです。運と縁でつながってこういった取り組みができてきていると思うのですけれども、まだまだ大学には先生方がおられると思いますので、そういった方のお力を借りるような機会を、それから地域課題と一緒に取り組んでいけるような機会をつくるのが課題なのかなと思っています。そのほか、大学側の様々な支援プログラムですとか、大学連携の機会を活かさせてもらってやっております。

大学連携の取り組みを進める上であってよかったことですが、民間側の受け皿組織、今は我々が

そういったところになれたらいいなと思っています。倉敷のことをやっていたときは地元NPOが非常に支援をしてくれましたし、先に話されたお二方についても受け皿組織になっているのではないかなと思います。それから今日のようなシンポジウムも、先生方あるいは他の地域がどんなことで悩んでおられるのかというのを共有できる場として大事だと思います。我々地域の間が先生方に出会える機会がいろんなことであります。学外講座を聞きに行ったり、大学のサテライトにお弁当を食べに行ったときにちょっと聞くとか、ゼミに招かれてお話しする機会をいただいたり、そういった機会が連携企画のきっかけになっています。

最後に、あってほしいことですが、地域と大学の連携と一緒にやる組織が同じ場所において、同じ目標に向かえる組織がまちの中にあつたらいいのではないかなと思っています。その例として柏の葉アーバンデザインセンターがあるのでありますが、そういったものがあつたらいいなと思います。それから、まちなかで大学の先生について聞くことができる人、場所、機会、そういった拠点があれば。難しいことではなくて、どんな方なのかなということがわかれば、一緒にこんなことができるのではないかという発想ができるきっかけになると思います。それから、私自身が倉敷に住みながら課題を見つけたのですが、地域の現場に学生が居住することを支援する制度があれば。湖山にいる学生がちょっとまちなかに住んでほしいなと思っています。すみません。延びましたけれども以上です。ありがとうございました。

【分科会B：討論③】

○小林氏 ありがとうございます。皆さん方からご質問等ございましたら。岸本先生、一緒に参加された感想を一言、簡単に結構です。

○会場発言 鳥取大学の岸本です。本日はありがとうございました。お話を聞いていて改めて思ったのですが、地域学部として外へ出ていくというときに実際どうやって外へ出ていっていいか、正直わからないというところがありました。博物館とか、業界仲間というか、色々できることはあるのですが、そこからどう展開していくのかというのはやっぱり非常に難しかったと思います。そういう意味で、こちらの事情も酌んでくれてつないでいただけたいというのは非常にありがたかったと思っています。やはりそういう方が地域の側にいるというのが心強いと思いましたので、ぜひ続けていただきたいと思っています。

○小林氏 コーディネーターさんの役はとっても大切だということですね。高橋先生も、同じように何かありましたら。そんなに時間にルーズだったのですか？

○高橋氏 いや、一緒に歩いていて、高校生より僕の興味の方が勝ってしまって、気づいたら子どもそっちのけで僕が聞いているみたいな。多分、あの責任は僕にあると思います。本当に僕自身は鳥取中心市街地と今まであまりコンタクトはなかったものですから。今さらもう鳥取市内でやることはないだろうと思っていたのです。ところが、ふとしたことから成清さんと知り合いになって、おもしろい人だなと思って。たまたまうちの学生が倉敷出身だったので、倉敷つながりというものもあって倉敷へまず見に行った。倉敷を見て帰ってきたときに改めて鳥取を見たら、何かちょっと違って見えてきたなど。やっぱり一回外で目を養ったおかげで、鳥取の違った側面が見えてくるような可能性が見えてきて、そこから、もっとかかわってみようという感じで、今、学生と一緒に、見直してみようということと一緒にやらせてもらっているところです。

○小林氏 我々、例えば駅まで行くといったら単に闊歩して歩くだけですが、その時間の中にこの今の場所があるという実感をしながらかくというのは、まさに平田オリザさんが言われているよう

に、経済効率だけで失われてしまった世界を取り戻すかのような試みだったと思います。どうもありがとうございました。

総括セッション

コーディネーター：小泉元宏（立教大学社会学部准教授）

○福田氏 この総括セッションは、分科会でのディスカッションを踏まえて行っていきたいと思っておりますが、分科会はA、Bの二つに分かれて行っておりました。今、前のほうに登壇しておりますのが分科会でコーディネーターを務めた者です。A分科会の家中教授と東根ちよ講師です。B分科会小林教授です。それでは、皆様と共有するために分科会の中身について少しまとめてお話ししていただけたらと思っております。それではまず、A分科会からお願いいたします。

○東根氏 A分科会の方は、智頭をベースに活動されている3名の方にお越しいただいています。まず、紹介を先にさせていただきたいと思っております。「タルマーリー」を運営されている渡邊麻里子さんです。「皐月屋」の代表をされている大谷訓大さんです。そして、智頭農林高校で教頭先生をされておられます岸本智志先生です。それぞれの方の紹介を簡単にさせていただきまして、フリートークの話題についてご紹介させていただきます。

まず、タルマーリーの渡邊麻里子さんに関しては、女性の視点からの話を中心に今日はさせていただいたのですが、生活であったり、仕事であったり、教育も子育ても、全てがつながる生活というのは田舎でこそ実現ができるのではないかとという大きな問題提起をしていただきました。自然体験であったりものづくりに関しても、地域の資源を利用したものづくりを行っているという紹介をしていただきました。

次に、大谷さんに関しては、林業を智頭で営まれていまして、林業といっても、国の大きな政策としては大規模林業がかなり中心になっているけれども、大谷さんがされている林業はそれとは大きく違う、生物多様性のある山を持続的に運営されたいという、「山林をデザインする」というふうにおっしゃいましたが、もう少し小さな規模で自伐型林業の形で林業を営まれているという、その林業のかなり詳しい内容も報告いただきました。ちなみに、タルマーリーさんで出されているビールのホップもつくられているということで、智頭の中でもものづくりとして連携しながら運営がされているというイメージになっています。

最後に、岸本先生に関しては、板井原集落という少し特殊な集落に智頭農林高校の生徒さんが地域づくりで関わられているというご報告をいただきました。板井原集落というのは住民の方は2名、その地域に通われている方が10名おられ、それによって成り立っている少し特殊な集落です。その集落の中に歴史的な文化がたくさんこだわりを持って蓄積されており、それをこれから引き継いでいく必要があるので、生徒さんが入られて活動されているという実践のご報告をいただきました。

そして、3人の方から報告をいただいた後、討論の中身はすぐ多岐にわたっていたのですが、かいつまんで紹介させていただきますと、一つに、田舎ならではの文化があるのではないかとこのを、麻里子さんも大谷さんも岸本先生もそれぞれおっしゃられていました。

二つ目に、最近、ものづくりに少し変化があるのではないかとという話題も大きな内容として出ていました。大量生産ではなくて、本物志向のものづくりが最近行われている。それは、大谷さんも麻里子さんも行われているということをおっしゃっていただきました。岸本先生のほうからも、学習観というところでも、本物の知識でないと色々なところで使えないという、そういう学習観があ

るので、そことも一致するのではないかという話題が出ています。あと、本当にたくさんご意見をいただいたのですが、学生さんの方から、智頭をフィールドにそれぞれカフェ運営と林業、教育と分野はそれぞれ違うのですが、すごく3人の方のつながっている様子がうかがえるということでした。普通の地域では業種が違えば余りつながる機会がなかったりするので、そういう意味で、智頭というところでは、分野が違ってもつながっているというのはすごく魅力的だと感じたというコメントもいただいています。

そして、ディスカッションの中では、最後まで話し切れなかったのですが、これからの教育のあり方って一体どういうものだろうかという質問が投げかけられて、それについては最後まで議論ができずに終わった、そういうふうなA分科会の状況です。

○家中氏 今、東根さんが全体をまとめてくださったので、僕は少しだけ述べたいと思いますが、渡邊麻里子さんがおっしゃったのは、都市で働く女性たちはどうも生活が分断されてしまっている。子育てとか仕事とか色々なことが。ところが田舎というのは、全てがつながる世界ではないかと。そこにとても可能性というか、自分がここで暮らしたいという思いを持っていらっしゃるようでした。それから、平田さんの今日の午前中のお話をそれぞれの方が自分に引きつけて答えてくださったのですが、パンやビールも芸術作品ではないか、全く同感だと。大谷さんも全くそういうところで、やっぱり自分の山や森を、そういう言葉を使ったかどうかははっきりしませんが、デザインする、単に生産性を追うだけの林業ではなくて、山の景色を楽しむ林業、素敵ですよ。そんなことをおっしゃった。そこには、林業のモラルとって、智頭の中で山守あるいは山番と言っていて、人の山を預かるわけだから、そこをごまかして収入を上げるということでは全くなくて、そこにやっぱり倫理観、人としての徳を積むという、人の生き方というところを誰に言われずとも自分の生まれ育ったところで暮らしている中で学んでいくというのですかね。木を伐る、そのときの木の年輪とか枝打ちの跡とか、あるいはちゃんと研いだ鉋で枝を落としたかとか、そういうものが見えてしまうのです。そういうものが50年、100年のスパンで生きている。都市には色々楽しいことがあるかもしれないけれど、これは渡邊麻里子さんのお話ですが、そうではない生き方というのが田舎にはあるのではないかということを書いていました。また、大谷君が、僕が好きなのは、「始まりはHIP HOP」。あ、違うか、ホップはビールね。そういう形で田舎を拠点に世界とつながっているという感覚を、皆さん持っているということを感じました。

それに対して、フロアや学生の方から、自分は都会で暮らしてきた、何か電気製品等ものが壊れたら、家をどこか修理しなければいけないときは、10万円出して専門店で頼んでいたかもしれないけれども、最近は隣近所の詳しいおじさんに聞いてみて、自分でまずはやってみる、直してみる、無理だったらお願いするということをし始めたという話がありました。そこからたぶん、人のつながりと同時にたくさんものを学んでいるはずなのです。生きるためのツールとか技術とか、そういうことを暮らしの中で身につけ始めているというのを感じました。

それから岸本先生の方は、今までの教育、特に地理学教育ですと、現場を客観的に伝える研究をしなればいけない、現場に入って攪乱してはいけない。でも、そうではなくて、自分たちが現場に入って一緒に参加して、地域も変わるし自分も変わっていくという教育こそが本当ではないか、生きる力をつくるのではないかということ、ご自身も考え、そういう教育を智頭農林でやってきました。でも、その生き方は恐らく大谷さんや渡邊さんがやっていることとつながるのだろうと思います。そういうことを聞いて、フロアから、そういう暮らしをどうやって伝えたらいいのか、皆そういうことは大切だよ、でも、それをさらに自分が大切だというものを周囲の人、あるいは都市部

の人、あるいは世界どこでもいいのですが、伝え方には色々工夫があるし考えていきたい。こういう発信力が、タルマーリーなどにはあるのではないか。そのことは同時に、教育、何を伝えたらいいか、本物が大切だとは言うけれども、本物というのはなかなか難しい言葉なので、やっぱりそこをもう少し詳しく話ができればと、そんなお話があったように思います。

○福田氏 今、分科会に参加してくださった方のメモをざっと目を通したところです。ご紹介したいと思います。「なぜ智頭でこのような活動が、いつからできているのでしょうか。智頭町のゼロ分のイチ活動、百人委員会との関連はどうなっているのですか。そのあたりが知りたかったです」。総括セッションで話題にしてほしいことの一つです。

それから、「常に新しいやり方や世紀の大発明みたいなことが、果たして必要なのでしょうか。昔ながらのあり方は変えていく必要もあると思うのですが、その一方で、古いやり方にこだわる余り、時代とのミスマッチなどは起こらないのでしょうか」という問い。しっかり聞いてくださっています。そのようなものがあります。

それから、「文化の価値というのは、その共同体が決めるのではないかと思いました」ということです。すごく長く書いてくださっているのですが、「経済的な価値ではなくて、楽しくなれたり、おいしかったり、効率がよくなったり、生きる上で必要かどうかということです。ただ、その文化の価値が、生きている地域、範囲、コミュニティに直結しているのかなと思うのですが、どうでしょうか。幾らこだわって本物をつくり、消費したいと思っても、仲間がいないと成立しないですよ。同じ問題意識や価値観の人とのつながり、生きていけるような地域で暮らしたいなと切に思います。そのあたりをセッションで掘り下げてもらったら」というご希望です。以上です。

それでは、分科会Bのほうの報告を、小林先生、よろしくお願いたします。

○小林氏 それでは分科会Bのご報告をしたいと思います。3組の方のご報告がありました。

まずは、「こども・らぼ」代表の岡武司さん。同じく副代表の松本真理愛さん。鳥取市中央人権福祉センターの副所長でおられます川口寿弘様。このお三人で学習支援とこども食堂の取り組みについて報告していただきました。2番目のご報告は、南部町からおいでいただいた原和正さんに地域福祉協議会での取り組みをご報告していただきました。最後は、鳥取市の中心市街地活性化協議会のタウンマネジャーの成清仁士さんに、古いマップを持って中心市街地を色々な方と歩いての取り組みをご報告いただきました。

以上、三つのご報告があったわけですが、待たなしの地域の課題ということでいえば、こども食堂であったり、高齢者の居場所づくりだったり、1番目、2番目の発表になると思います。まず、最初のこども食堂、学習支援の取り組みについてですが、学習支援というと学習塾とかある種のまさに目標があって、それに合わせた個別の学習とか到達度目標とか、そういうのを実際にはイメージするのですが、まずは貧困あるいは生活困窮者世帯の子どもさんの居場所づくりが根底にあるだろうということで、こども・らぼさんが、学習支援の一つの合い言葉として、勉強しなくていいよと、勉強しなくていいよという学習支援から始めたというのが、私は聞いていて非常に印象に残りました。つまり、勉強しなくていいよが、勉強するということにつながるということですよ。それは学習支援ではないと言われるかもしれないですが、広く考えれば、勉強したくなる雰囲気をつくるのが実は学習支援なのだ。まずそういうところから始まった活動であったと。そして、「わからないときに教えて」という先生がいる。それも立派な先生ではなくて変な先生がいる。子どもさんたちが、まさに変な先生と勉強したいと書いてくれたと、そういう実践発表でした。変な先生とは何かというと、まさにそこにいる人なのですね。らぼのスタッフが一緒に勉強します。そ

れで、わからないときに教えてと。つまり、「教えてやるから覚えろ」ではない。わかりたいから教えてね。変な先生、答えを持っているかどうかわからないけれども、とにかく変な先生は大好きだという、こういう関係があると。すみません、報告者の前で発表するのは緊張しますよね。ちゃんとやっているかどうか。でも、今日はちょっと許していただいて。

それで、もう一つはこども食堂の取り組みでした。こども食堂は、貧困家庭の子どもさんの対応ということで最近よく紹介されているところですが、このこども食堂の取り組みのきっかけは、米袋をもらったから、さあこれから何を始めようかというところから始まったということです。貧困、困窮対策というストレートな直球ではなくて、居合わせた人たちがどうしようかということで、おにぎりとお味噌汁を作って、「おいしいよ」という形で進めた。よくよく聞いてみると、お母さんは仕事が遅くて、夜10時ごろにしか帰ってこない。それではというので、おなかもすいたもっと早い時間にみんなで作ってみよう。まさにスタッフと一緒に食事を作る。人間は生きている限り食べるということはとても大切なことだと思いますが、その食事ということに関して、支援という上から目線で、こっちでやってあげるよということではなくて、一緒に食事を楽しもうよという雰囲気の中でこども食堂という活動を始めて、そして今も継続されている。「すごい！鳥取市」というキャッチフレーズがありますが、まさに、「すごいぞ！鳥取市民」と私は言いたかったですね。それこそ、寄附でこども食堂の食材が全部賄われているそうです。こういった活動に関して、市民の皆様が、地方紙を見て、何か寄附したい、協力したいという気持ちはあるのだと。それこそ、地方都市のまさにこういうコミュニティが残っているのだと、私はその報告を聞いて感心しました。行政とか、外部からのそういった資金調達なしにこういう活動に賛同した人が、そういうものでこのこども食堂を運営しているということでした。

学習支援とこども食堂という取り組みをされている中で、初めから支援やサービスのメニューが決まっているのではなくて、子どもさんの様子を見て何が必要なのかということを考えながら、まさにこども・らぼというのはラボラトリーの略で、研究的に子どもの中に子どもの問題があり、解決策があるのだという精神で、子どもと色々対話をしながら、対話の中で支援が何なのかを見つめながら、手探りの中で進められている。そして、その立ち上げからこれまでのこども食堂と学習支援の取り組みというのは、自分の近くにいる子どもが困っていたり困難な生活をしている、見て見ぬふりができないというところから始まった。その中で、やっていることがいつの間にかマスコミに取り上げられて、社会問題として、社会解決の一つの手法として広まったという報告でした。

最近、貧困問題、貧困家庭の子どもさんの学力保障だとかいろんなことを言われていますが、実は一番食べるということが、生き物にとって一番大切なことだと私は思っています。食べるということの中から、実は学習とか、あるいはそれこそ生活の様々なことに関して一緒に話し合っ、まさに共同体として一緒に活動しているという報告がありました。それが第1番目の実践、取り組みの報告でした。

2番目に、南部町で地域振興協議会という組織を立ち上げた原さんのご報告ですが、この取り組みは、既存の区長会と既存の地区公民館の活動を徹底的に見直したということであり、要するに、区長会は短期間で代わり、区長会の出席率が悪い、問題が先送りされるという、ある種そういう体質というか特質があった。地区公民館は運動会とか文化祭、そういったことはやるけれども、地区課題には未対応だった。こういった二つの組織が淡々と運営されており、それを見直しましょうと。それを見直すために、それぞれのメリット、デメリットを総ざらいして、まさに自分たちの町、自分たちの地域の問題として、福祉の問題をどうするかという話が、両方の組織ともしっか

りした回答が得られなかった。どこかというとは社会福祉協議会に任せておけばいいという雰囲気になったけれども、自分たちの生活の問題は自分たちで解決するということが、この組織の見直しから始まったと言われました。既存の組織というのは、なানাあであったり、あるいは問題先送りということは、いろんなところで生じていると思いますが、まず、今ある問題を総点検して、新しいものをつくるという取り組みから始まった。そこで何が生まれたかという、コミュニティホームモデル事業という全国初の取り組みでした。自宅で暮らしにくくなった高齢の方を、同じ生活環境の、まさにこの地域で暮らしていけるように、古民家の利用であったり、いろんな介護スタッフであるとか医療スタッフの支援を得ながら、自宅では暮らしにくいけれどもそういったサポートが保障されている住まいを用意したということです。今日の午前中の平田さんのお話にもあったように、実は経済活動と福祉というのが好循環しているのですね。それによって、サポートのスタッフも、実はこの地域で全部賄えた。そういうふうにも雇用も創出し、福祉の手だてもでき、地域から出ていかれた人も、実は地域で住みたいと。暮らしの生活、家屋の管理などが難しいから出ていっただけで、本当はずっと長い間住んでいたところに住みたいのだという欲求と、それから、将来的に病気になったらどうしようとか、あるいは災害になったらどうしようかという不安に関しても、住みたいためにはそういったサポートとか、コミュニティとして支える。つまり、家屋に住むという意味ではなくて、コミュニティの中に家屋があるという発想で、コミュニティの中で支えながら、実はその中にいろんな方に入っただいて、どこかの施設をつくるのではなくて、まさに地域の中で見守る高齢者の世帯をつくったという取り組みのご報告がありました。この取り組みが始まる前は、もちろん新しい試みですから既得権益の問題もあるでしょうし、反対の声もあったと言われていましたが、実は、既存の組織の見直しだけでもこういう画期的な事業が取り組み、まさに今、よく言われている安心安全な老後が過ごせるような環境をつくられたということでした。原さんの言葉で忘れられないのは、地域の課題から絶対目を背けないと、他人事ではないと。まさにそれはこども食堂の取り組みにもつながるところだと思いますが、地域の問題は自分の問題だし、自分の問題だから自分の問題として解決しているうちにそれが地域の問題になって、結局は感謝するということの中にお互いさまという意識ができて、そういうコミュニティをセーフティーネットと言いながら、実はセーフティーネットではなくて力強い地域づくり、コミュニティづくりに展開されていったというご報告でした。

最後は、鳥取市の中心市街地活性化協議会のタウンマネジャーをされている成清さん。オランダとか海外の町並みと地域、鳥取、岡山、それぞれ国内の都市の景観あるいはまちづくりのことについての専門家ですが、古いマップを持って鳥取市を歩くと。学生を初めとして、高校生とかいろんな方と歩くと。そういう中でいろんな発見をしていくという取り組みのご報告がありました。我々は、例えばあそこの店まで行って帰ってきて終わりという、ある種の目的を持って非常に合理的に移動する。古いマップを持って歩くということは、まさにその景観も、その景観が生きてきた歴史も感じながら歩いてみる。おもしろいものは何なのか、あるいは今ある建物の背後に100年前はどうだったかといって考えながら歩くというのは、歩くという中にその人の想像があったり、その人の関心があったり、いろんなものが混ざり合っている。歩くということを通して、こういう試みの中での様々な成果をご発表されました。

私がこの3組の発表を聞いて思ったのは、確かに貧困は貧困だろう。しかしながら、貧困というものが孤独になったときに、実は一番貧困が貧困たる決定的なダメージになるわけで、皆が貧困だったら貧困でも、貧しいのは楽しいじゃないと思うわけですね。まさに私が子どもの頃は貧し

かったと思いますよ。おもちゃもないし、それこそ近所の柿の木、どれだけ盗むかみたいなのが競争になっていたりして、それが遊びになったりして、それでとられたおやじも、おまえもとうまくやれとか、小さい子に柿1個持たせるとか、そういう仲間関係もあったわけです。ですから、貧困が直接ダメージになるというのは、まさに単一の家庭が直撃を受けているとか、あるいは物が無いことによって友達がないとか。実はなくても貸し借りができたらダメージは受けないのですが、その貧困の問題でコミュニティが断裂されてしまった孤独というものに大きく後押しされて、様々な困難が生じていると思いました。

それから、セーフティーネットということでは言われたのですが、セーフティーネットというのは実は、これしかない待たなすだと徳俵に足がついたときにどれだけ頑張れるかが人間のそれこそ生きる力で、そのときにこそ自分も頑張らなければいけないけれども、できないところは他人に頼むという、いわゆる対話があったり知恵があるわけです。そこら辺では実はこの3組の発表は共通して語っていただいたように私は思いました。ともすれば、時間と空間というのがお金に換算される世の中です。しかしながら、食事、暮らし、歩くというのは、まさに移動ではなく歩くですし、それから、住むというのは寝ればいわけではなくて、やっぱりその中に生活の香りがあるわけです。食べるということが、経済効率で外で食べたほうがおいしいとか、コンビニの弁当がお母さんの作った弁当よりおいしいという社会になっているというのは、いかがなものかなという思いをしながら聞いていました。私自身も大変勉強になりました。どうもありがとうございました。

○福田氏 分科会Bのほうの参加者のメモです。セッションで話題にしてほしいことではないですが、気づいたこと、感じたことということで二つご紹介いたします。

「子どもであろうと高齢者であろうと、出かけるきっかけとなるこのようなコミュニティづくりが大切なのだと感じました。このような多様なコミュニティが町のあちこちにあれば、とても生きやすい町になるのではないだろうかと感じました」というのが一つです。それから二つ目です。「人と人のつながりや関係性をフェース・ツー・フェースでどうやって取り戻していくのか、再構築していくのか、いかに小さな活動でも愚直に続けていく人の有志が大切だと感じました」ということです。

それではここからは、分科会のご報告を受けまして、少しディスカッションに入っていきたいと思います。聞きたいことがありましたら手を挙げていただいたり、問うていただいたらと思います。

ここからは小泉先生にバトンタッチします。よろしく願いいたします。

○小泉氏 話題がたくさん出てきて、これを総括しろという大役を担っているということで、どうしたらいいのかなとちょっと思っているのですが。私はこの3月まで鳥取大学に所属していました。今も講師として所属させていただいているのですが、今東京の方に行っております。職員として、鳥取大学の出先機関として池袋にオフィスを構えていますので、いつでも来ていただければと思います。今日は、呼んでいただいて本当にありがとうございます。

いきなり違う話になりますが、僕は、それこそ平田オリザ先生の本を色々勉強させていただいているのですが、数年前の本の中にクールジャパンの功罪ということが書いてある一節があります。クールジャパンってご存知の方はどれぐらいいらっしゃるでしょうか。7割ぐらいですかね。クールジャパンというのは、簡単に言えば、今政府が経産省とか内閣府とかが一生懸命躍起になって、ここ5年、10年ぐらいやっている、クールな日本の文化を打ち出そうという政策です。例えば、アニメとか漫画あるいはゲームとか、そういったものをどんどん輸出していこうということでやっているのですが、それに対して平田先生はかみついているのですね。そんなクールジャパンなんていうの

は、気持ちはわかるけれどもどうなのかと。その辺はまた後で平田先生に詳しくは述べていただく、あるいは皆さん、ぜひ、本を読んでいただければいいと思いますが。要はどういうことかということ、平田先生がおっしゃっているのは、クールジャパンというふうに売り出して文化を選別する、それで売り出していくというのは、本当にそれで正しいのかという視点なのです。つまり、日本の文化って色々あるではないかと。いろんな文化がある中で、なぜそういったアニメとか漫画とか、それを打ち出すのはもちろん結構だけれども、それ以外の大切なものがあるのではないかと書いていらっしゃる。大体こういったご理解でよろしいでしょうか、平田先生。(笑声)ありがとうございます。ということを書いていらっしゃるのです。

何でこんな話から始めたかということですが、僕はその責任者の一人だと思っているのです。ということかということ、アカデミアつまり学术界、僕は文化政策とかを研究しているのですが、そういった研究者たちがそれに対して危惧を十分に唱えてこなかったということがかなり問題だと思っています。つまり文化、それを打ち出したいと言っている国が、なぜそんなことをし始めたのか。別にクールジャパン全てが悪いわけではないのですが、ちょっと偏ったように見える打ち出し方を彼らはしている。それをなぜ、広い意味での、アカデミアの意味での学会は、それを注意したり、あるいはこうではないかと言ってこれなかったのかという問題があると思うのです。

これはどういうことか、二つの意味があるかなと思ってこの話をさせていただいたのですが、一つには、今日の分科会、僕もあちこち行かせていただいて聞かせていただきました。非常におもしろかったのですが、最初に平田先生が芸術文化を例にしておっしゃってくださったわけですが、そういったもの以外にも様々な文化的な多様性があるということですね、本物の文化というのがあると。実は、平田先生もそういったことを本の中で、「市民芸術概論綱要」ということで書かれて、宮沢賢治の話からスタートする本だったと思いますが、宮沢賢治がプロフェッショナルの芸術家だけが芸術家ではないと、これからは。そうではなくて、市民がみんな芸術家、農民、あるいは市民が芸術家であるべきだという話をしている、それを引いてこられているわけですが、そのようなところからも見られるように、狭い意味でのアートだったり、あるいは文化、芸術文化だけが、実は広い意味での文化ではないと、当たり前ですが。要は、文化というのは色々多様性を持っているということですよ。ところが、それがさっきのクールジャパンではないですが、ある視点から非常に狭められて捉えられてしまっているという問題が見えると。そういったことがあるだけではなくて、私たち、ここは地域学研究大会だと思うのですよ。なので、もう一つ考えなければいけ



い。つまり、様々な実践をここでシェアする。それはどうやったら可能なかということを考えなければいけない一方で、私たちがそれを研究者として、あるいはそれを学んでいる学生として、どうやってそれに向き合っていくのかということも考えなければいけないと思います。

なので、この総括セッションは二つあるかなと思っています。皆さんの上げていただいた総括セッションで話題にしてほしいこと、一つには、様々な地域における実践がいかに可能であるかとか、あるいはそれがどういった条件のもとで可能になったり、可能でないのかということが、いただいたメモの中から見える視点だと思います。ただ、そこだけで十分ではないと私は思います。こ

れを地域学というものにもう一度還元したときに、私たちはどうやって、例えば地域の様々な実践を見ていくかとか、あるいはそれをすくい上げていくか。これは大きなチャレンジで、さっきの話のアカデミアがなぜクールジャパンに文句を言えなかったかという話にもかかわるのですが、そもそも私たちが前提としているパラダイムというか、知の前提自体を疑って、そこを見直さなければいけない作業だからです。なぜクールジャパンを私が見られなかったか。それは古来言われてきた、古来というか明治以降ですが、言われてきた芸術文化という枠組みに、私たちがすごくこだわっていたがために、クールジャパンというところで打ち出される様々な一部の文化以外のものというのは十分注意できなかったとか、色々な理由があると思うのですけれども。いずれにしても、それは同じような話で、私たちがその地域の実践を見ていくためには、一度地域学が、あるいは学問が前提としている学問の体系というのを見直さなければいけないような作業なので、非常に荷が重い、けれども、重要な作業だと思います。

すみません、ちょっとわかりづらくなりました。なので、ちょっと仮提言ですが、総括セッションの柱を二つ設けさせていただきたいなど。繰り返しますと、一つはどういった条件のもとで、あるいはどういった実践によって、その地域が活性化したりするのかと、そういったことが、やはり当然ながら出てきた問い。これは問いには出ていないのですが、しかし、ここが地域学研究大会ということ考えると、あるいは鳥取大学という教育研究機関がやっていることを考えると、それをどのようにすくい上げていくか。言い方を変えれば、様々な実践知をどうやってそれを私たちの研究とか、教育にいかしていくか、実は、分科会でもそういったところが出ていたとは思いますが。若干、これからの教育についてとか、大学に期待することというところで、分科会でも上げていただいたところにもかかわってはいるのですが、その2点をぜひ、ちょっと広げていくところからスタートしたいと思いました。

私ばかりしゃべってもつまらないので、ぜひ、ここの総括セッションでは、ここに来ていただいている皆さんも含めて、あるいはフロアに残ってくださっている皆さんも含めてご意見をいただきたいと思っております。よろしければ平田先生も議論に参加していただければと考えております。

では、早速ですが一つ目です。いかにこういった実践が可能になるかというところで、具体的に智頭での活動について、なぜこういった活動ができたのかとか、あるいは百人委員会との関係はどうなっているのかという具体的な質問がフロアからも上がっているの、よろしければ思われるところ、智頭のお三方から上げていただければ幸いです、いかがでしょうか。

○大谷氏 自分の活動に当てはめて言いますと、7年ほど前に林業を始めようと思ったきっかけの一つは、今の智頭町長が言われていた言葉で、「世の中は、宇宙船で、いろんなものを捨てながらどんどん宇宙に向かっていっている。そういう中で私たちの町は、みんなが捨てていったものを拾い集めて町をつくっていきたい」ということを言われて、それにすごく共感した部分もあって。そういう町長の思いというか、リーダーシップに共感を得ている人が多いというのは感じました。それで百人委員会との関係ですが、百人委員会に僕は入っていないのですが、智頭町にはそういう力を持った人というか、やる気のある人が多くて、百人委員会でやっている人はそこでやっていますし、僕たちは百人委員会に入っていないけれども、また別の方向でやっているといういい関係はできていると思います。ただ、それがいろんなところで同時多発しているので、もうちょっとまとまったら力強くなるかなと思ったりもします。

○渡邊氏 そうですね、私たちも、寺谷誠一郎町長の応援が非常に大きかったです。やっぱり町長が本物志向といいますか、本物を大事にしようという思いがあって、私たちの事業に共感して応援

くださったというのが大きいです。百人委員会には、私も入っていないのですが、自分の移住のきっかけになった森のようちえんは、百人委員会から出た組織だと聞いていますけれど、森のようちえんがあったことで移住者も多いですし、私たちも仲間を得やすかったというもあります。

さらに、智頭町の中に5つの地区があって、そのうち的那岐地区で私たちは事業をしているのですが、地区ごとにキャラクターがちょっと違うとは聞いていて、地区ごとに振興協議会があるのですが、地域自治がすごく発達していると感じます。昔ながらの小さい自治が生きている。なので、私たちも新しく外から入ってきたとき、その村の社会のことは全くわからないですし、この人がどういう性格かとか、人間関係も全くわからないので、智頭に来る前は正直すごく戸惑うことが多かったのですが、智頭では、振興協議会のリーダーたちがいて、自分たちがちょっと困ったときに相談できるリーダーたちがいる。さらにその背後には智頭町役場が控えているという感じで、常に問題を解決していけるサポートシステムがあるのが、今までとは全く違います。

○岸本氏 百人委員会の前に、実はゼロ分のイチの村づくり運動というのが、地域ではなくて集落単位で行われていまして、それを指導されたのが京大の杉万先生です。その先生が言われているのがグループ・ダイナミックスという集団力学理論でして、外で大学が見るのではなくて、地域に実際に入って、一緒になって地域を変えていこうということで動き始めたという感じがあります。今、実際にかかわっている方を見ると、非常に楽しそうです。やっていて楽しい、地域づくりを楽しんでおられる。昔のこと、いろんなことを掘り起こして、それをやってみる楽しさということをすごく言われています。どこの地域でもある話ですけど、やってみると本当に手応えを感じる。それで自分たちが楽しくなる。そういう当事者性をすごく持たれているかなという感じがします。

○小泉氏 なるほど。今、いくつか上げて、トップリーダーの理解だったり、そういったグループ・ダイナミックス、スケールメリットを生かした取り組みであったり、色々条件を上げてくださった。こういうことを丁寧に現場でしっかりすくい上げる。智頭町はなぜこれだけの成功をおさめることができたのか、なぜこんなに移住者が多いのか、どういう条件のもとで？そういうことをしっかり見つけて、あるいはそれを残したり、あるいはそれを伝えていく責任が僕ら研究者、学生を教育する人たちにあると思っています。

似たようなことでちょっと気になったのが、分科会Bの方で、小林先生が最後に知恵という言葉をおっしゃったのですが、すごく似ていると思うのです。いかにネットワーク化をしていくかという知恵が、非常に満載な部会だったような気がします。その現場にいない私たちには見えないところで起こっている様々な知恵、あるいは技法といってもいいのかもしれない、それがそこにある。それをすくい上げるのが私たちなのかなとも思うのですが、どういった知恵とか技法とか、そういったものが皆さんを突き動かしたり、あるいはそれを可能にしていくのか、そういったところをぜひもう少しお聞きしたいと思うのですが、お三方、いかがでしょうか。こういったことで僕らはこども食堂ができるようになったとか、あるいは、まちづくりをするときにこういうふうにすることが成功につながっていったとか、ちょっとお聞かせいただければ。簡単なことでも結構です。

○岡氏 基本的に僕らこども・らぼの中心的なスタッフに共通しているところは、学校が嫌いだということだと思えます。学校的なものが嫌い。なので、不登校とか生活困窮であるとか、いろんな大多数から排除されているというところに非常に興味があるということ。

もう一つは、注目をされてこういう場所に出る機会が増え、先進的であればいいと言われるのですが、そんなことは思っていないくて、この目の前に起きている状況を何とかするにはどうしたらいいのかということの繰り返しできているということ。僕らの中で、本当に日々、共通して議論する

ことは、「いいことをしている」ということに足をすくわれないようにするという。ちょっと関係ないかもしれませんが、みんなが、いろんな考え方のもとにこの子がよくなるにはどうしたらいいかということ色々考えると思う。先ほどのクールジャパンもそうだと思いますが。僕が以前働いていたとき、学校だったのですが、部活とかでおそろいのTシャツをつくったりする。生活保護を受けている家庭の子は、例えば1,000円、2,000円、学校に払わないといけないうきに領収書を下さいと言わないといけないうのですよね。みんなが心を一つにして同じTシャツで頑張ろうというときに、その生活保護を受けている子は一人だけ分断されてしまうと思うのです。買いませんと言えないのですよね。買わないと中に入れない。でも自分は領収書を下さいと言わないといけないう。それを仕掛けている側は、みんなが一つになるという大きなすばらしい目標があるので、余りそこに目が行かない。僕らも、すばらしいとかいいことをしているとされますが、これが果たして、その目の前の子のことを思ってやってはいるのですが、逆に苦しめている可能性もあるかもしれないということ、常に周りのスタッフと確認しながらやっているつもりなので、いいことしていると思わないというのが原動力。あと、はじめたものの意地みたいなものも原動力かもしれません。

○小泉氏 ありがとうございます。他の方、何かありますでしょうか。

○原氏 できた条件は何か、その知恵がどうかということですが、お話の中に出ましたけれども、智頭町も地域振興協議会がつくられている。やはりこういうのができたのは、昔からの言葉で、「ヒトとモノとカネ」があったということなのですよ。「ヒト、モノ」というのが、こういう町長のリーダーシップが、私どもでは退任された坂本町長が、こういうのをつくり上げられた。人口減少、そして交付税の減額で、もう従来のやり方では行政はできないと。あとは「ヒト」なのですよ。たまたま私どもは新興団地ですから、みんなよそから移ってきた人で、自分たちの町をつくらなければいけないという意欲があったと同時に、私もそうですが、会社で組織づくりにある意味慣れていたという。コミュニティホームの今の施設長は、実は帰ってくる前までは一部上場会社の専務をやっていた。そういう組織運営の仕方があったところに、活動を支える県や町からの補助金が出ていた。よくいう人と物と金、この三つがうまくトライアングルで結ばれないとだめだという。もちろん、その中には人の要素が非常に多いわけで、知恵、知恵者もいたし、意欲もあったという、こういうことが土台にあったから、今できたかなと思います。もちろん、コミュニティホームについては、県からの働きかけがなければ、我々はできなかったかもしれませんが、県そのものが地域包括ケアシステムということに対して、ある意味では、意欲と先見性があったということです。それは我々が考えたわけではなくて、それにうまく乗って、それをやるだけの能力が地域にあったということかなと思っています。

○成清氏 いかにネットワーク化していくかということですが、僕は、やはりみんなが共有できる土台の上に立つということが大事だと思っています。その一つが、やっぱり町の歴史ということだと思っていますし、それを共有しておくことが非常に大事だと思っています。それに加えて、この町をいい町にしたいとか、そのために今の町を知りたいという方に集まってもらう。それから、未来の担い手たる子どもを育てていきたい、そういうことを共有できる方に集まってもらうことで、そういうネットワークをつくっていくことをやっています。

○小泉氏 そうすると、よくいうまちづくりの成功例みたいな感じ、例えば、移住者をふやせば何か成功するのだみたいな話、行政もよく施策としてやりますよね。皆さんのお話を聞いていて思うのは、それはたぶん間違っていないけれども、実はそこには前提条件として、例えば、行政の施策の前にこういった土壌があって、例えば共有できる土台があるとか、あるいはその前提条件とな

るようなことがあって、それで初めてその移住者たちが活動できたり、一緒におもしろいことができるようになっていくことがわかってきますよね。なので、やっぱり僕は、例えば移住者をふやせばいいのだよみたいな話があって、あるいは行政がそう言っているけど、それは本当かな？実際にお話から引き出してみると、当然それだけではもちろんなくて、町の色々な前提条件がそこにあたりして、その上でということが、今のお話からも見えてくると思います。やっぱりそういう研究とか教育というのは、その現場の中から、いかにその条件が、あるいは知恵が、本当に可能なのか、みたいなのをすくい上げる役割があって、地域学が果たすべきところなのかなと思います。そういう視点を持った学生が育って、それで地域づくりに入っていくということは、学校の現場であってもやっぱり重要なのかなということをお聞かせいただいた。それぞれ本当におもしろいお話で、もっと本当は掘り下げていくべきですが、ちょっと総括的にまとめてしまって恐縮です。

ということで、地域学のやっていくべき方向というのが、地域の実践の中から見えてくる場所もあるのかなと思っているのですが、コーディネーターのお三方、お聞きしてどうでしょうか。皆さんの実践を踏まえた上で、家中先生、先ほど分科会の最後で、いわゆる生産についての議論をなさっていて、そこに目を向けるということは、それこそ今までのアカデミアの中では余りなされてこなかったことのような気がするのですが、そのあたりのご意見などおありでしょうか。

○**家中氏** どうすくい取るか、着眼点みたいなことかもしれません。自営林業ですよ、それは昔からやっていたことで、それに若い人たちがどんどん入ってくるのです。大谷君はもともと智頭の人ですが、他にもいろんなところにいます。その人たちが生き生きしているということと、一般的な言い方かもしれませんが、自分で技を磨けば、それなりにやれば、どんどん山がよくなる、木がよくなる、収入が増えるという、そういうところの魅力というか。それと同時に、大谷君のいつも頭にあるのですが、同時代性というのですか、小さなという言い方は失礼ですが、一つのあらかじめ与えられた文化の中だけで育っているのではなくて、自分でいろんな出会いがあって、アメリカにも行って、それで仲間をつくって、という生き方というのはおもしろいなど。

ちょっと脱線してもいいですか。東北にもおもしろいのがいて、遠野で馬で木を伐り出すというのをやっているのですが、彼はハングライダーが好きなのです。自分でハングライダーでほんと山の上から飛んで、それで自分の村を見るのですよ。自分の村がどんなふうになるのがいいかなと、仲間と考えていって、遠野だと80代ぐらいで馬を使っている人たちがまだいるので、その技術を学んで、自分たちで木を伐り出して、自分たちの村という生態系の設計、デザインをしていくのです。そこには、とてもおもしろいことだからみんなが寄ってくるのです。ゲストハウスをつくったり。結構おもしろいことがたくさんある。それおもしろいよねなんて言っていると、キーワードは「生産」だよねと。

皆さんと会っていると、これはおもしろいということに出会います。学校嫌いが学校を救うみたいな。そういうところに何かアイデアがある。おもしろいおもしろいと言っていることで、同時にこれは地域にとって大切だなと考えていることが、実はほかの分野の人たちも同じようなことを考えていて。これってなかなかブレークスルーだよねと。それを地域の人たちと一緒にやるということのおもしろみというのがあります。それがどうも「生産」というキーワードらしい。20世紀の生産力主義と違う世界かなと思っています。

○**小林氏** 研究者って、学会とか研究会でしか評価されないのです。地域でいいことをやっても評価されないの、そっちはっかり見ている。だから、逆に言えば、本当に優れた頼りになる大学の先生が近くにいるから尋ねたら答えてくれるよという、先生が評価される社会をつくっていかなか

ったら、地域で生きている研究者なんか要らないと思います。

○小泉氏 もっとお話を先生方にも皆さんにも聞きたいところですが、大分、時間がせっぱ詰まってきたてしまいました。ぜひ、こういったこともあるのではないかと思う方、あればちょっと上げていただければと思います。

○原氏 よろしいですか？最近、ある同窓生と話をしましたら、私は団塊の世代で、日本が工業化に向かうときどんどんというこで、技術者として学校を出ました。36名卒業しましたが、実はもう6名亡くなったと。まだ68歳です。同じ時期、島根県のある高校で、同じ年代が同窓会をやった。51名中、亡くなったのは1名だった。その田舎の人たちは皆きちんとした生活をしている。とにかく都会に出て一流上場企業に入って、36人のうち6人も亡くなって。やはり早く亡くなるというのは余りいいことではない。我々の世代は何だったかなと思う。先日、日本海新聞に今鳥取はリパブルで、その世代の方たち、学生さんの価値観が変わっているということを書いてありましたが、やはり今、「本当の生き方は何か」ということを考えて学生生活を送っていただくことも、特に地域ということになると思ったりしましたので、ちょっとお話させていただきました。

○小泉氏 ありがとうございます。鳥取大学は非常に先生方との関係性が近い大学だと本当に思っています。学生の皆さん、今、原さんがおっしゃっていただいたようなことを深めるのに非常にいい環境なので、ぜひ生かしていただきながら追求していただきたいなと思いました。

最後に、本当はもっと議論を深めていくところではあるのですが、時間の都合もありますので、平田オリザさんからコメントをいただければと思うのですが。簡単にいただけますでしょうか。

○平田氏 そうですね、せっかく地域学部の主催で学生さんもたくさん残っていらっしやるので。要するに、成功事例が出てきていて、それをアカデミズムがどう分析するかといったときに、やっぱり共通項と、それから、その地域の特性というものをきちんと見ていかなければいけない。地域毎は別にいいのです。そんなことは一々考えなくても。持てるリソースを最大限に生かして頑張ればいいのですが、大学というのは、それをきちんとやっぱり分析して、できることならば、ほかの地域にも応用できるものは応用できる、応用できないのはなぜできないのかを証明しなければいけない。それが学問の役割ですよ。今日の事例でいいますと、というか全国そうなのですが、私が例に挙げた豊岡市とか奈義町とか、あるいは智頭もそうだと思いますけれども、一番なのは今も出てきたリーダーシップです。「首長さんのリーダーシップ」は非常に大きいです。僕はよく、こういうシンポジウムで聞かれます、うちの町はどうすればいいですかと聞かれて、それはセンスのいい首長を選んでくださいとしか言いようがない。民主主義の世の中なので。これは身体的文化資本ですが、首長が成長するという事はないのです。だから、いい首長を選ぶしかないのです。これはもうはっきりしている。それが一つ。政治の問題でしょう。それから、意外と大事なのは、「財政基盤」がしっかりしているということです。例えば奈義町というのは岡山県で今、財政基盤が一番しっかりしている。実は、それは背景がありますね、自衛隊がある。恐らく年収の1割、GDPの2割ぐらい自衛隊が占めているでしょう。そういうこともしっかり見ていかないといけない。あるいは基幹産業がしっかりしている。豊岡市でいえば観光、かばん、それから農業。しかも高価格、高品質のものがある。だから外貨が稼げるということです。そういう経済のことも見ていかなければいけない。それがまず大事です。それから、中間的なところでいうと、大体成功しているのは環境と経済の両立とか、福祉と経済の両立とか、やはり私たちは資本主義社会に生きているので、ある程度、それは小商いであっても、経済的に自立するものでなければ持続可能にならない。そこの経済の仕組みは、やっぱり非常にきちんと見ていかなければいけない。

しかし、一方で大事なのが、今日それぞれ個別に発表していただいた、大体成功した町にはおいしいパン屋さんがあるのですよ。(笑声) あと、イタリアンとかスイーツとかがちゃんとある。それは、そこで循環が生まれるのですよ。それはなぜかという、最初の講演でも話したように、若い女性、要するに、子育て中の若いお母さんたちに選んでもらえない自治体は滅びるわけだから、だから若い女性が好きなものがない町は滅びるのです、もう確実に。例えば奈義町は、これ言ってよかったかな、今度イタリアンを誘致しました、町が。相当のお金をかけて、石釜でピザ焼くイタリアン、本格的イタリアンを誘致しました。もうそういう時代になってきているということですね。工場誘致よりもイタリアン誘致の時代なのです。(笑声) そういう現象面のこと、そこも、だからこそ地域学というのは、ある種リベラルアーツ的な政治や経済からパン屋さんのことまでを、全て網羅できるような知性というのが必要なので、ぜひ学生さんにはそういう勉強をしていただきたいというのが一つ。

それから、もう一つは、やっぱり、今日の事例でもそうですけれども、地域の伝統とか風土とか、地理、それから歴史と切り離してまちづくりで成功した例はないということです。例えば、城崎国際アートセンターがなぜうまくいったかという、1年ぐらい、そのリニューアルの策定委員会をやっていく過程で、城崎の若旦那衆とお酒を飲む中で、城崎というのは志賀直哉さんの『城の崎にて』で50年以上食ってきた町なわけです。別に城崎が何かやったわけではなくて、たまたま車にひかれそうになった小説家に来て、イモリの死骸を見つけただけのことでしょ、あれで50年以上もった。でも、それは志賀直哉だけではなくて、谷崎潤一郎とか様々な人が、古くは桂小五郎をかくまった宿とか、色々あって、文人墨客を招いて、1カ月ぐらい逗留させて、最後に書を一幅書いてもらうだけで宿代はただみたいなことをずっとやってきた町なのです。飲んでいる中で、それアーティスト・イン・レジデンスでしょ。でも、今どき、そんなわけのわからないアーティストを呼んでも困るから、だったら、ちゃんと目ききのプロデューサーに選んでもらって、城崎に滞在してもらって、21世紀の『城の崎にて』がもう一回できれば、またあなたたち50年生きていけるのではないですかという話で盛り上がったときに、初めて僕は城崎国際アートセンターは絶対成功するなと思ったのです。そういう歴史性とか、地理的条件とか、そういうものと、ある種のアイデア。アイデアは直感だから出るか出ないかわかりませんが、そこがマッチしたときにたぶんまちづくりというのは成功するので、その一回性の部分と、その様々な条件と、その両方を学生さんにうまく勉強していただくと、地域学というのは非常に深まっていくのではないかなと、今日一日、お伺いして思いました。ありがとうございます。

○小泉氏 ありがとうございます。学生の教育の目線で、大変重要なことをおっしゃっていただいたのですが、鳥取大学という組織で見ても、あるいは地域学部という組織で見ても、全く同じような話なのかと思いました。つまり、ある種のリベラルアーツ的な広い範囲での教員がそろっていて、かつ、その歴史とか文化とかというところに目くばせをしているという意味では、地域学部もそうですし、まさに実践されているそれぞれの方が、それぞれの地域の歴史とか住んでいるところの過去にすごく関心をお持ちでいらっしゃる。また実践して成功していくという意味でも、研究とかそれだけではなくて、実際に活動していくという意味でも、今、平田先生がおっしゃっていただいたことは重要なのかなということを強く思いました。

時間が大分過ぎてしまいました。本当はもっとということではありますが、総括セッションをこれで終わりにさせていただいて、これからも続けてこのことを考えていけたらと思っております。本日はどうもありがとうございました。

閉会挨拶

柳原邦光（鳥取大学地域学部副学部長）

今日、皆様、長い時間、ご参加いただきましてありがとうございます。それから、お話をしてくださいました方々、ありがとうございます。

今日のタイトルですが、サブタイトルで、「地域で『息づく』地域学へ向けて」というタイトルになっています。私、かなり気に入っているのですが、これは本当にやるとなると非常に難しいテーマだと思います。私たち地域学部の場合、実はこういうことは最初からかなり早い段階から考えてきました。私たち教員の方はそれぞれで専門の研究領域を持っているのですが、地域を研究する人は一人もいませんでした。地域学の専門家というのは一人もいませんでした。そうしたときにどうするかといったら、私たちがこれまで身につけてきたものは、そのままでは通用しないわけですから、地域の中で出てくる知恵とか経験というものを私たちが学ばせていただいて、それをここで書いてある地域学というものの中にうまく入れていくということだと思います。もちろん大学がやってきたことも、地域の人たちにとって何らかの形で貢献できるということは言えると思います。その二つをうまく組み合わせてということですが、大学の、今私たちの学部の教員にとって必要なのは、地域から立ち上がってくる知恵とか経験といったものから学ばせていただいて、それをある程度整理をしながら皆さんにまた提示して、またご意見をいただいて、またそれを磨き上げていくということではないかなと思っています。2011年に『地域学入門』という本を出しまして、その中で、今言ったようなことを書いております。ですから、今日、お話しいただいた皆さんの内容も、私たちの地域学の中にしっかり取り込んでいって地域学を深めていきたいなと思っています。

今日の基調講演のところで私が印象に残ったのは、新しい広場というものも必要ではないかということ。それは緩やかな結びつきといいますか、関係性でつながっていますから、そういうもののある場所として新しい広場が必要ではないかということと、もう一つは、コミュニケーションといいますか、これは個人でもそうだし地域でもそうですが、自分を開いていくという、そういう条件が必要ではないかという指摘だったのではないかと思います。そういうときに、技術文化とかアートというものが大きな役割を果たすということでお話されたのではないかと思います。

それから、あと分科会は、私は残念ながらAの方しか出られなかったのですが、Bももちろん聞きたかったのですが、平田先生がおっしゃったように、実は、皆さんのお話を聞いていますと、結局、皆さん開かれているのですね。開かれていて、外から来られる人、外から入ってくるものをきちっと受けとめるということをされているように思いました。あとは、やっぱり地域の場合は当然ですけれども、目の前に大きな課題がいくつもあって、それにもう向き合わざるを得ない状況です。そういう切実な状況に追い込まれたときに、やはり知恵というものがすぐ出てくるのではないかと。その知恵の働き方の中には、自然との結びつきを見直したり、その地域が持っている歴史との関係を見直したりという形で、そういうものをどんどん取り込んでいかれて、新たな行動という形で、地域の中にとってもいいものをつくっていらっしゃるのではないかなという印象を持ちました。ですから、私たちはそういうところをしっかりと学ばせていただいて、また来年も色々な方々に来ていただいて、地域学を深めていきたいと思っています。今日はどうもありがとうございます。

[資料1] 当日配布プログラム

地域学研究会第7回大会

地域課題と知のクロス 地域で「息づく」地域学へ向けて

【主催】鳥取大学地域学部

【後援】鳥取県・新日本海新聞社・鳥取大学尚徳同窓会

【プログラム】

(第1会議室) 10:00~11:45

- 開会挨拶 藤井 正 (鳥取大学地域学部地域学研究会会長)
- 理事挨拶 法橋 誠 (鳥取大学地域連携担当理事)
- 来賓挨拶 岡崎 隆司 (鳥取県地域振興部部長)
- 趣旨説明 家中 茂・福田 恵子 (鳥取大学地域学部地域学研究会副会長)
- 基調講演 平田オリザ「文化政策で人口減少を止める」

昼休憩 11:45~13:00

《とりぎん文化会館1階フリースペース》

- ポスター展示 (次項参照) コアタイム 11:45~13:00
- 学生有志からなる「トットリ式屋台」による販売

- 分科会 13:00~15:00 (会場:当日アナウンス)

分科会A [報告者] 渡邊 麻里子 (タルマーリー経営)

大谷 訓大 (皐月屋代表、智頭ノ森ノ学ビ舎代表)

岸本 智志 (智頭農林高等学校教頭)

[コーディネーター] 家中 茂 (鳥取大学地域学部地域学研究会副会長)

東根 ちよ (鳥取大学地域学部地域学研究会幹事)

分科会B [報告者] 川口 寿弘 (鳥取市中央人権福祉センター副所長)

岡 武司 (こども・らぼ代表)・松本 真理愛 (こども・らぼ副代表)

原 和正 (東西町地域振興協議会会長)

成清 仁士 (鳥取市中心市街地活性化協議会タウンマネージャー)

[コーディネーター] 小林 勝年 (鳥取大学地域学部教授)

福田 恵子 (鳥取大学地域学部地域学研究会幹事)

- 総括セッション 15:15~16:30 (第1会議室)

[総括セッションコーディネーター] 小泉 元宏 (立教大学社会学部准教授)

[総括セッション進行] 福田 恵子 (鳥取大学地域学部地域学研究会副会長)

分科会A・B報告およびディスカッション

- 閉会挨拶 柳原 邦光 (鳥取大学地域学部副学部長)

[資料2]ポスター発表

掲示時間:9:30~16:30 コアタイム:11:45~13:00

〈新学部紹介〉

A1	地域学部の新たな挑戦 福田恵子 (地域教育学科)		
〈教員・大学院生の研究活動〉			
B1	生業・生活統合型多世代共創コミュニティモデル 家中茂 (地域政策学科)	B4	鳥取県湖山池堆積物における微量元素濃度の経年変動と粒度との関係 佐々木眞 (地域学研究科 實來研究室 M1)
B2	歴史資料を活かした鳥取市街地の活性化プロジェクト 岸本覚・久保堅一 (地域文化学科)、来見田博基 (鳥取県立博物館)、成清仁士 (鳥取市中心市街地活性化協議会)	B5	“踏みつけ” “除草” と鳥取砂丘の植物 岩里実季 (地域学研究科 永松研究室 M2)
B3	鳥取砂丘海岸の粒径分布を千代川河口部・沿岸砂州の地形・堆積物から探る 宮脇隼輔 (地域学研究科 小玉研究室 M1)	B6	鳥取市上砂見における神幣柿の利用史および現状 地域固有品種の保全に向けた研究 富森加耶子 (地域学研究科 永松研究室 M1)

〈地域連携研究員の活動〉

C1	鳥取と民藝 木谷清人 (地域連携研究員)、野田邦弘 (地域文化学科)
C2	歴史的建築物を活用したアートによる中心市街地の再生 アート・プロジェクト HOSPITALE 赤井あずみ (地域連携研究員)、野田邦弘・小泉元宏 (地域文化学科)、浅井秀子 (工学研究科)
C3	T式ひらがなの音読支援 2015年度までのまとめと2016年度の第1回目音読検査の結果 赤尾依子 (地域連携研究員)、小林勝年 (地域教育学科)
C4	鳥取県内の公共空間に置かれている野外彫刻 作品修復作業の過程調査 石田英一 (地域連携研究員)、石谷孝二 (芸術文化センター)
C5	公共劇場を活用した劇場教育 (Theaterpädagogik) に関する一考察 ドイツ・ヘッセン州 フランクフルト歌劇場の実践より 小倉知子 (地域連携研究員)、西岡千秋 (芸術文化センター)

〈高校連携・自治体連携の取り組み〉

D1	兵庫県香美町の「ふるさと教育」に関する実地調査 文化財の活用に着目して 河原修平・徳山敦也・橋詰航・平見風 (地域教育学科3年)、武田信吾 (地域教育学科)
D2	学びの実践の場として地域を活用する可能性と課題 岩美高校を事例として 森田岬 (地域教育学科4年)、福田恵子 (地域教育学科)
D3	富栄養化湖沼における自然植生及び微生物ニッチを活性化させた環境改善 福岡三喜 (工学研究科)

〈学生による地域活動〉

E1	“わいわい淀屋”における学生活動 鳥取県倉吉市のNPO明倫NEXT100等との協働 鳥大たのしみまちづくり連
E2	鳥取大生と地域住民の交流と協働のまちづくり えんがわ活動の取り組み紹介 えんがわ実行委員会、生田光 (地域政策学科3年)
E3	児童文化研究会の活動と報告 遠山樹生・羽柴美咲・繁戸亮太
E4	ボレボレキッズについて 成宮えり
E5	鳥取大屋台部による地域活動 鷺谷ゆい (地域政策学科3年)

[資料3] チラシ

会場へのアクセス

徒歩 浜島駅から若桜街道を県庁方向へ20分

バス

- 鳥取/スターミナ(JR鳥取駅)から湯山・鳥大・買置館などで南(自前前)下車(所要時間:5分)
- 100円循環バス(ぐるぐる鳥)で「鳥取文化会館(とりぎん文化会館)」下車(所要時間:青コース13分、赤コース16分)

車

- 鳥取駅から約5分
- 鳥取駅西コンパウンドから約15分(タクシー、空港連絡バス)
- 駐車可能台数は約300台です。利用は無料ですが、図書館及び公文書館との共用のため駐車台数に限りがあります。お急ぎの駐車場は混雑が予想されますので、できるだけ公共交通機関をご利用ください。

〒680-0017
鳥取市東通101-5
TEL:08572124700

※参加の際に支援の必要な方は事前にご連絡ください
問合せ: 鳥取大学地域学部庶務係 tel.0857-31-5073
主催: 鳥取大学地域学部
後援: 鳥取県・新日本新聞社・鳥取大学尚徳同窓会

地域で「息づく」 地域学へ向けて

鳥取大学
Tottori University

地域学研究会第7回大会 地域課題と知のクロス

2016年 **11/26** 土

10:00~16:35 (9:30受付開始)
とりぎん文化会館第1会議室他

申込不要・参加無料

基調講演: 「文化政策で人口減少を止める」 平田オリザ

劇作家・演出家・「青年団」主宰、東京藝術大学CO研究推進准教授、大阪大学COデザインセンター客員教授、国際教養大学に掲載されたワークショップ方法論により多くの子どもたちが演劇を創る体験をしている。戯曲に「東京ノート」(評田園土戯曲賞)「その河をこえて、五月」(朝日舞台芸術賞グランプリ)、著書にわかりあえないことから〜コミュニケーション能力とは何か?「下り坂をそそぐ」と下る」など多数。

学部長挨拶

地域学研究会第7回大会 地域課題と知のクロス
—地域で「息づく」地域学へ向けて—



人口減少と都市部への人口集中が深刻な課題として認識され、地方創生に関する人材の育成がますます重要になってきました。鳥取大学は、このような社会的な要請に応えて、地(知)の拠点大学として地方創生にかかわる教育力を総合的に高めるための戦略を展開し、全学的な大学院と学部の改組を行います。

これまで地域学では、学際的な学問領域として「地域学」を構築し、地域とそこで生活する人々とのかかわりを探求し、地域のキーパーソンを育てる教育研究を行ってきました。平成29年度から設置予定の新たな地域学部では、これまでの実績の上に、生活の質の向上とその基盤である地域の持続可能な発展をめざして、地域との連携・協働をさらに重視した教育研究に取り組んでいきます。

今年度の地域学研究会第7回大会では、平田オリザ氏の基調講演を柱として、地域の課題を題材に取組んでおられる方々に話題提供いただく分科会を企画しています。そして、総括セッションでは、地域の「智」と大学の「知」を重ね合わせ、互いに読み解き、新たな知と実践を生み出すヒントを探していきたいと考えています。本大会のテーマ「地域で「息づく」地域学へ向けて」は、地域学という学問が大学の壁を越えて、地域の人々によってそれぞれの生活に取り込まれ、課題解決に向かうことをめざしたもので、新たな地域学部の第一歩になることを期待しています。

鳥取大学地域学部長 藤井 正



分科会

A



渡邊麻里子
(タムラマリー) 経産

「タムラマリー」は千葉で開業、岡山への移転を経て、2015年鳥取県智頭町でオープン。智頭の里山の恵みを活かし、野生の前で発酵させるパンとビールの製造、木材でビレッジを醸成カフェの営業を通し、地域内循環を目指す。



大谷 剛大
(智頭町代表、智頭ノ森/学/学舎代表)

智頭町那岐・五月田生まれ。海外での生活を経て、2010年「扉月屋」を興し、米づくりと自伐型林業を担う。2015年に、山を大切にしたいというマインドを同じくする仲間と「智頭ノ森/学/学舎」を設立。



岸本 智志
(智頭農林高等学校教頭)

用瀬町出身。地元高校を卒業後、大学で地理学を専攻。神奈川県で高校教員を25年間勤め、その間大学院で学習科学を専修後、鳥取県へUターン。智頭町板井原で高校生と共に地域行事に参加しながら地域文化の保存活動に取り組む。

分科会

B



岡 武司
(こどもらぼ代表)

生活困窮者自立支援制度に基づく相談支援の拠点である鳥取市中央福祉センターと、地域発「子ども学習支援団体「こども食室」」世帯まるごと支援を展開。



川口 寿弘
(智頭町職方会代表)

生活困窮者自立支援制度に基づく相談支援の拠点である鳥取市中央福祉センターと、地域発「子ども学習支援団体「こども食室」」世帯まるごと支援を展開。



松本真実理
(こどもらぼ副代表)



原 和正
(東西地域振興協議会会長)

東西地域振興協議会会長、南都立西白(小学校)コミュニティスクール会長、NPO法人ふんふん山デザイン機構理事。子育て支援(放課後児童クラブ)、地域防災、防犯活動、空家利用による高齢者の居場所(地域コミュニティホーム)運営など住民参加で活気あるまちづくりを推進。



成清 仁士
(鳥取市中央市街地活性化協議会
タムラマリー代表)

1980年岡山県生まれ。広島大学・大学院で建築史・意匠学を学ぶ。2010年安田女子大学家政学部生活デザイン学科助手。2012年よりNPO法人数教町家トラスト理事。2015年4月現職に就任。地域資源発掘や新規事業開拓、活動支援に取り組む。博士(工学)。専門は都市史、まちづくり。

スケジュール

- 9:30 受付開始
 - 10:00 開会挨拶
 - 10:10 大会趣旨説明
 - 10:30 **基調講演**
「文化政策で人口減少を止める」
平田オリザ
 - 11:45 **昼食** ホスターセッション
 - 13:00 **分科会**: ※2会場で行います
 - 15:00 休憩
 - 15:15 **総括セッション**
 - 16:30 閉会挨拶
 - 16:35 終了
- ※メイン会場: 第1会議室
サブ会場: 第5・6会議室

総括セッションコーディネーター



小泉 元宏
(立教大学社会学部准教授)

専門は、社会学、文化政策研究。市民参加型のアート・音楽や、それを生み出す創造性と、社会形成のかかわりに関する研究・教育・実践を行っています。現在、立教大学社会学部准教授、鳥取大学地域学部非常勤講師など。



[資料4] 新聞記事：大会前 (平成28年11月17日 日本海新聞)

11/17(木) 日本海新聞16面

(第3種郵便物認可)

日本

読者の広場

鳥取大学地域学研究会第7回大会「鳥取大学とびきん文化会館」で「鳥取大学地域学研究会第7回大会」を開催します。鳥取大学に地域学部が創設されて12年目、あらためて「地域学」は、人々がよりよく生きることに、地域社会がより豊かになることのために、どれほどの支えになったのだろうかという疑問が湧きます。「地域学部っていったい何を勉強するところなの？」とぼんやりと尋ねられてきたことですが、その特徴をひと言でいえば、「地域を対象とした」研究教育であることとまらず、「地域のなかで、地域とともに」実践する研究教育を目標としていることだと考えています。

地域学に先立って、人々のなかから生まれてきた日本の学問の伝統に「民間学」があります。「私たちが生きていくこと、やがて死を迎えるまでに自分の問題を探りあてることを学問の道と認めるならば、そこに育つ学問は民間学である」「『民間学事典』(この「民間学」を「地域学」と言い換えば、「地域学」は「息づく」地域学」という言葉に込めた私たちの思いを押し量っていただきますでしょうか。

鳥取大学地域学研究会第7回大会

26日、とびきん文化会館

「地域に『息づく』地域学」に向けて

地域学が大学の外に出ようとするのは、暮らしを組み立てていくうえでの課題の発見と、それに向き合って未来を創り出そうとする「知の実践」は、地域のなかでこそ生まれているのだという確信があるからです。そこに依拠してこそ、20世紀型の専門分化した研究教育を乗り超えることができ、地域学を学ぶ学生たちが、そのような地域と大学を媒介する「実践の知」の担い手として成長していくという希望があるからです。

本年度の地域学研究会は、このような確信と希望をもって、基調講演に平田オリザ氏(劇作家・演出家)を、そして、分科会に地域で暮らしに根づいた活動をされている方々をお招きし、みなさまと語り合いたいと思います。

家中 茂(鳥取大学地域学部長)

◆「鳥取大学地域学研究会第7回大会」は26日午前10時から、とびきん文化会館第1会議室などで、申し込み不要、参加無料。問い合わせは電話0857(31)5073、鳥取大学地域学部長事務係へ。

[資料5] 会場風景



【ポスターセッション】



【総括セッション】

[資料6] 新聞記事：大会後（平成28年11月27日付 日本海新聞）

文化は地方再生切り札

平田オリザさんが講演

学域研究会
大鳥研

鳥取大学地域学研究会が26日、鳥取市のとりぎん文化会館で開か



れた。「地域で息づく地域学」をテーマに、劇作家で演出家の平田オリザさんが講演した。

オリザさんの講演や分科会があり、人口減少や格差社会など地域が抱える諸問題の解決策について考えた。

鳥大地域学部が毎年開催。大学関係者や学生、自治体職員など約200人が参加した。

平田オリザさんは地方の人口減少問題について講演。都市と地方の文化格差の広がりや、思考力や表現力を問う新しい大学入試制

度に触れ「小さい時からコミュニケーション力を養う文化資本の蓄積が大切」と指摘した。

解決策として、劇場

や多目的広場などを備えた青森県八戸市の

「八戸ポータルコミュニ

ジウム」を例に、「現代社会に合った新しい

広場づくり」を提案。

「文化は人口減少の時代、地方再生の切り札

になる」と述べた。

里山の恵みを生かした暮らしや子どもの生活支援など、地域に根

差した活動をする人たちによる分科会も開か

れた。

（野木純）